

西原大塚遺跡 第223地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2021

埼玉県志木市教育委員会

志木市の文化財 第83集 西原大塚遺跡第223地点 埋蔵文化財発掘調査報告書 埼玉県志木市教育委員会

西原大塚遺跡第 223 地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2021

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 柚木 博

ここに刊行する『西原大塚遺跡第 223 地点埋蔵文化財発掘調査報告書』は、教育委員会が令和元年度に受託事業として実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

現在、市内には、15カ所の埋蔵文化財包蔵地が登録されています。これらの埋蔵文化財は祖先が残してきた貴重な文化遺産であり、私たちはこれを大切に保護し後世に伝えていく使命があると言えます。

また、西原大塚遺跡については、これまでの調査成果から、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世・近世までの幅広い時期にわたる複合遺跡であることが判明しています。

さて、今回報告する西原大塚遺跡第 223 地点では、縄文時代～近世にかけての遺構・遺物が多数発見されました。

このように、今回の調査においても本市の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な資料を得ることができました。この成果が郷土史研究をはじめ、多くの人々に幅広く活用されることを切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別の御理解と御協力を頂いた事業主体者、そして深い御理解と御協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者の皆様に対し、心から感謝申し上げます。

例 言

1. 本書は、令和2年度に発掘作業を実施した、埼玉県志木市に所在する西原大塚遺跡第223地点の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、道路新設工事及び分譲住宅建設に伴う記録保存のための発掘調査として、文化財保護法第99条に基づき、志木市教育委員会が調査主体者として実施したものである。
3. 本調査の実施にあたり、マックホーム株式会社（代表取締役 氏居照和）・志木市教育委員会・株式会社東京航業研究所（代表取締役 中本直士）の三者による協定を締結した上で、株式会社東京航業研究所が発掘調査支援業務を行った。
4. 発掘作業は令和2年4月9日から令和2年6月19日まで行い、整理作業・報告書刊行作業を令和3年7月30日まで行った。
5. 本書は尾形則敏・徳留彰紀・大久保聡が監修し、編集は小森暁生が行った。執筆は第1章、第2章第1節を尾形、第2章第2・3節、第3章第1・4節、第4章第1節を坂下貴則、第3章第2・3節、第4章第2・3節を遠藤知成、付編を株式会社東京航業研究所地球化学分析室が担当した。
6. 本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターで一括して保管している。
7. 調査組織は以下の通りである。

【志木市教育委員会組織】

調査主体者	志木市教育委員会
教 育 長	柚 木 博
教 育 政 策 部 長	北 村 竜 一
教 育 政 策 部 次 長	大 熊 克 之（～令和2年度）
生 涯 学 習 課 長	山 本 勲（～令和2年度）
〃	土 崎 健 太（令和3年度～）
生 涯 学 習 課 副 課 長	中 原 敦 也（～令和2年度）
〃	吉 成 和 重（令和3年度～）
生 涯 学 習 課 主 幹	浅 見 千 穂
生 涯 学 習 課 主 査	武 井 香 代 子（～令和2年度）
〃	尾 形 則 敏
〃	徳 留 彰 紀
生 涯 学 習 課 主 任	松 永 真 知 子（～令和2年度）
〃	武 井 香 代 子（令和3年度～）
〃	大 久 保 聡
〃	石 川 千 尋（令和3年度～）
生 涯 学 習 課 主 事 補	鈴 木 楓 月（～令和2年度）
〃	遠 藤 彪 雅（令和3年度～）
調 査 担 当 者	尾 形 則 敏
〃	徳 留 彰 紀

// 大久保 聡
志木市文化財保護審議会 井上 國夫 (会長)
深瀬 克 (委員)
上野 守嘉 (委員)
新田 泰男 (委員)
金子 博一 (委員) (令和2年度～)

【株式会社東京航業研究所】

○発掘調査

調査員 坂下 貴則
現場代理人 遠藤 知成
調査補助員 渡部 一真
作業員 伊藤 茂・植村 智美・荻島 里江・小坂 信雄・小林 義明・空 博己
中山 幸恵・西村 由美子

○整理作業

調査員 坂下 貴則
調査補助員 遠藤 知成
作業員 岩本多恵子・大久保 文子・酒井 成男・田上 達恵・田口 陽祐・竹内 あい
田邊 文章・東條 高士・中原 はつね・中山 幸恵・野島 泉・野村 果央
布施比登美・村井 建三・村上 京子・森田 望・柳澤 美樹・大和 修
大和菜保子・山羽 孝

8. 発掘作業及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課・（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館

早坂 廣人・長井 光彦

9. 本報告に係る文化財保護法に基づく各種届出等及び指示通知については、下記の通りである。

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）

令和2年4月14日付け 教文資第4－51号

○埋蔵物の文化財認定について（通知）

令和2年9月8日付け 教文資第7－70号

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第1図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製

第2図 1：5,000 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成27年4月発行
株式会社ゼンリン

2. 本書の国家座標、緯度、経度は、世界測地系に則している。

3. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

4. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。

5. ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。

6. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

7. 挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内に内容を示した。

8. 土器一覧表「法量」項中にある表記については、以下のとおりである。また、現存値は[]、推定値は()を付した。

高：器高 口：口径 底：底径 厚：器厚

9. 遺構の略記号は、以下のとおりである。

Y = 弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡 H = 奈良・平安時代の住居跡

F P = 縄文時代の炉穴 D = 土坑 M = 溝跡

目 次

はじめに

例 言／凡 例／目 次／挿図目次／表 目 次／図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 遺跡の概要	7
第2章 発掘調査の概要	10
第1節 調査に至る経緯	10
第2節 調査の経過	11
第3節 基本層序	13
第3章 検出された遺構と遺物	15
第1節 縄文時代	15
第2節 弥生時代後期～古墳時代前期	23
第3節 奈良・平安時代	38
第4節 遺構外出土遺物	45
第4章 調査のまとめ	53
第1節 縄文時代	53
第2節 弥生時代後期～古墳時代前期	53
第3節 奈良・平安時代	56
[付編] 自然科学分析	
黒曜石の産地推定結果報告書	63

図 版

報告書抄録

挿図目次

第 1 図	市域の地形と遺跡分布 (1 / 20,000) ……………	2	第 27 図	634 号住居跡 (1 / 60)・炉 (1 / 30)・ 貯蔵穴 (1 / 30)……………	34
第 2 図	西原大塚遺跡の調査地点 (1 / 5,000) ……………	9	第 28 図	634 号住居跡遺物出土状態 (1 / 60) ……………	35
第 3 図	確認調査遺構分布図 (1 / 300) ……………	10	第 29 図	634 号住居跡出土遺物 (1 / 4・1 / 3) ……	35
第 4 図	遺構分布図 (1 / 300) ……………	12	第 30 図	56 号溝跡 (1 / 100・1 / 60) ……………	36
第 5 図	TP 配置図 (1 / 250) ……………	13	第 31 図	56 号溝跡出土遺物 (1 / 4・1 / 3) ……………	37
第 6 図	基本層序 (1 / 60) ……………	14	第 32 図	奈良・平安時代遺構全体図 (1 / 250) ……	38
第 7 図	縄文時代遺構全体図 (1 / 250) ……………	15	第 33 図	26 号住居跡 (1 / 60)・カマド (1 / 30) ……	40
第 8 図	21 号炉穴 (1 / 60) ……………	16	第 34 図	26 号住居跡遺物出土状態 (1 / 60) ……	41
第 9 図	縄文時代土坑 (1 / 30・1 / 60) ……………	18	第 35 図	26 号住居跡出土遺物 (1 / 4) ……………	41
第 10 図	901 号土坑出土遺物 (1 / 3) ……………	19	第 36 図	27 号住居跡 (1 / 60)・カマド (1 / 30) ……	42
第 11 図	902 号土坑出土遺物 (1 / 3) ……………	21	第 37 図	27 号住居跡出土遺物 (1 / 4・1 / 3) ……	43
第 12 図	903 号土坑出土遺物 (1 / 4・1 / 3) ……	21	第 38 図	13 号溝跡 (1 / 60) ……………	44
第 13 図	904 号土坑出土遺物 (1 / 3) ……………	22	第 39 図	縄文時代遺構外出土遺物 1 (2 / 3・1 / 3)……………	46
第 14 図	906 号土坑出土遺物 (1 / 4・1 / 3) ……	22	第 40 図	縄文時代遺構外出土遺物 2 (1 / 3) ……	47
第 15 図	弥生時代後期～古墳時代前期遺構全体図 (1 / 250) ……………	23	第 41 図	弥生時代遺構外出土遺物 (1 / 4・1 / 3)……………	51
第 16 図	628 号住居跡 (1 / 60)・炉 (1 / 30)・ 遺物出土状態 (1 / 60)……………	25	第 42 図	奈良・平安時代以降遺構外出土遺物 (1 / 4・1 / 3)……………	52
第 17 図	628 号住居跡出土遺物 (1 / 4・1 / 3) ……	25	第 43 図	弥生時代住居模式図パターン (宅間 2017) を改定 ……………	54
第 18 図	629 号住居跡 (1 / 60) ……………	26	第 44 図	56 号溝とその周辺の遺構 (1 / 1,000)……………	55
第 19 図	630 号住居跡 (1 / 60)・炉 (1 / 30) ……	26	第 45 図	西原大塚遺跡における奈良・平安時代の 住居遺構配置図 (1 / 3,000) ……………	59
第 20 図	631 号住居跡 (1 / 60)・炉 (1 / 30) ……	28	第 46 図	望月ダイアグラム (Rb 分率図) ……………	67
第 21 図	631 号住居跡遺物出土状態 (1 / 60) ……	29	第 47 図	望月ダイアグラム (Sr 分率図) ……………	67
第 22 図	631 号住居跡出土遺物 (1 / 4・1 / 3・2 / 3)……………	29	第 48 図	望月ダイアグラム (Rb 分率拡大図) ……	68
第 23 図	632 号住居跡・遺物出土状態 (1 / 60) ……	30	第 49 図	望月ダイアグラム (Sr 分率拡大図) ……	68
第 24 図	632 号住居跡出土遺物 (1 / 4) ……………	31			
第 25 図	633 号住居跡 (1 / 60)・炉 (1 / 30)・ 遺物出土状態 (1 / 60)……………	32			
第 26 図	633 号住居跡出土遺物 (1 / 4) ……………	32			

表 目 次

第 1 表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1	第 14 表	26 号住居跡出土遺物一覧	41
第 2 表	発掘調査工程表	11	第 15 表	27 号住居跡出土遺物一覧	43
第 3 表	901 号土坑出土遺物一覧	20	第 16 表	縄文時代遺構外出土遺物一覧(1)	48
第 4 表	902 号土坑出土遺物一覧	21		縄文時代遺構外出土遺物一覧(2)	49
第 5 表	903 号土坑出土遺物一覧	21		縄文時代遺構外出土遺物一覧(3)	50
第 6 表	904 号土坑出土遺物一覧	22	第 17 表	弥生時代遺構外出土遺物一覧	51
第 7 表	906 号土坑出土遺物一覧	22	第 18 表	奈良・平安時代以降遺構外出土遺物一覧	52
第 8 表	628 号住居跡出土遺物一覧	26	第 19 表	西原大塚遺跡出土の土製勾玉一覧	56
第 9 表	631 号住居跡出土遺物一覧	30	第 20 表	西原大塚遺跡における奈良・平安時代住居跡一覧	58
第 10 表	632 号住居跡出土遺物一覧	31	第 21 表	分析の各種条件	65
第 11 表	633 号住居跡出土遺物一覧	32	第 22 表	試料の X 線強度	66
第 12 表	634 号住居跡出土遺物一覧	35	第 23 表	試料の元素濃度	66
第 13 表	56 号溝跡出土遺物一覧	37	第 24 表	推定された判別群	66

図 版 目 次

図版 1

1. 調査区全景
2. A 区完掘状況
3. B 区完掘状況

図版 2

1. 21 号炉穴(西から)
2. 901 号土坑(南から)
3. 901 号土坑遺物出土状態(南から)
4. 902 号土坑(南から)
5. 903 号土坑(南から)
6. 903 号土坑遺物出土状態(南から)
7. 903 号土坑遺物出土状態(北西から)
8. 904 号土坑(南から)

図版 3

1. 905 号土坑(南から)
2. 906 号土坑(東から)
3. 906 号土坑遺物出土状態(東から)
4. 628 号住居跡(西から)
5. 628 号住居跡炉(西から)
6. 628 号住居跡炉遺物出土状態(西から)
7. 629 号住居跡(東から)
8. 630 号住居跡(西から)

図版 4

1. 630 号住居跡(北から)
2. 630 号住居跡炉(西から)
3. 631 号住居跡(南から)
4. 631 号住居跡遺物出土状態(南から)
5. 631 号住居跡遺物出土状態(北から)

6. 631 号住居跡赤色砂利層(南から)

7. 631 号住居跡遺物出土状態(南から)

8. 631 号住居跡炉(南から)

図版 5

1. 632 号住居跡(東から)
2. 632 号住居跡貯蔵穴(南から)
3. 633 号住居跡(北から)
4. 633 号住居跡炉(西から)
5. 634 号住居跡(東から)
6. 634 号住居跡炉(東から)
7. 634 号住居跡貯蔵穴(西から)
8. 634 号住居跡 P 2(南から)

図版 6

1. 56 号溝跡(南から)
2. 56 号溝跡(南から)
3. 56 号溝跡(東から)
4. 56 号溝跡遺物出土状態(北から)
5. 56 号溝跡遺物出土状態(北から)

図版 7

1. 26 号住居跡(南から)
2. 26 号住居跡遺物出土状態(西から)
3. 26 号住居跡カマド(南から)
4. 27 号住居跡(南から)
5. 27 号住居跡遺物・炭化物出土状態(南から)
6. 27 号住居跡炭化物出土状態(南から)

7. 27号住居跡遺物出土状態(南から)

8. 27号住居跡遺物出土状態(南から)

図版 8

1. 27号住居跡カマド(南から)

2. 27号住居跡カマド遺物出土状態(南から)

3. 13号溝跡(東から) 4. 13号溝跡(南から)

図版 9

1. 901号土坑出土遺物

図版 10

1. 902号土坑出土遺物 2. 903号土坑出土遺物

3. 904号土坑出土遺物 4. 906号土坑出土遺物

5. 628号住居跡出土遺物

図版 11

1. 631号住居跡出土遺物 2. 632号住居跡出土遺物

3. 633号住居跡出土遺物 4. 634号住居跡出土遺物

5. 56号溝跡出土遺物

図版 12

1. 26号住居跡出土遺物 2. 27号住居跡出土遺物

図版 13

1. 縄文時代遺構外出土遺物(1)

図版 14

1. 縄文時代遺構外出土遺物(2)

図版 15

1. 縄文時代遺構外出土遺物(3)

図版 16

1. 弥生時代後期～古墳時代前期遺構外出土遺物

2. 奈良・平安時代以降遺構外出土遺物

3. 自然科学分析黒曜石遺物

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 市域の地形と遺跡

(1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北 4.71km、東西 4.73km の広がりを持ち、面積は 9.05km²（註1）、人口約7万5千人の自然と文化の調和する都市である。

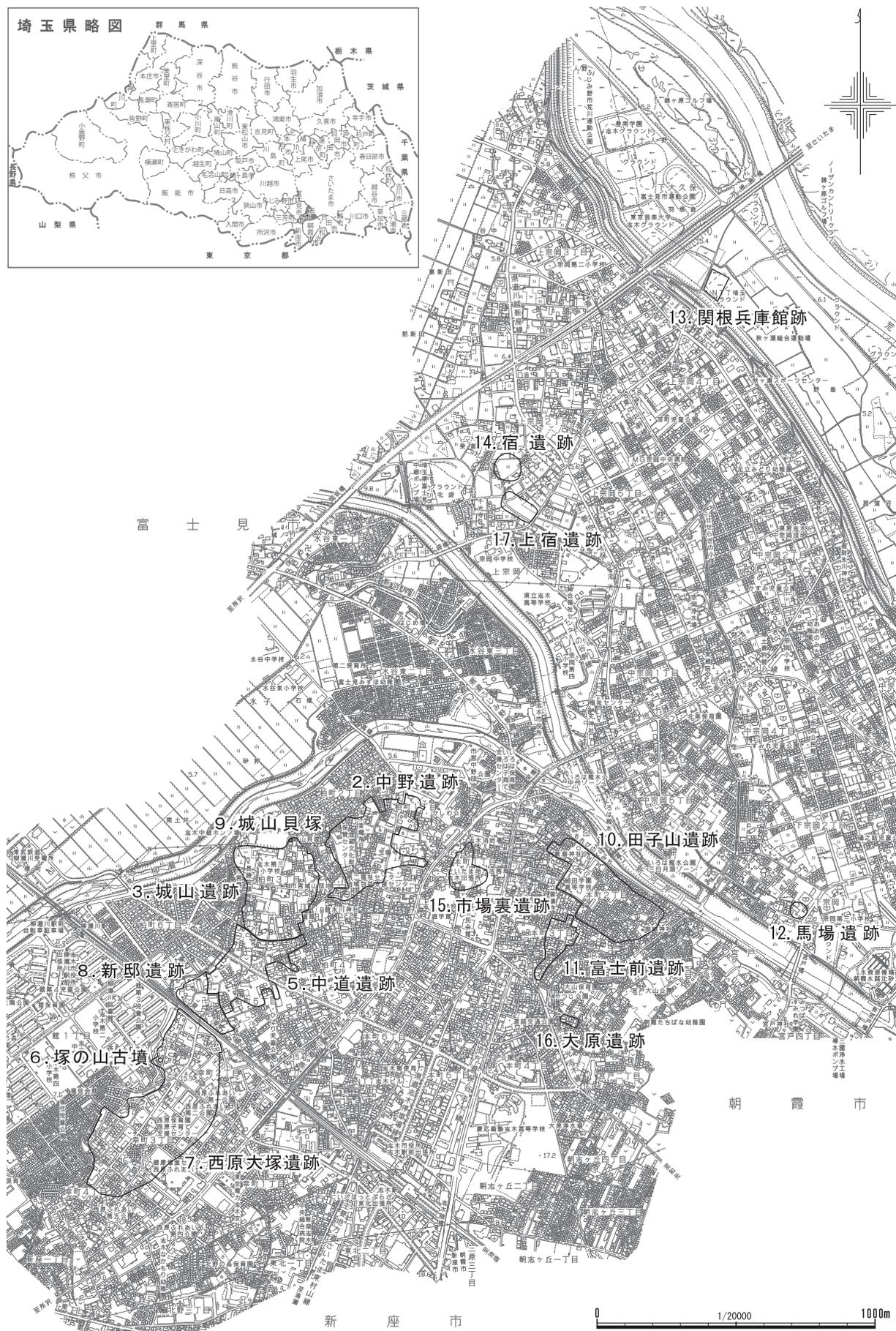
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新邸遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）が認められる。最新では、平成30年12月、新たに新河岸川左岸流域で上宿遺跡（17）

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物	
2	中野	70,950	m	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、地下式坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	82,100	m	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（中・後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鑄造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、鑄造関連遺物等
5	中道	54,420	m	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800	m	林	古墳？	古墳？	古墳？	なし
7	西原大塚	164,960	m	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、地下式坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	20,080	m	畑・宅地	"貝塚・集落跡・墓跡"	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900	m	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	74,030	m	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	14,830	m	宅地	集落跡	縄文、弥（後）～古（前）、平安、近世以降	住居跡、土坑？、溝跡？	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800	m	畑	集落跡	古（前）	住居跡？	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900	m	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700	m	水田	館跡	中世	溝跡、井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	13,800	m	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡、方形周溝墓、土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16	大原	1,700	m	宅地	不明	近世以降？	溝跡	なし
17	上宿	8,600	m	水田・宅地	集落跡	平安、中・近世	住居跡、土坑、溝跡、井戸跡	土師器、須恵器
合計		522,570	m					

令和3年4月30日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1 / 20,000)

が発見され、自然堤防上に位置する遺跡の存在も明らかにされつつある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した13遺跡に塚の山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた15遺跡である（第1図・第1表）。

（2）歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年度の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で、礫群や石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6（1994）年度には2ヶ所、平成7（1995）年度には1ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。最新では、令和元（2019）年度に第224地点で立川ローム層の第Ⅳ層下部～第Ⅴ層上部・第Ⅶ層から石器集中地点と礫群が検出されている。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点では、立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。平成28（2016）年度の中野遺跡第91⑰地点からは、礫群1基が検出された。

また、城山遺跡では、平成12・13（2000・2001）年度に発掘調査が実施された第42地点から、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の2ヶ所で石器集中地点が検出されている。平成20・21（2008・2009）年度の第62地点（道路・駐車場部分）でも1ヶ所の石器集中地点が検出され、ナイフ形石器・剥片が出土している。平成23（2011）年度の第71地点では、立川ローム層の第Ⅳ層下部～第Ⅴ層上部で石器集中地点2ヶ所、礫群9基が検出された。最新では、令和元（2019）年度の第96地点で立川ローム層の第Ⅳ層下部～第Ⅴ層上部・第Ⅶ層で石器集中地点と礫群が検出されている。

2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4（1992）年度に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6（1994）年度の城山第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10（1998）年度の田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18（2006）年度の中道遺跡第65地点で検出された早期末葉（条痕文系）の10号住居跡1軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。平成23（2011）年度の田子山遺跡第121地点のローム上層の遺物包含層から撚糸文系土器・石器がまとまって出土している。また、城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚遺跡・新邸遺跡で前期中葉の黒浜式期の住居跡が検出され、新邸遺跡のものは貝

塚をもつ住居跡である。最新では、令和元(2019)年度に発掘調査が実施された城山遺跡第96地点から、前期後葉の諸磯a式期で、貝層をもつ住居跡が4軒検出され、貝類としては、ヤマトシジミ・マガキが主体であった。平成2(1990)年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で200軒以上の住居跡が環状に配置されていることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡1軒が確認されているが、平成27(2015)年度の中道遺跡第76地点からは、加曾利EIV式の両耳壺を出土する住居跡1軒が検出された。

後期では、西原大塚遺跡の西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所が検出されている。平成25(2013)年度に発掘調査が実施された中野遺跡第85地点からは、称名寺式期の市内初の柄鏡形住居(敷石住居)1軒が検出されている。また、その他の遺構としては、平成5・6(1993・1994)年度の田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、称名寺式期の土器が出土している。平成26(2014)年度の西原大塚遺跡第204地点や平成28(2016)年度に発掘調査された中野遺跡第91地点から、包含層出土遺物として、縄文時代後期(称名寺式～堀之内式期)の遺物が比較的まとまって出土している。最新では、令和元(2019)年度の西原大塚遺跡第216地点から、堀之内1式期の住居跡1軒と遺物包含層が検出され、良好な土器・石器が出土している。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、前期の遺跡は検出されていないが、中期については、令和元(2019)年度に発掘調査された城山遺跡第96地点で、市内初となる宮ノ台式期の住居跡1軒・方形周溝墓1基が検出された。住居跡からは、壺・甕・高坏、挟入柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・石包丁などが良好な状態で出土している。

後期から古墳時代前期と考えられる遺跡は数多く検出されている。中でも、平成28(2016)年度の中野遺跡第91地点からは、弥生時代後期前葉に比定される久ヶ原式土器を出土する住居跡が発見されている。平成5・6(1993・1994)年度に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子(イネ・アワ・ダイズなど)、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が630軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。平成24(2012)年度の第179地点からは、遺存状態は良好ではないが、市内初の銅釧が出土している。

昭和62(1987)年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出され

てきたが、平成15（2003）年度に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年度の中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年度に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見され、この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土製品をはじめ、畿内系の二重口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土している。

なお、鳥形土製品1と壺形土器4点の計5点は、考古資料として市指定文化財に指定されている。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年度に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7（1995）年度の中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に7世紀前葉から7世紀中葉にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、7世紀前葉以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後葉から7世紀後葉にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で260軒を超え、次いで中野遺跡で約60軒を数える。

また、住居跡以外では、平成5（1993）年度に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整形円で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14（2002）年度の田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられ、今後この一帯での古墳の発見に期待されている。

5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ

る、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げる事ができる。城山遺跡では、平成8（1996）年度に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「富」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。平成20・21（2008・2009）年度の城山遺跡第62地点の調査では、平安時代の241号住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶^{ふじゆしんぼう}が2枚とその近くからは鉄鎌1点と土錘1点^{つちづみ}が出土しており、祭祀行為が行われたと考えられる貴重な例として、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年度の第24地点では、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を超える土坑群が検出されている。平成5・6（1993・1994）年度に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群（入間市）の製品と南比企窯跡群（鳩山町）の製品という生産地の異なる須恵器坏が共伴して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

なお、以上のうち、城山遺跡128号住居跡出土の銅印ほか9点の遺物と城山遺跡第241号住居跡出土の富壽神寶ほか2点の遺物は、考古資料として、平成25年3月1日付けで、市指定文化財に指定されている。

6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『館村旧記』^{たてむらきゆうき}（註2）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。近年では、『廻国雑記』^{かいこくざつぎ}（註3）に登場する「大石信濃守館」^{おおいししののかみのやかた}が「柏の城」に相当し、「大塚十玉坊」^{おおつかじゆうぎよくぼう}についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山 1988・2002）。

また、平成7（1995）年度に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。さらに、平成8（1996）年度の第35地点から、鑄造関連の遺構が検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鑄型、三叉状土製品、砥石などが出土している。最新資料では、平成27・28（2015・2016）年度に発掘調査された第89地点の調査により、第35地点の鑄造関連の捨て場が明らかになった。この調査により、鍋本体の大型鑄型、鍋の耳部分の小型鑄型、三叉状・四叉状土製品・トリベ・砥石などの道具類や鉄滓（スラッグ）などの大量の遺物が斜面に流れ込むように出土した。

平成13（2001）年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成6（1994）年度の第21地点から、当市では初めて、鎧^{よろい}の札である鉄製品1点と鉄鎌1点^{かね}が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成 11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第 49 地点からは、段切状遺構の坑底面から頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した 67 号土坑、その他、ピット列・土坑・井戸跡・溝跡などが検出された。その後、平成 27（2015）年度に第 49 地点の北側に隣接する第 95 地点の調査が実施され、段切状遺構の坑底面より、新た土坑 45 基・井戸跡 2 基・溝跡 1 本・ピット 231 本などが検出された。土坑のうち、市内で初めて「T 字形」の火葬土坑 5 基が検出されたことは特筆すべきである。この「T 字形」の火葬土坑は、平成 29（2017）年度の中野遺跡第 102 地点でも発見され、こうした墓域的な様相が僅かながら判明しつつある中、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する遺構ではないかとの見方がある。最新では、令和元（2019）年度の城山遺跡第 96 地点でも「T 字形」の火葬土坑が 2 基発見されている。

中道遺跡では、昭和 62（1987）年度の第 2 地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成 7（1995）年度の中道遺跡第 37 地点からは、人骨と古銭 5 枚を出土した土坑墓 1 基と 13 世紀に比定される青磁盤 1 点を出土した道路状遺構 1 条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和 60（1985）年度の第 1 地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成 15（2003）年度の新邸遺跡第 8 地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓 2 基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院」^{しょうりんざんかんのんじだいじゆいん} 関連遺構と考えられる。その後、平成 25（2013）年度には、第 74 地点の発掘調査が実施され、段切状遺構の平場から多数のピットや溝跡などが検出され、上記を裏付ける追加資料となった。

7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成 5・6（1993・1994）年度に発掘調査が実施された田子山遺跡第 31 地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治 2～5 年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成 15（2003）年度の新邸遺跡第 8 地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第2節 遺跡の概要

西原大塚遺跡は、志木市の南西端部にある幸町 2～4 丁目一帯に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の西方約 1 km に位置している。北東—南西方向に約 700m、北西—南東方向に約 150m の広がりを持ち、遺跡面積 164,960㎡の市内最大規模の遺跡である。

本遺跡は、柳瀬川を北西に望む武蔵野台地北東端の台地の縁辺に形成されている。標高は 10～18m と遺跡内で 8 m の比高差があるが、遺跡範囲の大部分は標高 14～16m に位置しており、おおむね緩やかな傾斜をもち台地から低地に移行している。遺跡北西部分の台地下では、今でも小規模な湧水点を確認されている。

昭和 48（1973）年に最初の調査が実施されて以降、志木市教育委員会、志木市遺跡調査会、志木市

第1章 遺跡の立地と環境

史編さん室による度重なる調査が実施されてきた。平成元（1989）年から平成19（2007）年までは、西原特定土地区画整理事業に伴い、道路新設部分を中心に公園予定地・保留地を対象とした発掘調査が継続的に実施された。近年では区画整理事業の完了に伴い、共同住宅や分譲住宅、個人住宅の建設などの各種土木工事が盛期を迎え、それらに伴う発掘調査も増加傾向にある。

本遺跡は、これまでに235回の調査（令和3年4月30日現在）が実施され、旧石器時代から近世までの複合遺跡であることが判明している。特に、縄文時代中期では住居跡約200軒以上からなる大規模な環状集落が形成され、また、弥生時代後期～古墳時代前期では、住居跡638軒、方形周溝墓36基が調査され、さらに環濠の存在が確認されている。

特に本遺跡から発見された資料として、以下の2件が、平成24年度に市指定文化財に指定され、大きな成果を上げることができた。

- ①西原大塚遺跡出土の動物形土製品
- ②西原大塚遺跡17号方形周溝墓出土遺物

[註]

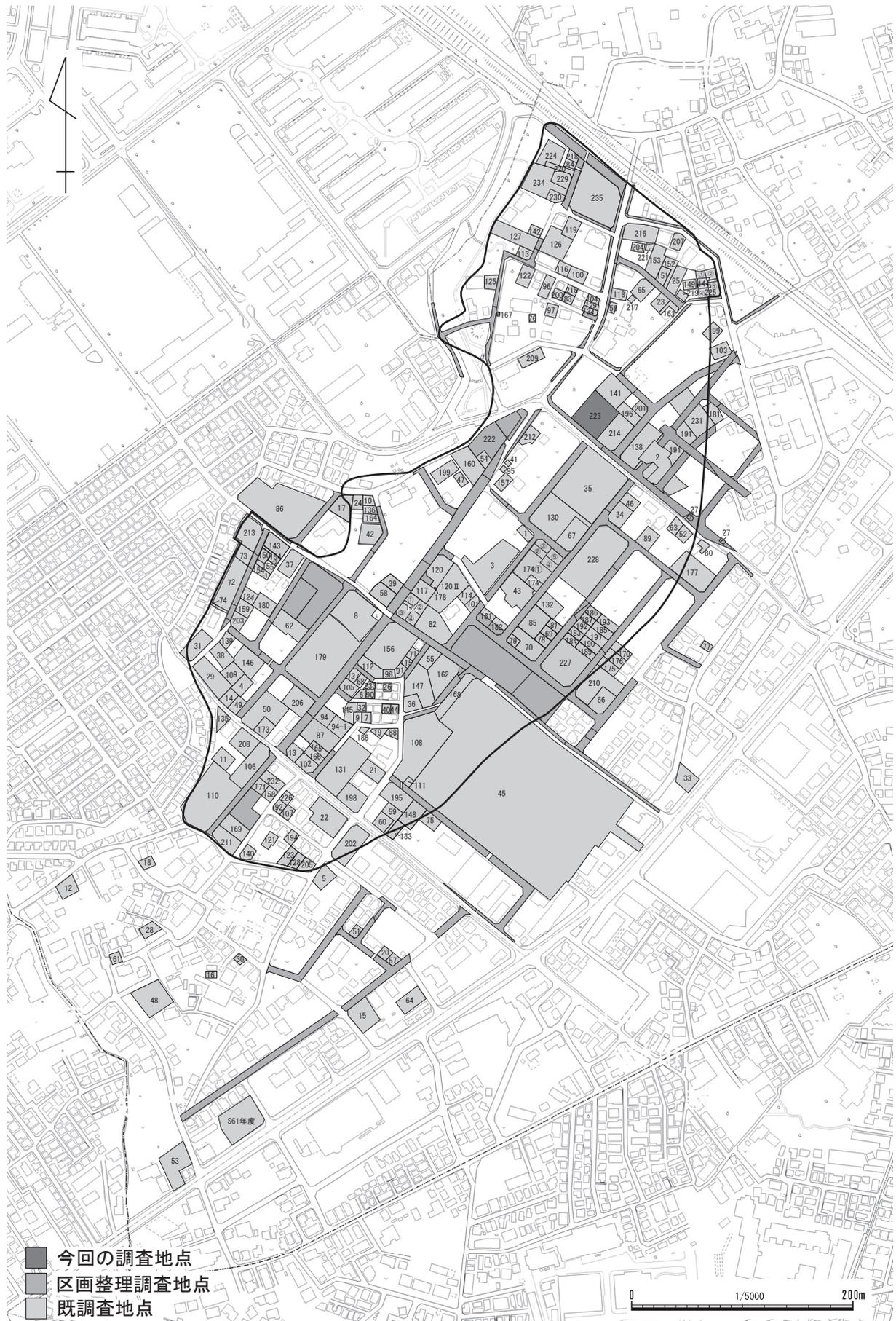
註1 平成26年度「全国都道府県市区町村別面積調」により、9.06km²から9.05km²に変更された。

註2 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原仲右衛門仲恒なぬしみやはらなかえもんなかつねが、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

註3 『廻国雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐる、駿河甲斐にも足をのぼし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

[引用文献]

- 神山健吉 1988 「『廻国雑記』に現れる 大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第7号
2002 「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号



第2図 西原大塚遺跡の調査地点 (1 / 5,000)

令和3年4月30日現在

第2章 発掘調査の概要

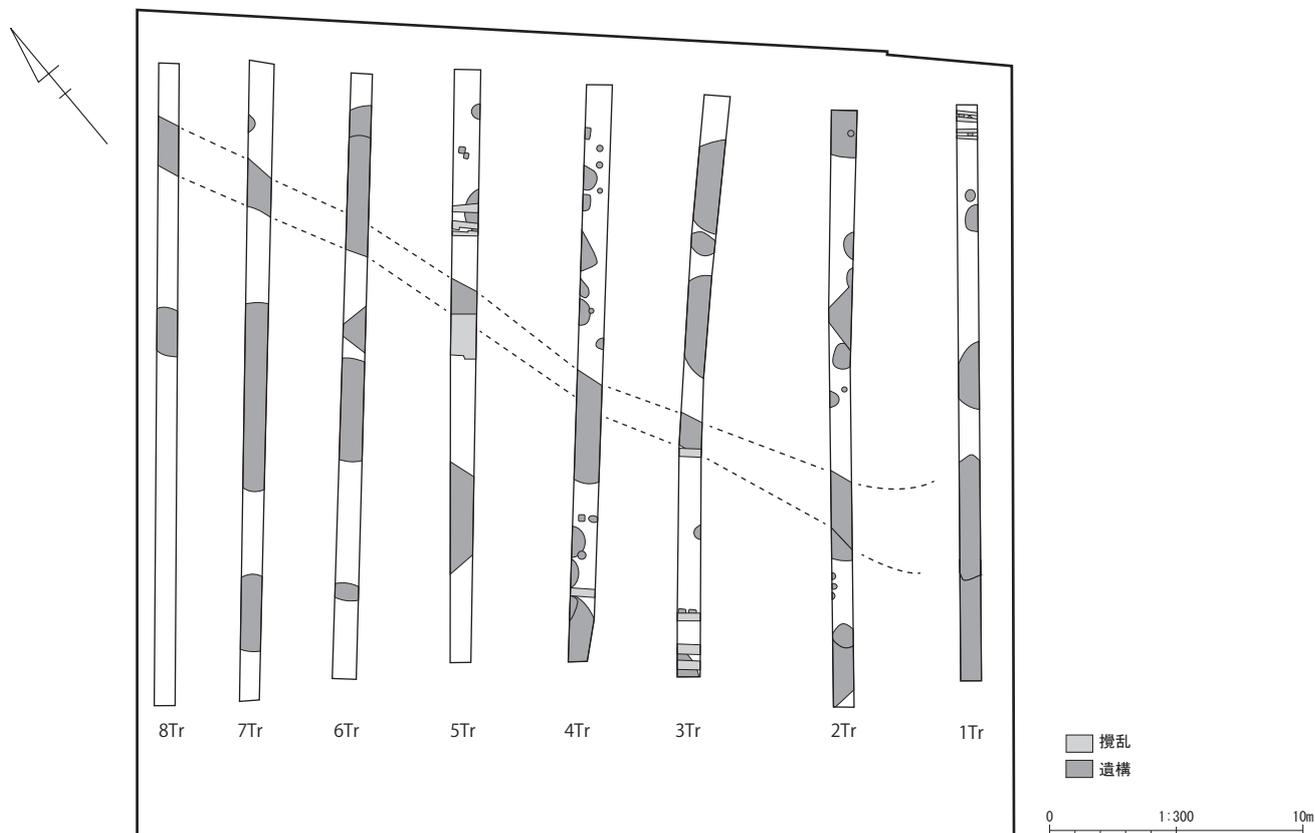
第1節 調査に至る経緯

平成30年7月、増木工業株式会社（代表取締役 増木敏政）から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市幸町2丁目6158-2、6159-1、6160-1、6161（面積1,101.05㎡）地内に分譲住宅建設を行うというものである。

これに対し、教育委員会は、当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である西原大塚遺跡（コード11228-09-007）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
2. 上記1の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず埋蔵文化財に影響を与える工事を実施する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

平成30年9月18日、教育委員会は、土木工事主体者である増木工業株式会社より確認調査依頼書を受理し、西原大塚遺跡第223地点として、10月9～12日にかけて確認調査を実施した。確認調査は、第3図に示すように調査区ほぼ南北方向に8本のトレンチ（1～8Tr）を設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、縄文時代の住居跡4軒・土坑8基、弥生時代後期～



第3図 確認調査遺構分布図（1／300）

古墳時代前期の住居跡 15 軒・溝跡 1 本、古墳時代～平安時代の住居跡 2 軒、中世以降の土坑 8 基、その他ピット 20 本を確認した。教育委員会は、この結果をただちに土木工事主体者に報告し、保存措置について検討を依頼した。

令和2年2月、マックホーム株式会社から土地購入の連絡があったため、保存措置についての事前打合せを実施した。その結果、宅地部分については、盛土保存が可能であったが、道路と浸透トレンチ部分（366.93㎡）については、発掘調査を実施することに決定した。

令和2年2月14日、教育委員会はマックホーム株式会社（代表取締役 氏居照和）より埋蔵文化財発掘調査依頼書が提出されたため、3月2日に発掘調査実施に向けた事前協議を実施した。

4月3日、土木工事主体者・教育委員会・民間調査組織の三者により事前協議を実施し、同日、西原大塚遺跡第223地点埋蔵文化財保存事業に係る協定書をマックホーム株式会社、教育委員会、株式会社東京航業研究所（代表取締役 中本直士）の三者により締結した。

教育委員会は、同日、4月3日付けで埋蔵文化財発掘の届出及び発掘調査通知を埼玉県教育委員会に提出した。以上により、教育委員会を調査主体として4月9日から発掘調査を実施した。

第2節 調査の経過

調査期間は、令和2年4月9日から6月19日までである。調査面積は366.93㎡である。表土掘削や埋戻しに伴う重機の進入路や排土置場の必要性から、調査範囲を2分割（A・B区）した。前半区を

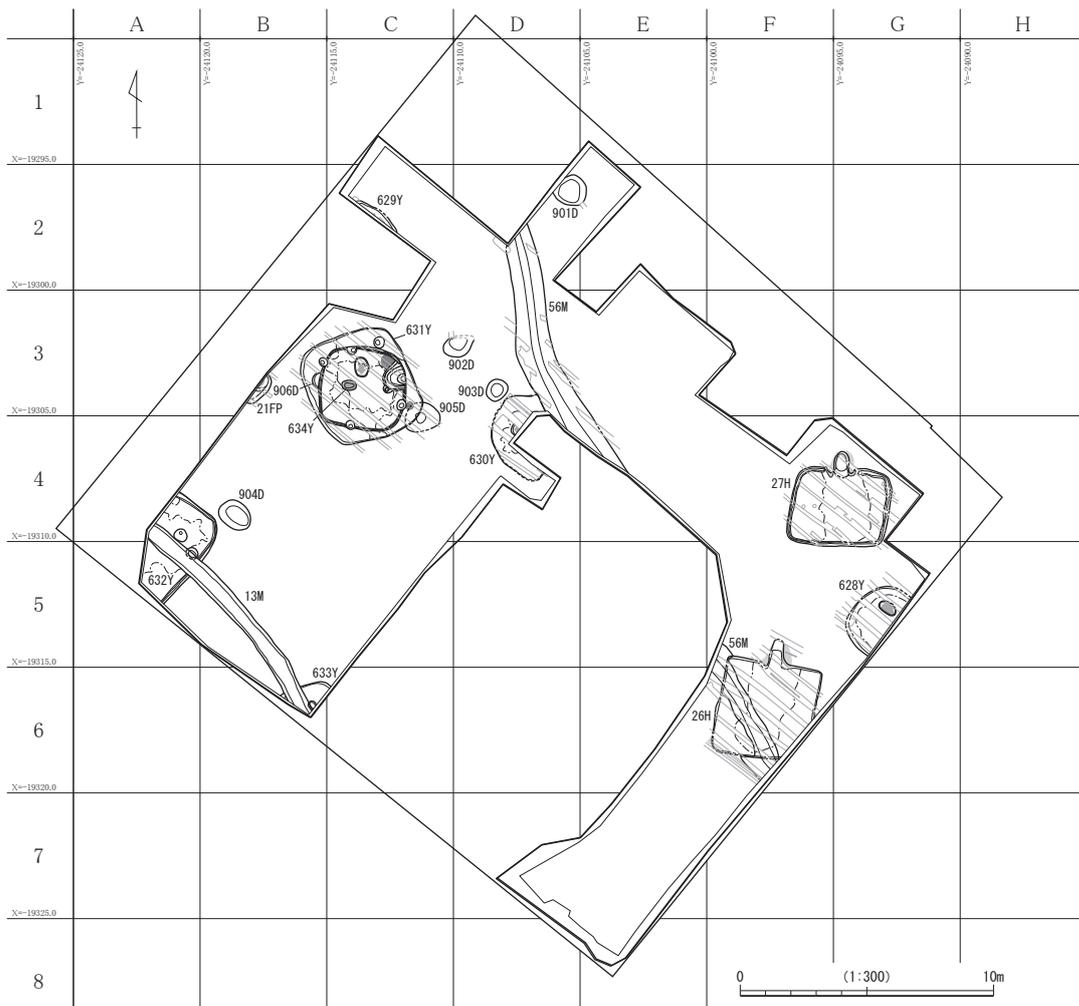
	4月	5月	6月
表土掘削	4.13	5.18	
21FP			6.3
901D	4.24		
902D		5.11	
903D		5.12	
904D			6.2
905D			6.5
906D			6.9
628Y	4.17		
629Y	4.17		
630Y	4.27		
631Y		5.20	
632Y		5.20	
633Y		5.20	
634Y			6.3
26H	4.16		
27H	4.16		
13M		5.20	
56M	4.21		
TP1		5.8	
TP2		5.8	
TP3		5.1	
TP4		5.1	
TP5			6.9
埋戻し作業		5.18	6.15

第2表 発掘調査工程表

第2章 発掘調査の概要

A区とし、終了後に後半区のB区を調査した。具体的な経過は、以下の通りである（第2表）。

- 4月 9日 仮設ハウス・トイレを設置。機材を搬入（～10日）。
- 13日 A区の表土掘削を開始。仮設ハウスの備品を搬入。
- 14日 A区の表土掘削作業を継続。埋戻しに備えて、赤色砂利層と表土層を可能な限り分離して排土を管理することとした。
- 15日 A区の表土掘削完了。並行して遺構確認も完了。空中写真により遺構確認状況を撮影。基準点測量を実施し、グリッド設定も完了した。
- 16日 A区の本格的な遺構精査に着手。調査区の西側から東側へ精査を進める。
- 5月 1日 A区を完掘し、空中写真撮影を実施。遺構掘り方、テストピットの掘削に着手（～13日）。
- 18日 A区埋戻しを開始し、完了。B区の表土掘削を開始。
- 20日 B区の表土掘削完了。並行して遺構確認も完了。空中写真により遺構確認状況を撮影。遺構精査にも着手。
- 6月 5日 B区を完掘し、空中写真撮影を実施。遺構掘り方、テストピットの掘削に着手（～10日）。
- 15日 B区埋戻しを開始し、完了。機材を一部撤収。
- 16日 機材の撤収。仮設ハウスの備品撤去（18日）、仮設ハウス・トイレを撤去し、調査を完了した（19日）。

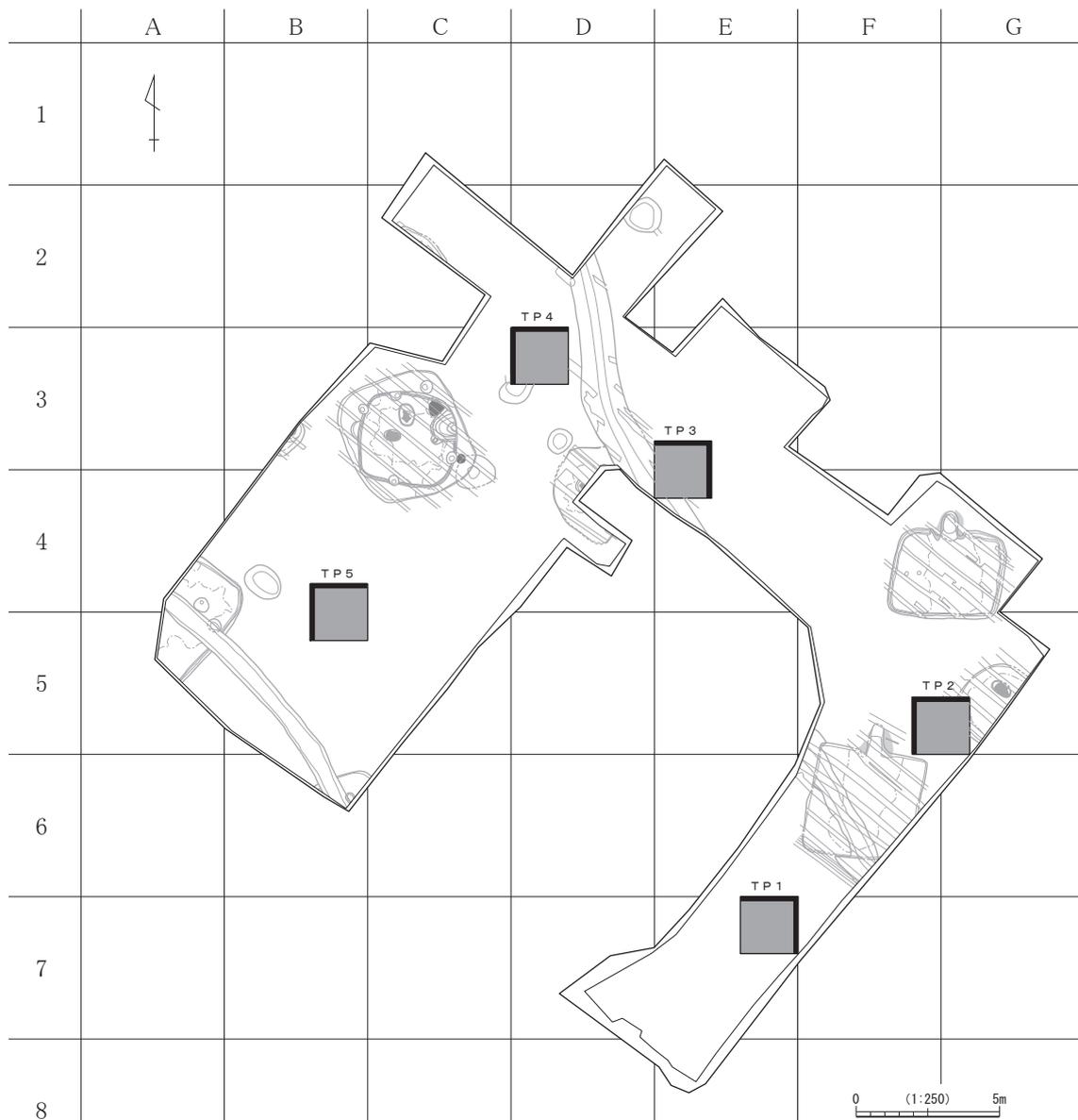


第4図 遺構分布図（1／300）

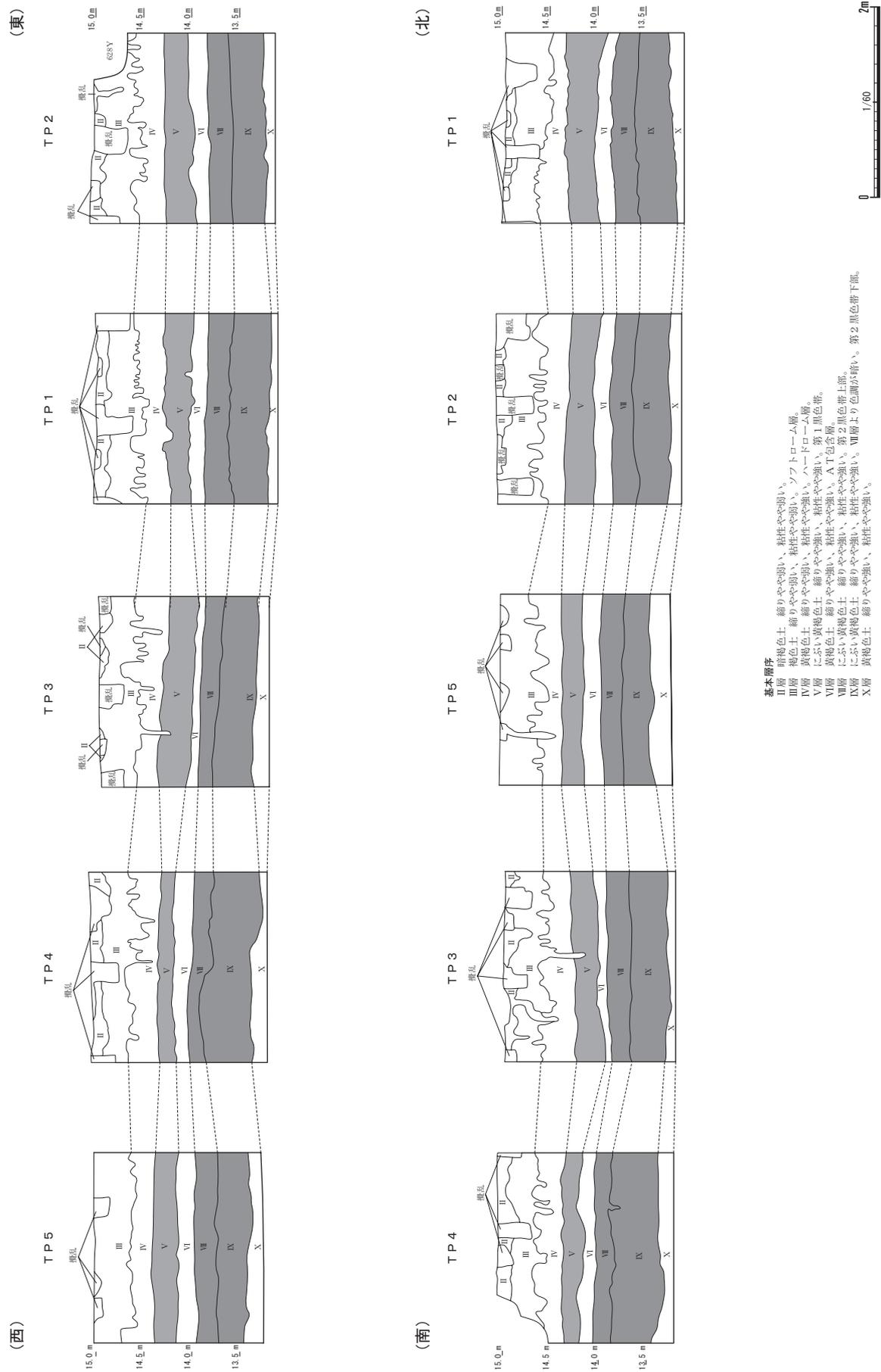
第3節 基本層序

基本層序の確認と、旧石器時代の調査を兼ねたテストピット（以下、TP）を5ヶ所設定した（第5図）。TPは2×2mとし、立川ローム第X層が確認できるまで掘削した。遺構確認面は概ねⅡ層中である。Ⅲ層からX層は立川ローム第Ⅲ層から第X層に相当する。

本地点の自然地形は、東西方向のX層上面の土層堆積をみると（第6図上：基本層序東西）、西（TP5）から東（TP1）へ穏やかに傾斜していることが確認できる。また、南北方向のX層上面の土層堆積では（第6図下：基本層序南北）、TP5が最も高い標高を示し、南北にやや傾斜しているように観察される。したがって、本地点の自然地形は、調査区の最も西側に位置するTP5周辺から南北東方向へとやや傾斜した地形を復元することができよう。TP5でⅡ層が明確に確認できなかったのは、X層以降の堆積もこの傾斜が維持され、最上層が削平されやすい環境にあったものと考えられる。



第5図 TP配置図（1／250）



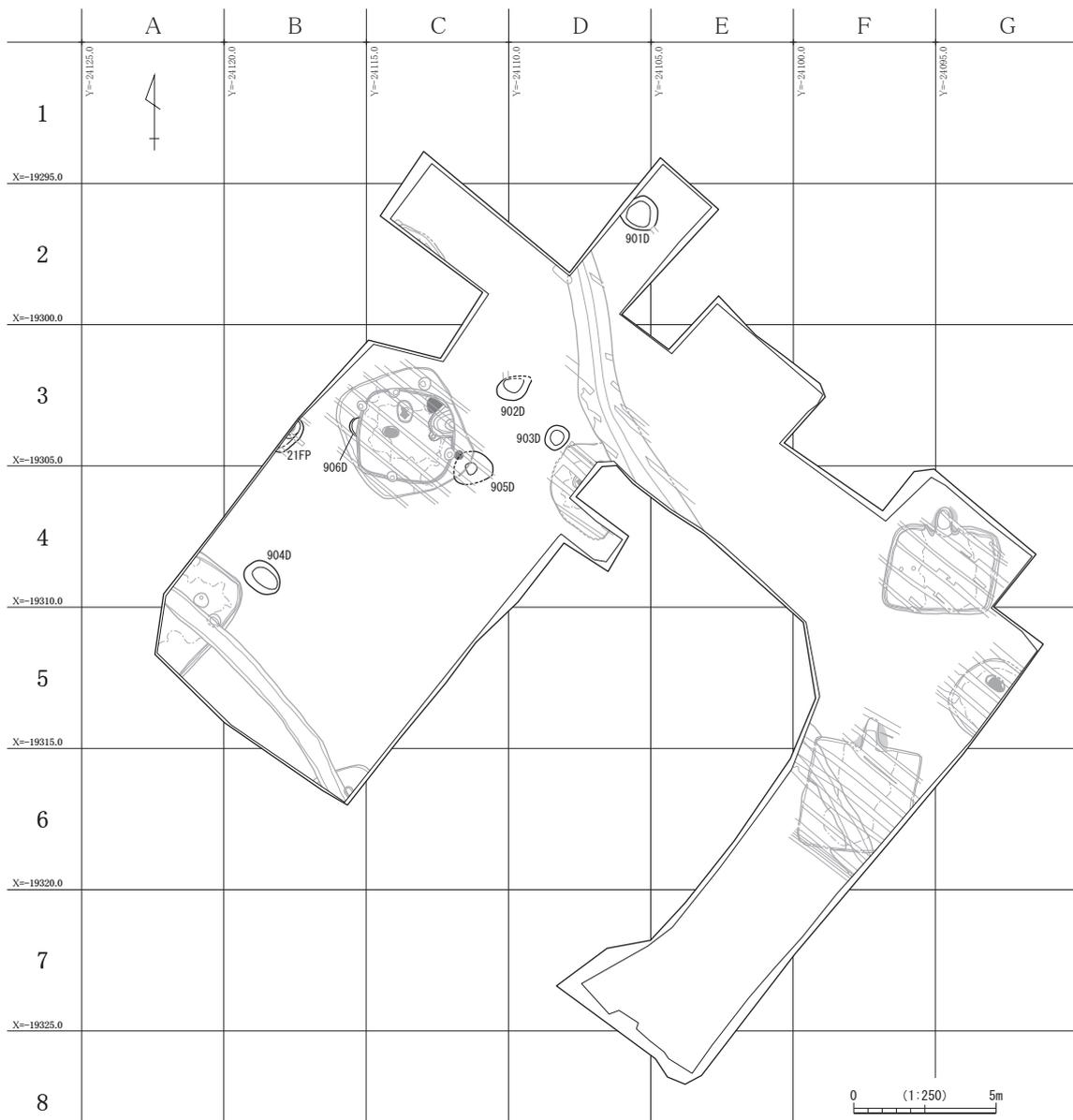
第6図 基本層序 (1 / 60)

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代

(1) 概要

今回の調査では、縄文時代の炉穴1基（21 F P）と土坑6基（901～906 D）を検出した。土坑のうち、縄文時代中期の土坑が1基（904 D）、縄文時代後期の土坑が4基（901・902・903・906 D）、検出状況から縄文時代とした土坑が1基（905 D）である。出土した土器の主要な時期は、中期中葉（勝坂式期）と後期前葉（堀之内式期）である。



第7図 縄文時代遺構全体図（1 / 250）

(2) 炉穴

21号炉穴

遺構 (第8図)

[位置] (B-3) グリッド。

[検出状況] 単独で検出された。西側半分は調査区外である。耕作による攪乱を受ける。

[構造] 平面長楕円形、断面不整皿形。遺構北側の覆土に焼土が認められ、その底面下に被熱したロームが認められる。規模：長軸 135cm／短軸 39cm／深さ 24cm。長軸方位：N-41°-E。覆土：5層に分層される。焼土を少量含む褐色土と焼土を微量に含むにぶい黄褐色土を基調とする。

[遺物] 覆土一括で土器の小片が1点出土したものの、時期を特定できる遺物はない。

[時期] 覆土や遺構の検出状況から縄文時代と考えられる。



第8図 21号炉穴 (1/60)

(3) 土坑

901号土坑

遺構 (第9図)

[位置] (D・E-2) グリッド。

[検出状況] 単独で検出された。西側一部は調査区外である。耕作による攪乱を一部受ける。

[構造] 平面円形、断面中央がやや窪む皿形。規模：長軸 122cm／短軸 118cm以上／深さ 40cm。長軸方位：N-51°-W。覆土：3層に分層。黒褐色土を少量、ローム粒を多量に含む最上層の暗褐色土を中心に遺物が出土した。

[遺物] 深鉢形土器、礫器が出土している。一部を図示したが、礫器のほかに、被熱痕跡を持たない自然礫が計12点まとまって出土した。

[時期] 縄文時代後期前葉(堀之内1式期)。

遺物 (第10図、図版9-1、第3表)

[土器] (第10図1~16、図版9-1-1~16、第3表)

1~3は堀之内1式の深鉢形土器口縁部、4~16は堀之内1式の深鉢形土器胴部である。

[石器] (第10図17、図版9-1-17、第3表)

17は砂岩製の礫器である。

902号土坑

遺構 (第9図)

[位置] (C・D-3) グリッド。

[検出状況] 単独で検出された。耕作による攪乱を一部受ける。

[構造] 平面楕円形、断面U字形。規模：長軸 122cm以上／短軸 28cm以上／深さ：54cm。長軸方位：N－56°－E。覆土：4層に分層。ロームを少量含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 深鉢形土器が出土している。

[時期] 縄文時代後期前葉（堀之内1式期）。

[遺物]（第11図、図版10－1、第4表）

[土器]（第11図1、図版10－1－1、第4表）

1は堀之内1式の深鉢形土器胴部である。

903号土坑

[遺構]（第9図）

[位置]（D－3）グリッド。

[検出状況] 単独で検出された。

[構造] 平面円形、断面U字形。規模：長軸 88cm／短軸 77cm／深さ 37cm。長軸方位：N－41°－E。覆土：4層に分層。ロームを微量に含む黒褐色土と暗褐色土を基調とする。

[遺物] 深鉢形土器が出土している。

[時期] 縄文時代後期前葉（堀之内1式期）。

[遺物]（第12図、図版10－2、第5表）

[土器]（第12図1～7、図版10－2－1～7、第5表）

1は堀之内1式の深鉢形土器口縁部から胴部、2は堀之内1式の深鉢形土器胴部、3～7は堀之内1式の深鉢形土器胴部である。

904号土坑

[遺構]（第9図）

[位置]（B－4）グリッド。

[検出状況] 単独で検出された。

[構造] 平面楕円形、断面やや中央が窪む皿形。規模：長軸 136cm／短軸 103cm／深さ 47cm。長軸方位：N－51°－W。覆土：3層に分層。ロームを微量～少量含む暗褐色土を基調とする。

[遺物] 深鉢形土器が出土している。

[時期] 縄文時代中期中葉（勝坂式期）。

[遺物]（第13図、図版10－3、第6表）

[土器]（第13図1・2、図版10－3－1・2、第6表）

1は勝坂式の深鉢形土器胴部、2は中期の深鉢形土器胴部である。

905号土坑

[遺構]（第9図）

[位置]（C－3・4）グリッド。

[検出状況] 631 Yに切られる。耕作による攪乱を受ける。

[構造] 平面楕円形、断面逆台形。規模：長軸 137cm以上／短軸 115cm／深さ 46cm。長軸方位：

N-87°-W。

[遺物] なし。

[時期] 遺構の検出状況から縄文時代と考えられる。

906号土坑

遺構 (第9図)

[検出状況] 634 Yに切られる。

[位置] (B・C-3) グリッド。

[構造] 平面楕円形、断面逆台形。規模：長軸 27cm以上／短軸不明／深さ 19cm。長軸方位：N-81°-W。覆土：3層に分層。ロームを少量、炭化物を中量含む褐色土から遺物が出土している。

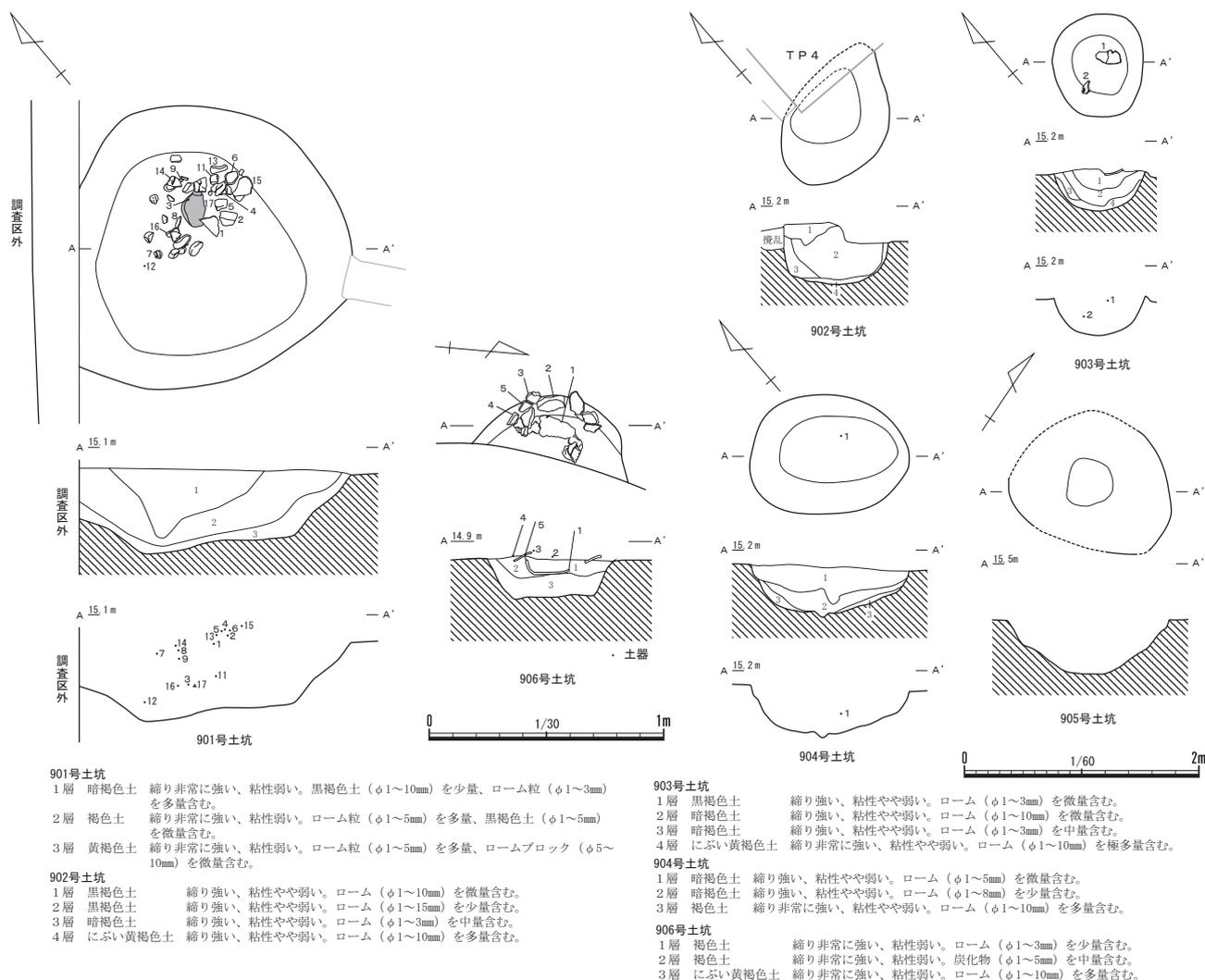
[遺物] 深鉢形土器が出土している。

[時期] 縄文時代後期前葉（堀之内1式期）。

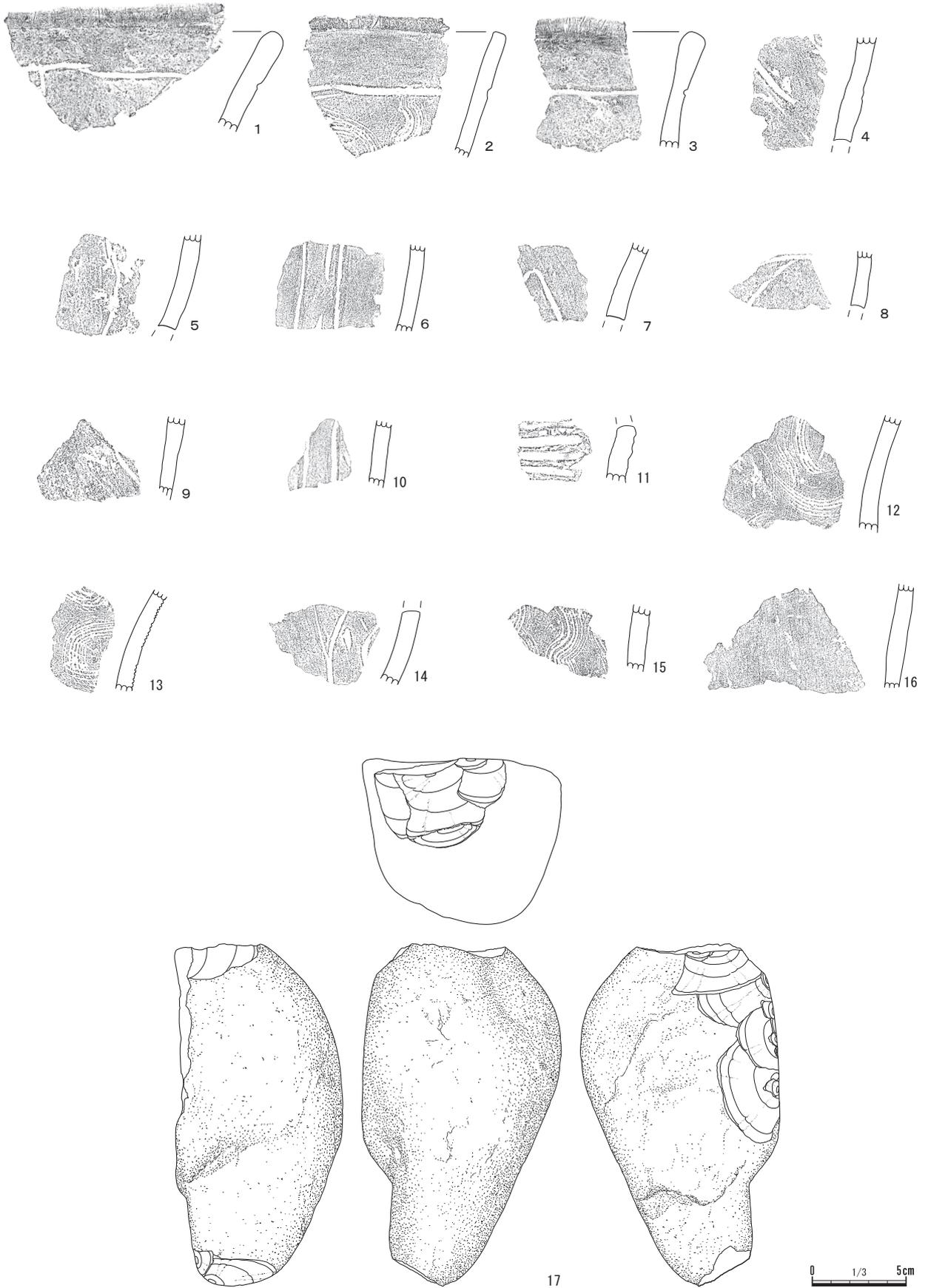
遺物 (第14図、図版10-4、第7表)

土器 (第14図1~5、図版10-4-1~5、第7表)

1は堀之内1式の深鉢形土器胴部から底部、2~5は堀之内1式の深鉢形土器胴部である。



第9図 縄文時代土坑 (1/30・1/60)



第10图 901号土坑出土遺物(1/3)

第3章 検出された遺構と遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	遺存度	法量 (cm)	色調	胎土	特徴	時期 (型式)
第10図1 図版9-1-1	深鉢	底上35cm	口縁部 5% 未満	厚 1.0	灰褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英・ 雲母	口縁部下に沈線を巡らし、そこから沈線を垂下させる	後期前葉 (堀之内1式)
第10図2 図版9-1-2	深鉢	底上37cm	口胴部 5% 未満	厚 0.9	にぶい 赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート・ 石英・雲母	口縁部下に横位沈線／以下に6本1単位の櫛歯状工具による蛇行懸垂文	後期前葉 (堀之内1式)
第10図3 図版9-1-3	深鉢	底上18cm	口縁部 5% 未満	厚 0.7	褐灰	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート	口縁部下端に1条の横位沈線／外面スス付着	後期前葉 (堀之内1式)
第10図4 図版9-1-4	深鉢	底上40cm	胴部 5% 未満	厚 0.9	黒	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート・ 雲母	沈線及び刺突文／外面スス付着	後期前葉 (堀之内1式)
第10図5 図版9-1-5	深鉢	底上39cm	胴部 5% 未満	厚 1.0	黒褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	縦位沈線／外面スス付着	後期前葉 (堀之内1式)
第10図6 図版9-1-6	深鉢	底上39cm	胴部 5% 未満	厚 0.9	褐灰	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・角閃石・ 石英	縦位沈線／外面スス付着	後期前葉 (堀之内1式)
第10図7 図版9-1-7	深鉢	底上29cm	胴部 5% 未満	厚 0.9	にぶい褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・雲母	沈線及び刺突文	後期前葉 (堀之内1式)
第10図8 図版9-1-8	深鉢	底上31cm	胴部 5% 未満	厚 0.7	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート・ 雲母	1条の沈線下に斜位沈線／外面スス付着	後期前葉 (堀之内1式)
第10図9 図版9-1-9	深鉢	底上27cm	胴部 5% 未満	厚 0.8	にぶい褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	斜位沈線／外面スス付着	後期前葉 (堀之内1式)
第10図10 図版9-1-10	深鉢	覆土中	胴部 5% 未満	厚 0.8	にぶい橙	黒色粒子・白色粒子・ 石英	縦位沈線／外面スス付着	後期前葉 (堀之内1式)
第10図11 図版9-1-11	深鉢	底上19cm	胴部 5% 未満	厚 0.9	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート・ 雲母	横位の沈線の上に刺突文／内面スス付着	後期前葉 (堀之内1式)
第10図12 図版9-1-12	深鉢	底上8cm	胴部 5% 未満	厚 0.9	黒褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英・ 雲母	8本以上1単位の櫛歯状工具による蛇行文／外面スス付着	後期前葉 (堀之内1式)
第10図13 図版9-1-13	深鉢	底上37cm	胴部 5% 未満	厚 0.9	黒褐	黒色粒子・白色粒子・ 石英	8本1単位の櫛歯状工具による蛇行文／外面スス付着	後期前葉 (堀之内1式)
第10図14 図版9-1-14	深鉢	底上32cm	胴部 5% 未満	厚 0.8	黒褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英	蛇行沈線／外面スス付着	後期前葉 (堀之内1式)
第10図15 図版9-1-15	深鉢	底上41cm	胴部 5% 未満	厚 0.9	にぶい 赤褐	白色粒子・石英	8本1単位の櫛歯状工具による蛇行懸垂文／外面スス付着	後期前葉 (堀之内1式)
第10図16 図版9-1-16	深鉢	底上15cm	胴部 5% 未満	厚 1.0	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 石英	内面スス付着	後期前葉 (堀之内1式)

挿図番号 図版番号	器種	出土位置	遺存度	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	備考
第10図17 図版9-1-17	礫器	底上16cm	完形	砂岩	18.3	10.6	8.9	2,166.3	裏面はほぼ平坦で、断面は蒲鉾状／裏面、上から右側縁にかけて剥離が行われている／被熱により一部赤化	

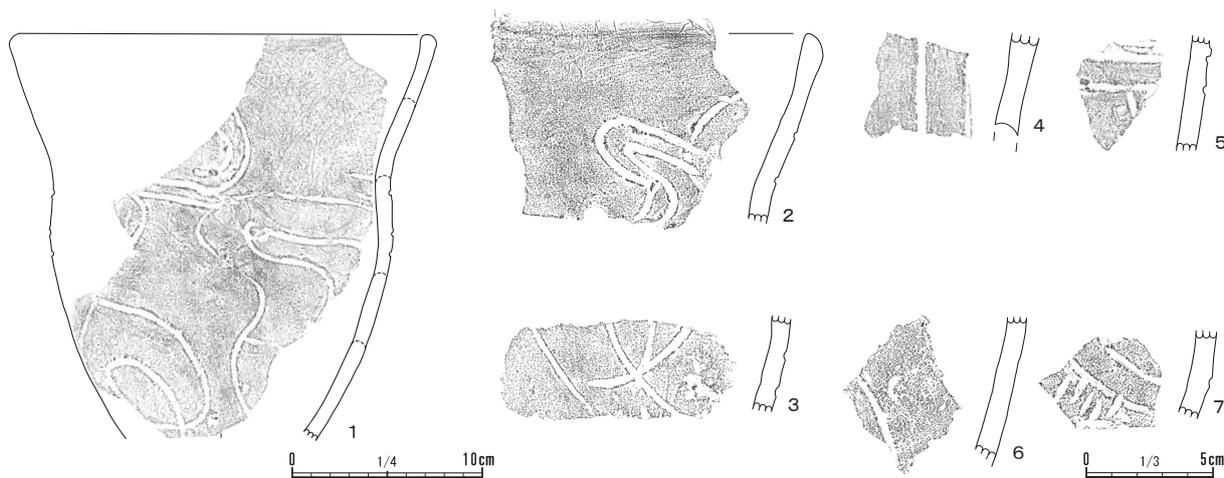
第3表 901号土坑出土遺物一覧



第11図 902号土坑出土遺物(1/3)

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	遺存度	法量 (cm)	色調	胎土	特徴	時期 (型式)
第11図1 図版10-1-1	深鉢	覆土中	胴部 5% 未満	厚 1.0	にぶい 黄橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英・ チャート	斜位沈線	後期前葉 (堀之内1式)

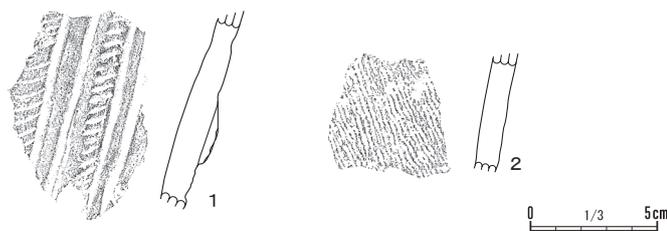
第4表 902号土坑出土遺物一覧



第12図 903号土坑出土遺物(1/4・1/3)

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	遺存度	法量 (cm)	色調	胎土	特徴	時期 (型式)
第12図1 図版10-2-1	深鉢	底上30cm	口縁～ 胴部 15%	高 [21.6] 口 (21.2)	にぶい 赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート・ 石英	頸部から口縁部にかけて直線的に 立ち上がる／沈線による蛇行文／ 内外面スス附着	後期前葉 (堀之内1式)
第12図2 図版10-2-2	深鉢	底上16cm	口縁部 5% 未満	厚 0.8	にぶい 赤褐	黒色粒子・白色粒子・ チャート・石英	沈線による蛇行文／外面スス附着	後期前葉 (堀之内1式)
第12図3 図版10-2-3	深鉢	覆土中	胴部 5% 未満	厚 0.7	灰褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート	沈線による蛇行文／内外面スス附着	後期前葉 (堀之内1式)
第12図4 図版10-2-4	深鉢	覆土中	胴部 5% 未満	厚 1.0	灰褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	縦位平行沈線	後期前葉 (堀之内1式)
第12図5 図版10-2-5	深鉢	覆土中	胴部 5% 未満	厚 0.9	にぶい 赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英	横位及び縦位沈線	後期前葉 (堀之内1式)
第12図6 図版10-2-6	深鉢	覆土中	胴部 5% 未満	厚 0.8	にぶい 橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	縦位沈線	後期前葉 (堀之内1式)
第12図7 図版10-2-7	深鉢	覆土中	胴部 5% 未満	厚 1.0	暗赤褐	黒色粒子・白色粒子・ チャート	沈線により区画し内部に短沈線を 充填する	後期前葉 (堀之内1式)

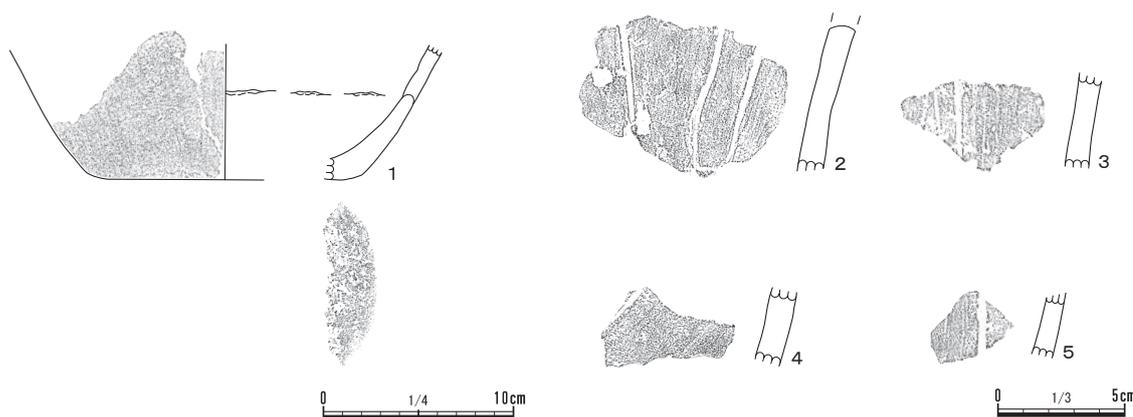
第5表 903号土坑出土遺物一覧



第13図 904号土坑出土遺物（1／3）

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	遺存度	法量 (cm)	色調	胎土	特徴	時期 (型式)
第13図1 図版10-3-1	深鉢	底上20cm	胴部 5% 未満	厚 1.1	橙	黒色粒子・白色粒子・ チャート・石英	上端に爪形文を持つ縦位隆帯に 沿って沈線文を施し、幅の広い爪 形文を充填	中期中葉 (勝坂式)
第13図2 図版10-3-2	深鉢	覆土中	胴部 5% 未満	厚 1.0	明褐	白色粒子・赤色粒子・ 石英	縦位撚糸L	中期

第6表 904号土坑出土遺物一覧



第14図 906号土坑出土遺物（1／4・1／3）

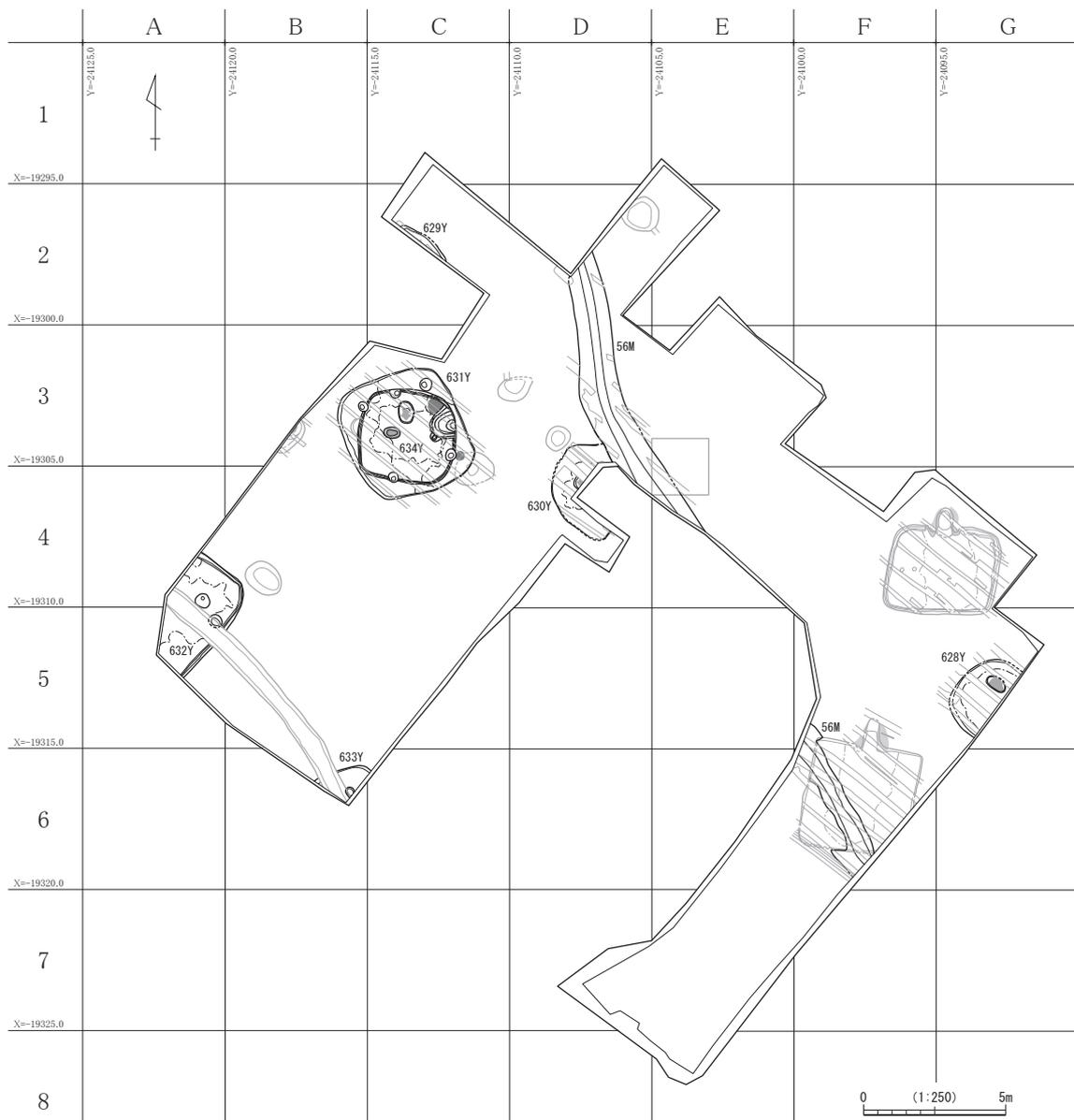
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	遺存度	法量 (cm)	色調	胎土	特徴	時期 (型式)
第14図1 図版10-4-1	深鉢	底上 11～19cm	底部～ 胴部 5%未満	高 [7.2] 底 (12.9)	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート・ 石英	無文／内面磨耗	後期前葉 (堀之内1式)
第14図2 図版10-4-2	深鉢	底上18cm	胴部 5% 未満	厚 1.0	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・角閃石・ チャート・石英	縦位沈線	後期前葉 (堀之内1式)
第14図3 図版10-4-3	深鉢	底上21cm	胴部 5% 未満	厚 1.0	赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・角閃石・ チャート	縦位沈線	後期前葉 (堀之内1式)
第14図4 図版10-4-4	深鉢	底上19cm	胴部 5% 未満	厚 1.1	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・角閃石・ チャート・石英	斜位沈線	後期前葉 (堀之内1式)
第14図5 図版10-4-5	深鉢	底上19cm	胴部 5% 未満	厚 0.9	灰赤	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・角閃石・ チャート	縦位沈線	後期前葉 (堀之内1式)

第7表 906号土坑出土遺物一覧

第 2 節 弥生時代後期～古墳時代前期

(1) 概 要

今回の調査では、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡 7 軒 (628 ～ 634 Y)、溝跡 1 本 (56 M) を検出した。住居跡の平面形態は隅丸長方形 (含小判形) のものと隅丸方形の二者が認められる。ともに 4 本支柱を基本とすると考えられるが、柱穴を検出できなかったものも認められる。主軸は北西から北東が主体である。隅丸方形の住居跡では南側に入り口部を持ち、その右側に貯蔵穴を持つものも見られた。貯蔵穴はその北側に弧状の凸堤を伴っている。また、赤色砂利層が見られ、炉は中軸線上の中央やや北側に位置する。出土遺物は壺形土器・甕形土器を中心とする。住居跡は環濠と想定される溝跡の内側に 1 軒、外側に 6 軒検出された。



第 15 図 弥生時代後期～古墳時代前期遺構全体図 (1 / 250)

(2) 住居跡

628号住居跡

遺 構 (第16図)

[位 置] (G-5) グリッド。

[検出状況] トレンチャーによる攪乱が床面以下まで及ぶため、遺存状態はやや悪い。南東側は調査区外へ延びる。

[構 造] 平面形:隅丸長方形を呈すると推測される。規模:長軸2.94m以上/短軸不明(現存長1.80m)/深さ28cm。主軸方位:N-53°-W。壁溝:検出されなかった。床面:貼床されるが、若干の起伏が認められる。壁際を除き硬化面を確認できた。炉:住居跡中央やや北側に位置していると推測される。平面形は長楕円形を呈する。断面形は皿状を呈する。規模は長軸76cm/短軸37cm以上/深さ6cm。柱穴:検出されなかった。貯蔵穴:検出されなかった。凸堤:検出されなかった。赤色砂利層:検出されなかった。

[覆 土] 3層に分層される。3層が掘り方の埋土である。

[遺 物] 高坏形土器、甕形土器が出土している。

[時 期] 弥生時代後期後葉。

遺 物 (第17図、図版10-5、第8表)

[土 器] (第17図1~4、図版10-5-1~4、第8表)

1は高坏形土器の口縁部から胴部、2・3は甕形土器の口縁部、4は甕形土器の胴部である。

629号住居跡

遺 構 (第18図)

[位 置] (C-2) グリッド。

[検出状況] 大部分が調査区外に伸びている為、北東側の一部分のみ検出された。トレンチャーによる攪乱が床面以下まで及ぶため、遺存状態はやや悪い。

[構 造] 平面形:隅丸長方形を呈すると推測される。規模:検出長2.01m以上/深さ27cm。主軸方位:不明。壁溝:検出されなかった。床面:住居壁際の一部のみの検出だったため、貼床は確認できなかった。炉:検出されなかった。柱穴:検出されなかった。貯蔵穴:検出されなかった。凸堤:検出されなかった。赤色砂利層:検出されなかった。

[覆 土] 3層に分層される。3層が掘り方の埋土である。

[遺 物] 図示できる遺物はなかった。

[時 期] 弥生時代後期後葉~古墳時代前期。

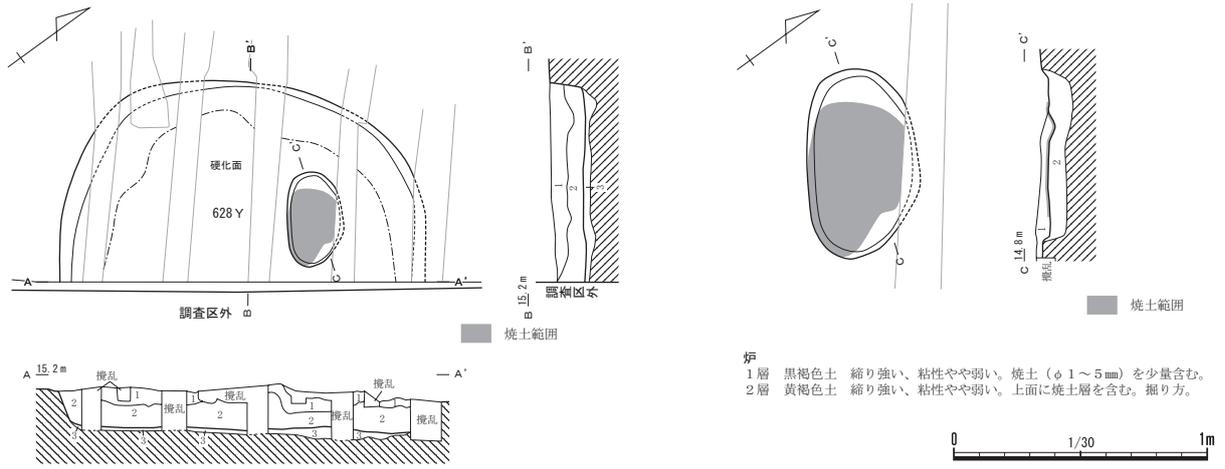
630号住居跡

遺 構 (第19図)

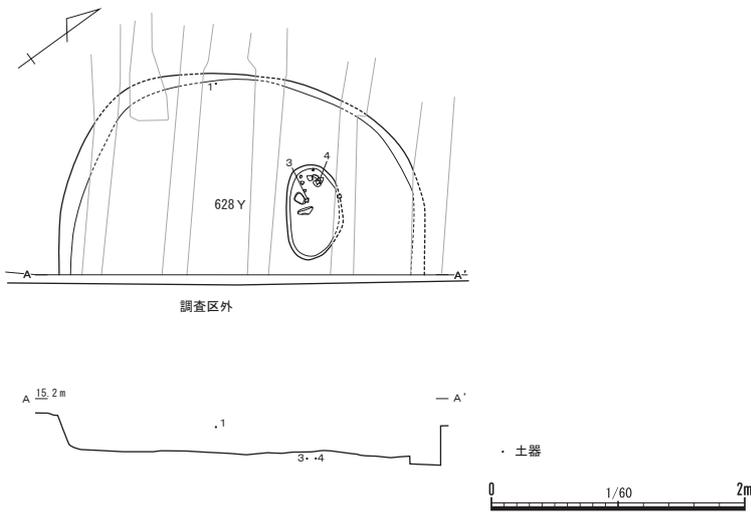
[位 置] (D-3・4) グリッド。

[検出状況] トレンチャーによる攪乱が床面以下まで及ぶため、遺存状態はやや悪い。南東側は調査区外へ延びる。56Mに切られる。

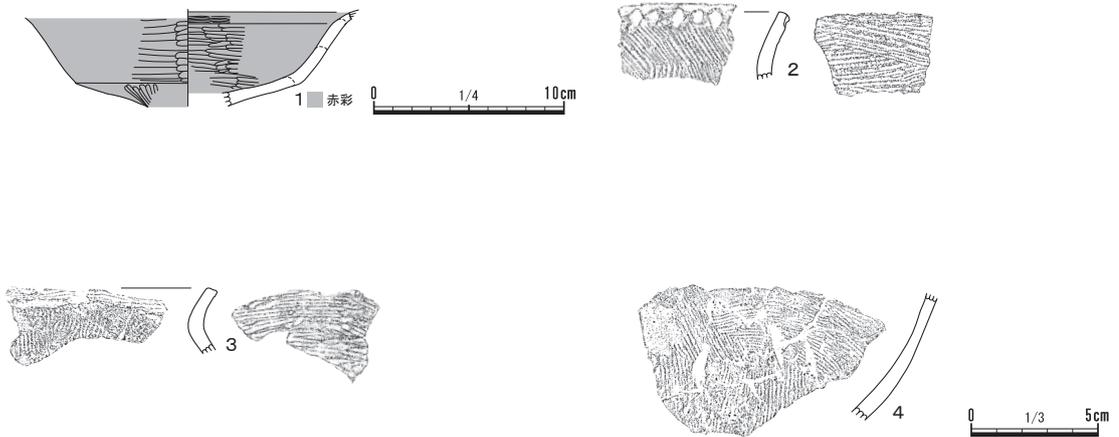
[構 造] 平面形:不整形円形を呈する。規模:長軸3.36m以上/短軸2.10m以上/深さ15cm。



628号住居跡
 1層 暗褐色土 締りやや強い、粘性やや強い。ローム（φ1～10mm）を中量、炭化物（φ5～10mm）を微量含む。
 2層 黒褐色土 締りやや強い、粘性やや強い。ローム（φ1～5mm）を含む。
 3層 黒褐色土 締り強い、粘性やや強い。ローム（φ5～10mm）を多量含む。炉跡周辺は焼土と炭化物が混じる。掘り方。



第16図 628号住居跡（1／60）・炉（1／30）・遺物出土状態（1／60）

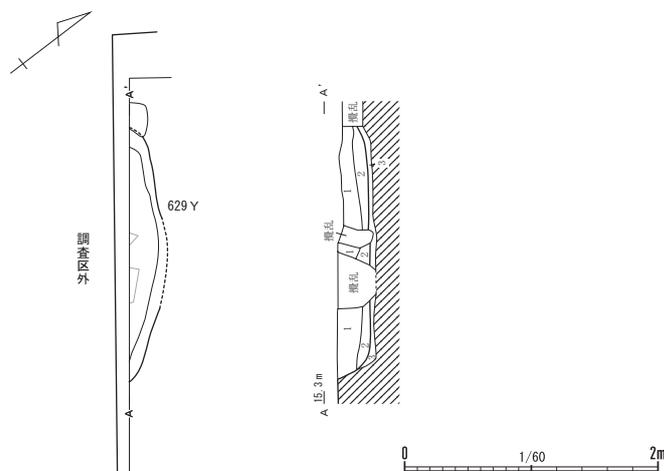


第17図 628号住居跡出土遺物（1／4・1／3）

第3章 検出された遺構と遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	遺存度	法量 (cm)	色調	胎土	特徴
第17図1 図版10-5-1	高坏	北西壁付近 (床上27cm)	口縁部 ~胴部 5% 未満	高 5.2	赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	坏部下端に稜、口縁部短く外反／内外面赤彩／内面： 横位ミガキ、上端横位ハケ／外面：上半横位ミガキ、 下半縦位ミガキ
第17図2 図版10-5-2	甗	覆土中	口縁部 5% 未満	厚 0.6	にぶい橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	口縁部短く外反／内面：横位ハケ／外面：斜位ハケ、 口唇部ハケ後同一工具による等間隔のキザミ
第17図3 図版10-5-3	甗	炉内部 (床面)	口縁部 5% 未満	厚 0.6	黒褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・シャモット	頸部から口縁部にかけてゆるく屈曲／内面：横位ハケ ／外面：縦位ハケ、口唇部ハケ
第17図4 図版10-5-4	甗	炉内部 (床面)	胴部 5% 未満	厚 0.4	橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	胴部下半内湾しながら立ち上がる／内面：ナデ／ 外面：縦位・横位・斜位のハケ

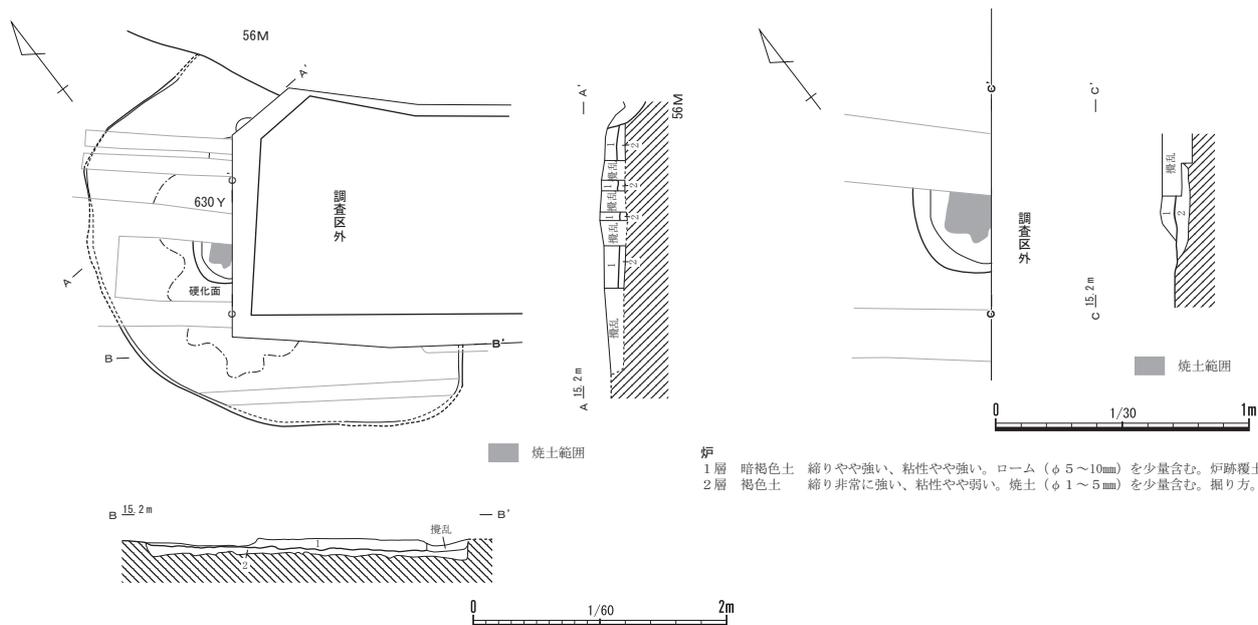
第8表 628号住居跡出土遺物一覧



629号住居跡

- 1層 黒褐色土 縮り強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~5mm)を微量含む。
- 2層 褐色土 縮り強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~5mm)を中量含む。
- 3層 褐色土 縮り強い、粘性やや弱い。ロームを多量含む。掘り方。

第18図 629号住居跡(1/60)



630号住居跡

- 1層 黒褐色土 縮り強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~5mm)を微量含む。
- 2層 褐色土 縮りやや強い、粘性やや強い。ローム(φ1~10mm)を極多量含む。掘り方。

炉

- 1層 暗褐色土 縮りやや強い、粘性やや強い。ローム(φ5~10mm)を少量含む。炉跡覆土。
- 2層 褐色土 縮り非常に強い、粘性やや弱い。焼土(φ1~5mm)を少量含む。掘り方。

第19図 630号住居跡(1/60)・炉(1/30)

主軸方位：西壁を基準に考えるとN-3°-W。壁溝：検出されなかった。床面：貼床されるが、若干の起伏が認められる。硬化面は炉付近を中心に確認できた。炉：住居跡中央やや北側に位置していると推測される。平面形は楕円形を呈する。断面形は皿状を呈する。長軸36cm以上／短軸31cm以上／深さ6cm。柱穴：検出されなかった。貯蔵穴：検出されなかった。凸堤：検出されなかった。赤色砂利層：検出されなかった。

[覆 土] 2層に分層される。2層が掘り方の埋土である。

[遺 物] 図示できる遺物は出土していない。

[時 期] 弥生時代後期後葉～古墳時代前期。

631号住居跡

遺 構 (第20・21図)

[位 置] (B・C-3・4) グリッド。

[検出状況] トレンチャーによる攪乱が床面以下まで及ぶため、遺存状態はやや悪い。634Yを切る。

[構 造] 平面形：隅丸方形を呈する。規模：長軸4.42m／短軸4.17m／深さ21cm。主軸方位：N-3°-W。壁溝：検出されなかった。床面：貼床される。硬化面は住居跡の北東部から南部にかけて確認できた。炉：住居跡中央やや北側に位置している。平面形は隅丸方形を呈する。断面形は皿状を呈する。規模は長軸78cm／短軸56cm／深さ24cm。柱穴：4本検出された。P1は46×46cm、深さ48cm、P2は45×38cm、深さ49cm、P3は36×36cm、深さ42cm、P4は37×33cm、深さ41cmである。4本支柱の住居跡であろう。貯蔵穴：検出されなかった。凸堤：検出されなかった。赤色砂利層：住居跡南東コーナーから検出された。検出範囲は35×32cm程で、P2と重複していた。

[覆 土] 11層に分層される。8～11層が掘り方の埋土である。

[遺 物] 壺形土器、甕形土器、土製勾玉が出土している。

[時 期] 弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭。

遺 物 (第22図、図版11-1、第9表)

[土 器] (第22図1～6、図版11-1-1～6、第9表)

1・2は甕形土器の口縁部から胴部、3は壺形土器の底部、4・5は壺形土器の口縁部、6は壺形土器の胴部である。

[土 製品] (第22図7、図版11-1-7、第9表)

7は土製勾玉の完形品である。

632号住居跡

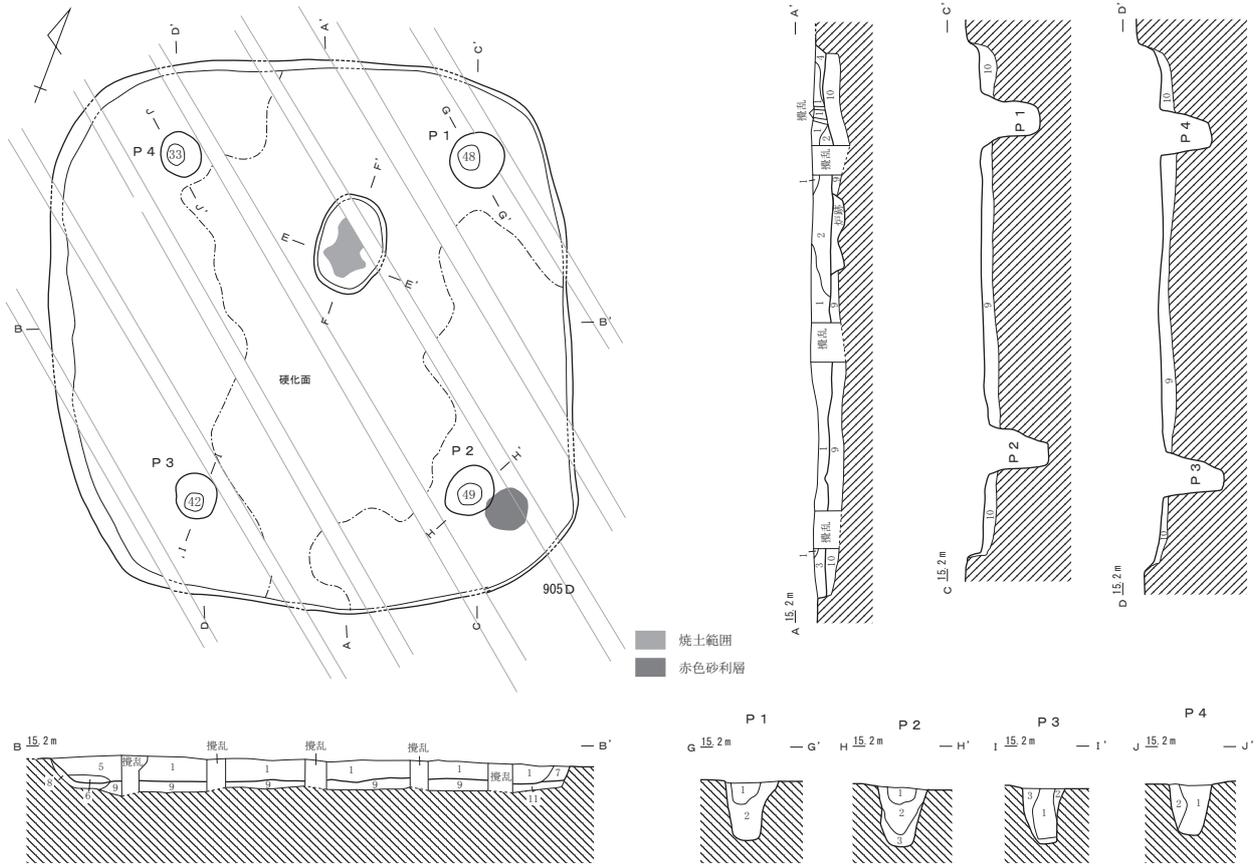
遺 構 (第23図)

[位 置] (A・B-4・5) グリッド。

[検出状況] 北側は調査区外へ延びる。13Mに切られる。

[構 造] 平面形：隅丸方形を呈すると推測される。規模：検出長3.77m以上／深さ20cm。主軸方位：N-41°-E。壁溝：住居壁直下に認められる。上幅12～24cm／下幅2～18cm／深さ2～14cm。床面：貼床されるが、若干の起伏が認められる。硬化面はP1付近を中心に確認できた。炉：検出されなかった。柱穴：1本検出された。P1は53×49cm、深さ56cmである。支柱穴と思われる。貯蔵穴：規模は49

第3章 検出された遺構と遺物

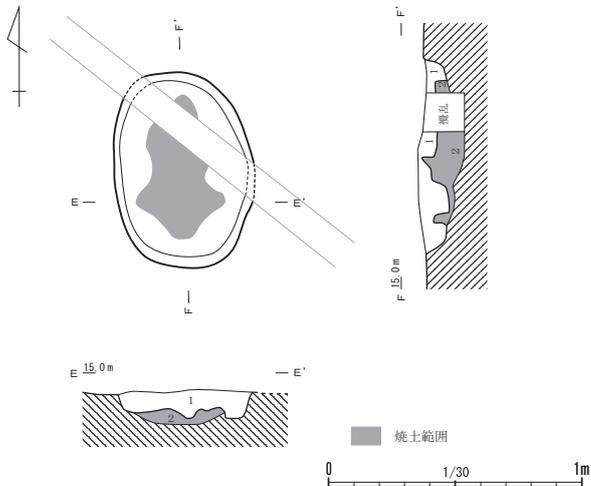


0 1/60 2m

631号住居跡

- | | |
|-------------|---|
| 1層 黒褐色土 | 縮りやや強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~5mm)を微量、焼土(φ1~3mm)を微量含む。 |
| 2層 暗褐色土 | 縮りやや強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~5mm)を中量含む。 |
| 3層 暗褐色土 | 縮りやや強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~5mm)を中量含む。 |
| 4層 暗褐色土 | 縮りやや強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~10mm)を少量含む。 |
| 5層 灰黄褐色土 | 縮りやや強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~5mm)を中量、焼土(φ1~3mm)を微量含む。 |
| 6層 黒褐色土 | 縮りやや強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~10mm)を少量含む。 |
| 7層 暗褐色土 | 縮りやや強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~5mm)を中量含む。 |
| 8層 にぶい黄褐色土 | 縮り非常に強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~10mm)を多量含む。 |
| 9層 暗褐色土 | 縮り非常に強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~10mm)を少量含む。 |
| 10層 にぶい黄褐色土 | 縮り非常に強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~10mm)を多量含む。 |
| 11層 暗褐色土 | 縮り非常に強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~10mm)を中量含む。 |

- P 1
- 1層 暗褐色土 縮り強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~10mm)を少量含む。
2層 暗褐色土 縮り強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~15mm)を中量含む。
- P 2
- 1層 暗褐色土 縮り強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~5mm)を微量含む。
2層 暗褐色土 縮り強い、粘性やや弱い。炭化物(φ1~5mm)を少量含む。
3層 にぶい黄褐色土 縮りやや強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~10mm)を中量含む。
- P 3
- 1層 暗褐色土 縮り強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~5mm)を少量含む。
2層 暗褐色土 縮り非常に強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~10mm)を中量含む。
3層 暗褐色土 縮り非常に強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~10mm)を中量含む。
- P 4
- 1層 暗褐色土 縮り強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~10mm)を少量含む。
2層 暗褐色土 縮り強い、粘性やや弱い。ローム(φ1~15mm)を中量含む。



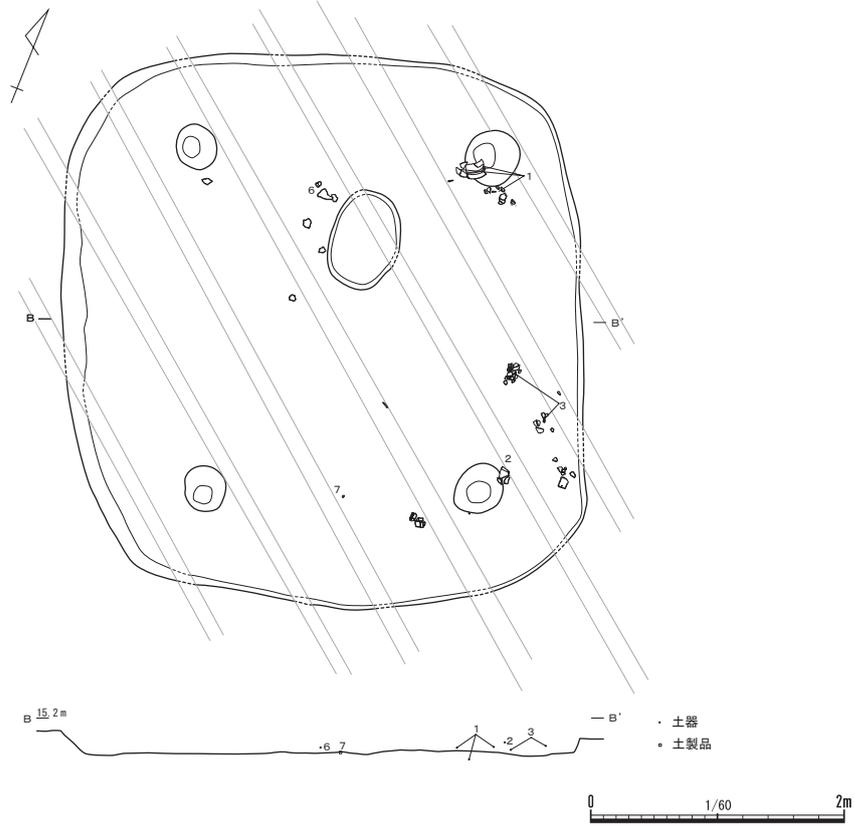
0 1/30 1m

焼土範囲

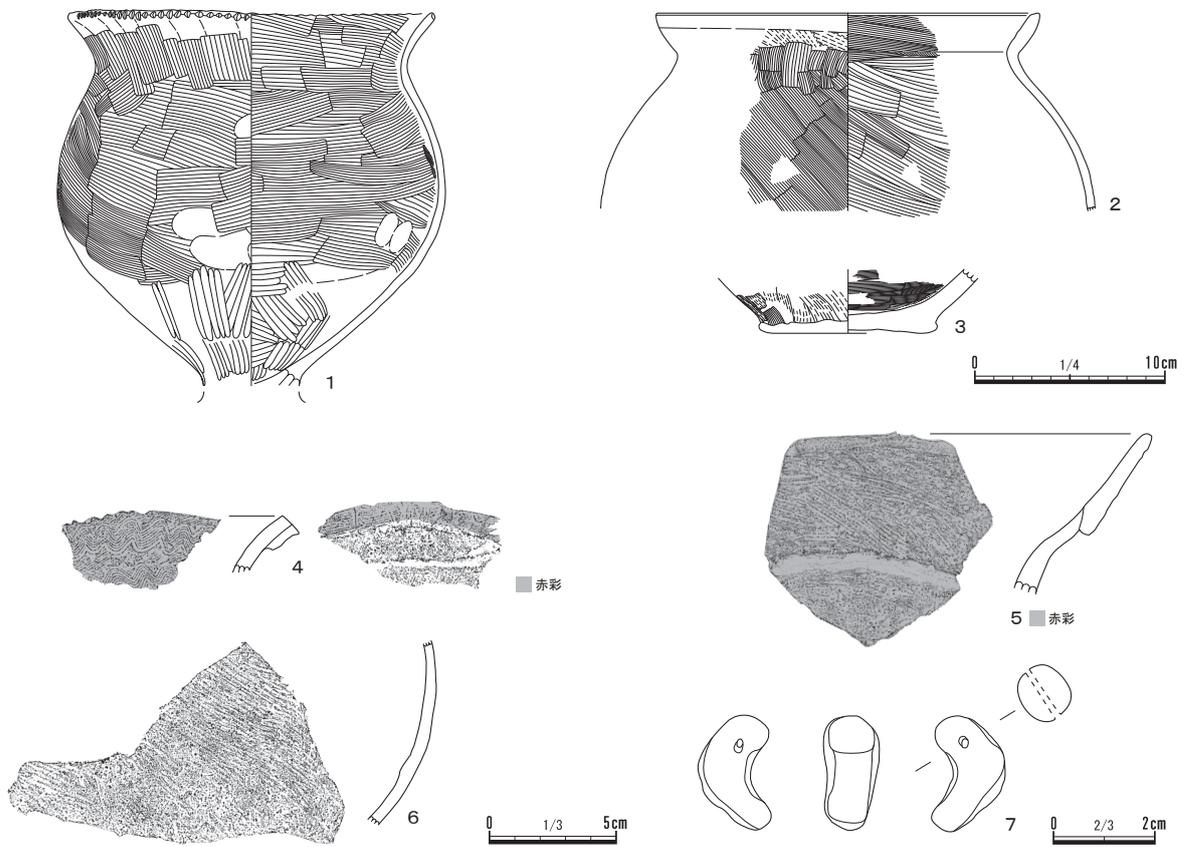
炉

1層 暗赤褐色土 縮り強い、粘性やや弱い。焼土(φ1~3mm)を中量含む。
2層 赤褐色土 縮り非常に強い、粘性弱い。焼土(φ1~10mm)を極多量含む。

第20図 631号住居跡(1/60)・炉(1/30)



第21図 631号住居跡遺物出土状態 (1/60)



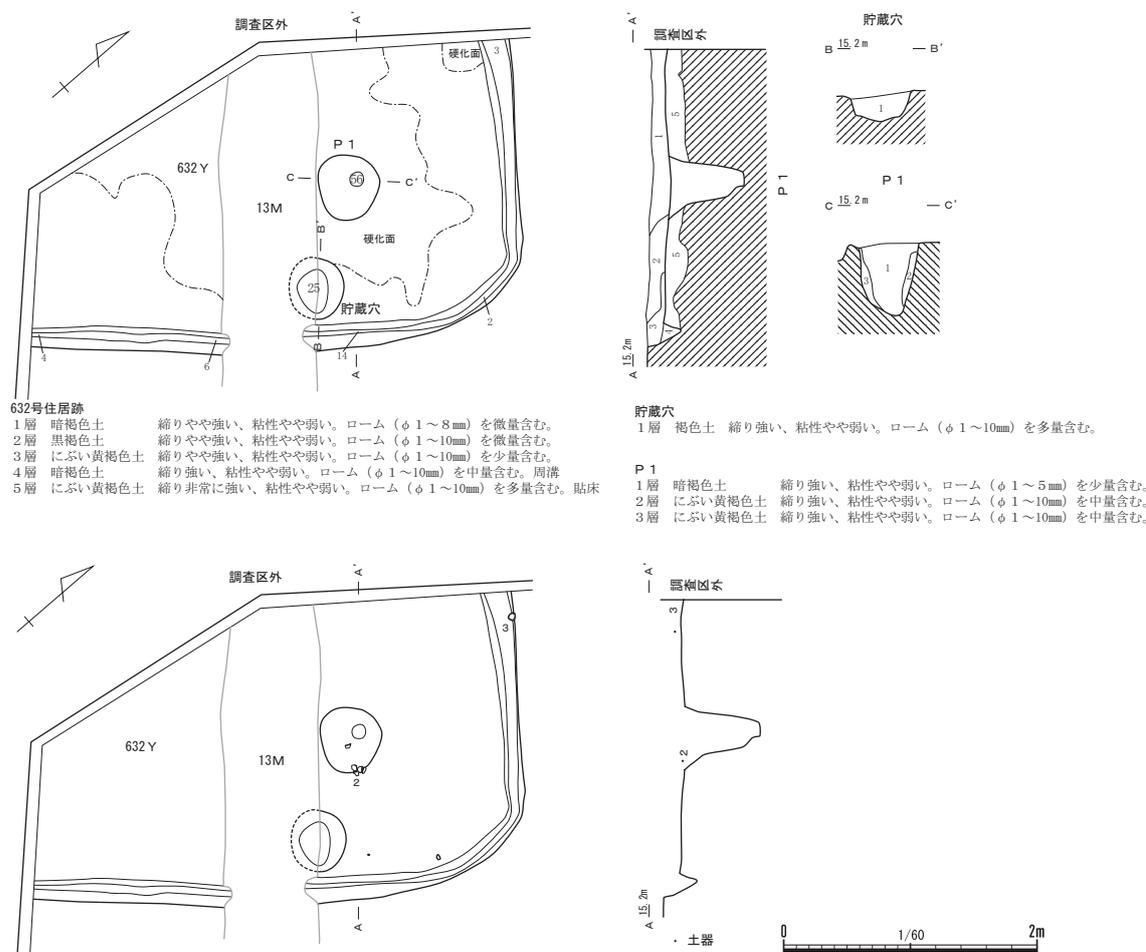
第22図 631号住居跡出土遺物 (1/4・1/3・2/3)

第3章 検出された遺構と遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	遺存度	法量 (cm)	色調	胎土	特徴
第22図1 図版11-1-1	甗	北部 (床下2~ 床上7cm)	口縁部 ~胴部 35%	高 [19.8] 口 (19.3)	黒褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・角閃石	台付甗/胴部内湾しながら立ち上がる、頸部ゆるやかに くびれる、口縁部ゆるく外反/内面：横位ハケ、胴部下 半ミガキ/外面：口唇部棒状工具によるキザミ、頸部縦 位ハケ後横位ナデ、胴部横位ハケ/内外面スス付着
第22図2 図版11-1-2	甗	東部 (床上11cm)	口縁部 5% 未満	高 [10.5] 口 (20.2)	にぶい褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・シャモット	頸部強く屈曲、口縁部厚みを持ち内湾気味に立ち上 がる/内面：横位ハケ/外面：口縁部斜位ハケ後横 位ナデ、頸部従位ハケ、胴部斜位ハケ
第22図3 図版11-1-3	壺	東部 (床上5~ 8cm)	底部~ 胴部 5% 未満	高 [3.4] 底 (8.5)	褐灰	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・シャモット	底部突出、底部から胴部ゆるやかに内湾して立ち上 がる/内面：横位ハケ/外面：胴部縦位ハケ、底部 無文
第22図4 図版11-1-4	壺	覆土中	口縁部 5% 未満	厚 0.6	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	幅狭の複合口縁、口縁部大きく外に開く/内面赤彩 /内面：斜位ハケ調整後8本1単位の櫛描波状文を 2段以上横走/外面：口唇部横位ハケによる面取り
第22図5 図版11-1-5	壺	覆土中	口縁部 5% 未満	厚 0.5	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・礫	幅広の複合口縁、口縁部ゆるやかに立ち上がる/口 縁部内外面赤彩/内面：横位ハケ後ナデ/外面：斜 位ハケ、頸部横位ナデ
第22図6 図版11-1-6	壺	北部 (床上7cm)	胴部 5% 未満	厚 0.5	灰黄褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	胴部内湾、内面に輪積み痕/内面：ナデ/外面：斜 位ハケ/内外面スス付着

挿図番号 図版番号	器種	出土位置	遺存度	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
第22図7 図版11-1-7	土製勾玉	南部 (床面)	完形	2.3	1.0	1.1	3.0	手捏/穿孔は表から裏/穿孔後の焼成

第9表 631号住居跡出土遺物一覧



第23図 632号住居跡・遺物出土状態(1/60)



第24図 632号住居跡出土遺物(1/4)

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	遺存度	法量 (cm)	色調	胎土	特徴
第24図1 図版11-2-1	高杯	覆土中	口縁部 ～胴部 5%未満	高 [4.1] 口 (16.2)	にぶい 黄橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・シャモット	口縁部内湾しながら立ち上がる／内外面：ミガキ
第24図2 図版11-2-2	高杯	東部 (床面)	胴部 5% 未満	高 [3.7]	にぶい 黄橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・シャモット	杯部下半わずかに稜、口縁部内湾／内面：ミガキ／ 外面：縦位ケズリ後ミガキ
第24図3 図版11-2-3	壺	北東壁 (床上8cm)	胴部～ 底部 5%未満	高 [1.9] 底 (4.8)	にぶい橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート・ シャモット	底部わずかに突出、底部から胴部内湾しながら立ち 上がる／内面：ナデ／外面：ミガキ

第10表 632号住居跡出土遺物一覧

cm×43cm以上、深さ25cmである。凸堤：検出されなかった。赤色砂利層：検出されなかった。

[覆土] 5層に分層される。5層が掘り方の埋土である。

[遺物] 高坏形土器、壺形土器が出土している。

[時期] 弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭。

遺物 (第24図、図版11-2、第10表)

[土器] (第24図1～3、図版11-2-1～3、第10表)

1は高坏形土器の口縁部から胴部、2は高坏形土器の胴部、3は壺形土器の底部である。

633号住居跡

遺構 (第25図)

[位置] (B-6) グリッド。

[検出状況] 南側大部分が調査区外に伸びる。13Mに切られる。

[構造] 平面形：隅丸方形を呈すると推測される。規模：検出長1.82m／深さ23cm。主軸方位：N-19°-Wである。壁溝：検出されなかった。炉：住居跡中央やや北側に位置していると推測される。平面形は不整形円形を呈する。断面形は皿状を呈する。燃烧部は検出されなかった。規模は長軸30cm以上／短軸30cm／深さ3cm。柱穴：検出されなかった。貯蔵穴：検出されなかった。凸堤：検出されなかった。赤色砂利層：検出されなかった。

[覆土] 5層に分層される。5層が掘り方の埋土である。

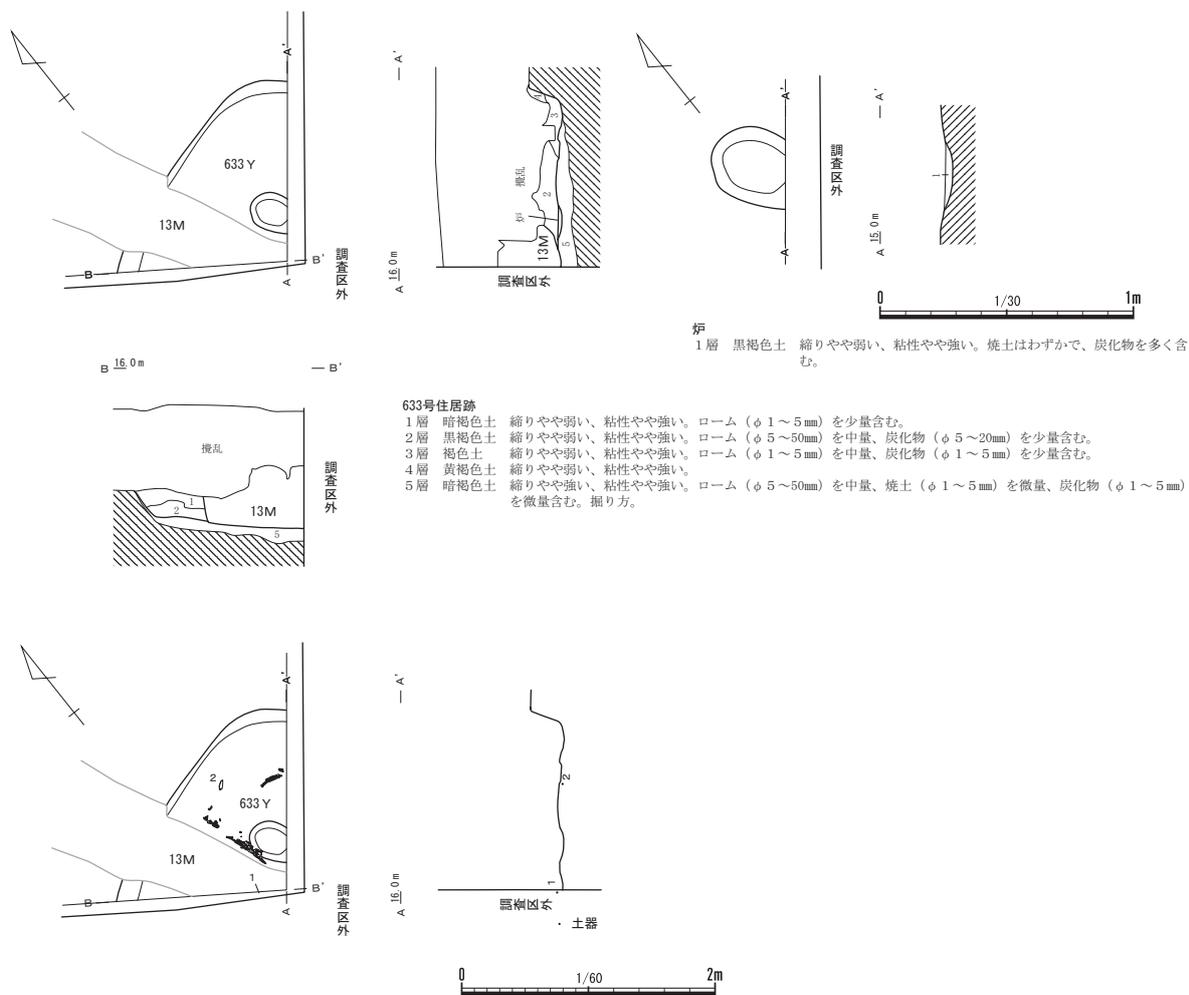
[遺物] 高坏形土器、甕形土器が出土している。炭化材が出土している。

[時期] 弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭。

遺物 (第26図、図版11-3、第11表)

[土器] (第26図1・2、図版11-3-1・2、第11表)

1は高坏形土器の口縁部、2は甕形土器の口縁部である。



第25図 633号住居跡(1/60)・炉(1/30)・遺物出土状態(1/60)



第26図 633号住居跡出土遺物(1/4)

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	遺存度	法量 (cm)	色調	胎土	特徴
第26図1 図版11-3-1	高坏	北部 (床上6cm)	口縁部 5% 未満	高 [2.2] 口 (23.4)	にぶい橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	口縁部わずかに内湾して立ち上がる／内外面：横位ナデ
第26図2 図版11-3-2	甕	中央部 (床面)	口縁部 5% 未満	高 [4.8] 口 (20.3)	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	頸部から口縁部屈曲して立ち上がる／内面：横位ハケ後ナデ／外面：斜位及び横位ハケ後ナデ

第11表 633号住居跡出土遺物一覧

634号住居跡

遺構 (第27・28図)

[位置] (B・C-3・4) グリッド。

[検出状況] トレンチャーによる攪乱を受ける。906 Dを切り、631Yに切られる。

[構造] 平面形：隅丸方形を呈する。規模：長軸3.48m／短軸3.35m／深さ41cm。主軸方位：N-82°-W。壁溝：貯蔵穴、P2の箇所を除いて住居壁面を全周する。上幅6～18cm／下幅3～7cm／深さ3～6cm。床面：貼床されるが、若干の起伏が認められる。硬化面は住居跡中央に認められた。炉：住居跡中央やや北側に位置している。平面形は不整形円形を呈する。断面形は皿状を呈する。規模は長軸57cm／短軸38cm／深さ9cm。柱穴：2本検出された。P1は20×17cm、深さ18cm、P2は39×33cm、深さ20cmである。P1は入口施設と思われる。貯蔵穴：北東コーナー付近から検出された。45×30cmの半円形を呈し、深さは37cm。凸堤：貯蔵穴の周囲に「コ」字状にめぐらされている。幅10～22cm、高さ3cm。赤色砂利層：住居北東コーナー付近の床面上に検出。検出範囲は51cm×39cm程で貯蔵穴の凸堤と重複している。

[覆土] 10層に分層される。9・10層が掘り方埋土である。

[遺物] 壺形土器、甕形土器が出土している。

[時期] 弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭。

遺物 (第29図、図版11-4、第12表)

[土器] (第29図1・2、図版11-4-1・2、第12表)

1は壺形土器の胴部、2は甕形土器の胴部である。

(3) 溝跡

56号溝跡

遺構 (第30図)

[位置] (D-2・3・4、E-3・4、F-5・6) グリッド。

[検出状況] 630 Yを切り、26 Hに切られる。

[構造] 規模：上幅0.7～1.53m／下幅0.25～0.5m／深さ52～58cm。／検出長13.3m。断面形：概ね浅いV字形を呈す。走行方位：東側でN-10°-W、西側でN-30°-W。硬化面：確認されなかった。

[覆土] 4層に分層される。

[遺物] 壺形土器、甕形土器が出土している。

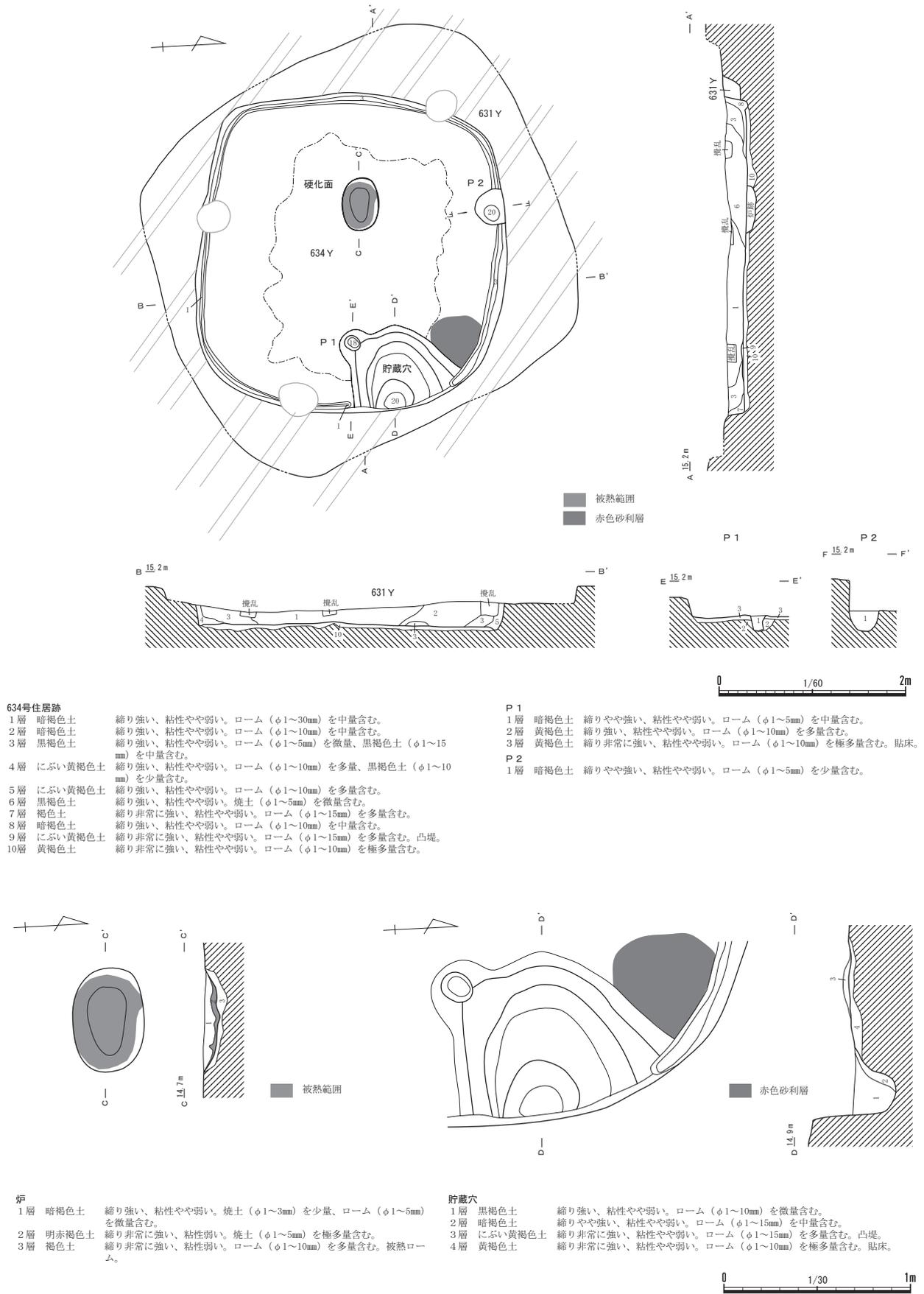
[時期] 弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭。

[所見] 本遺構は、V字形を基本とする断面形と出土遺物及び過去の周辺の調査成果から環濠の一部と考えられる。

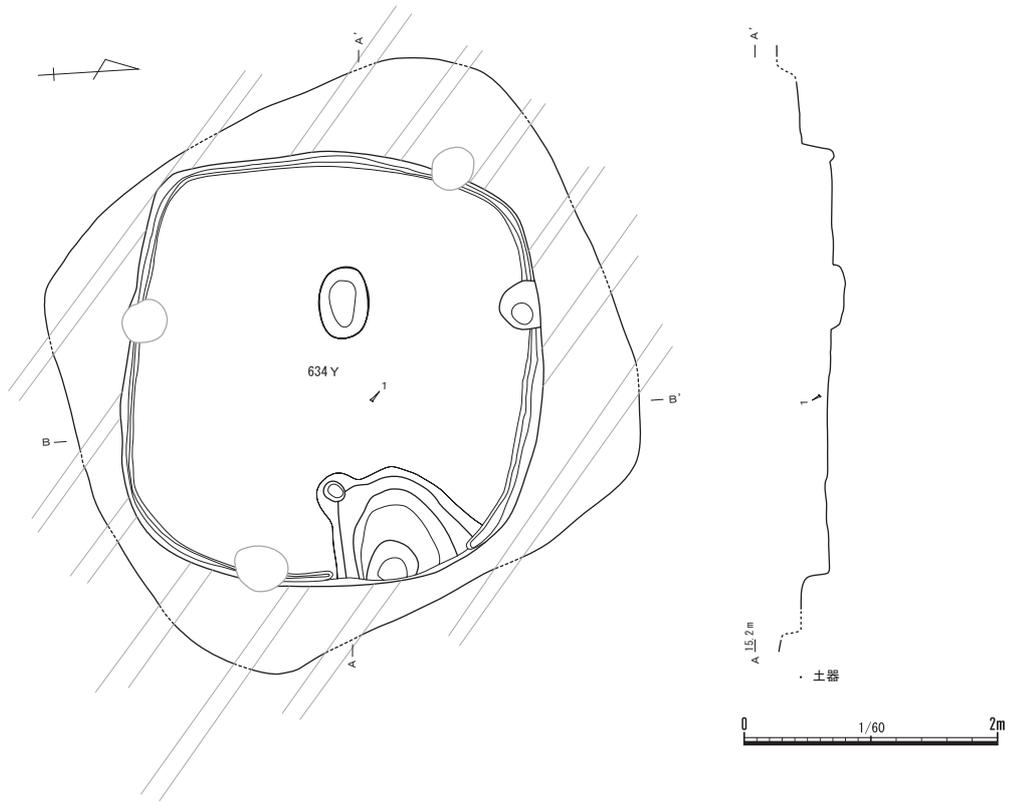
遺物 (第31図、図版11-5、第13表)

[土器] (第31図1～9、図版11-5-1～9、第13表)

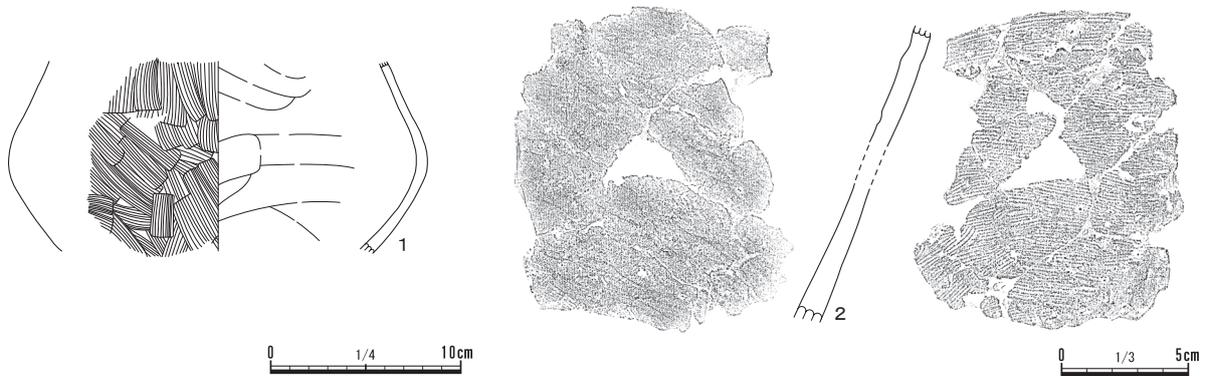
1は壺形土器の口縁部から胴部、2・3は甕形土器の脚台部、4～6は壺形土器の口縁部から胴部、7は壺形土器の胴部、8は甕形土器の口縁部、9は甕形土器の胴部である。



第27図 634号住居跡 (1/60)・炉 (1/30)・貯蔵穴 (1/30)



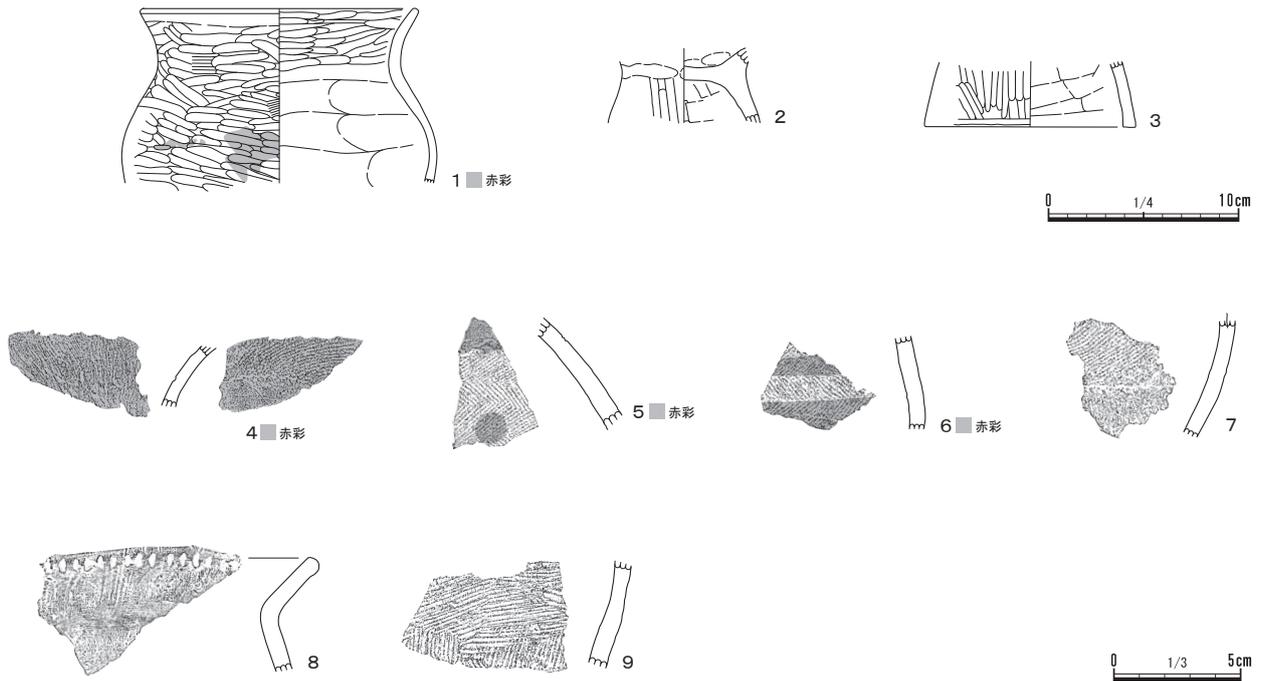
第28図 634号住居跡遺物出土状態 (1/60)



第29図 634号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	遺存度	法量 (cm)	色調	胎土	特徴
第29図1 図版11-4-1	壺	中央部 (床上9cm)	胴部 5% 未満	高 [10.2]	黒褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	胴部最大径ゆるやかに屈曲、胴部上半やや反る/ 内面：ナデ/外面：ハケ/内外面スス付着
第29図2 図版11-4-2	甗	覆土中	胴部 5% 未満	高 [11.8]	にぶい 黄橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・シャモット	胴部下半直線的に立ち上がる/内面：ハケナデ/ 外面：ハケ後ミガキ/外面スス付着

第12表 634号住居跡出土遺物一覧



第31図 56号溝跡出土遺物（1／4・1／3）

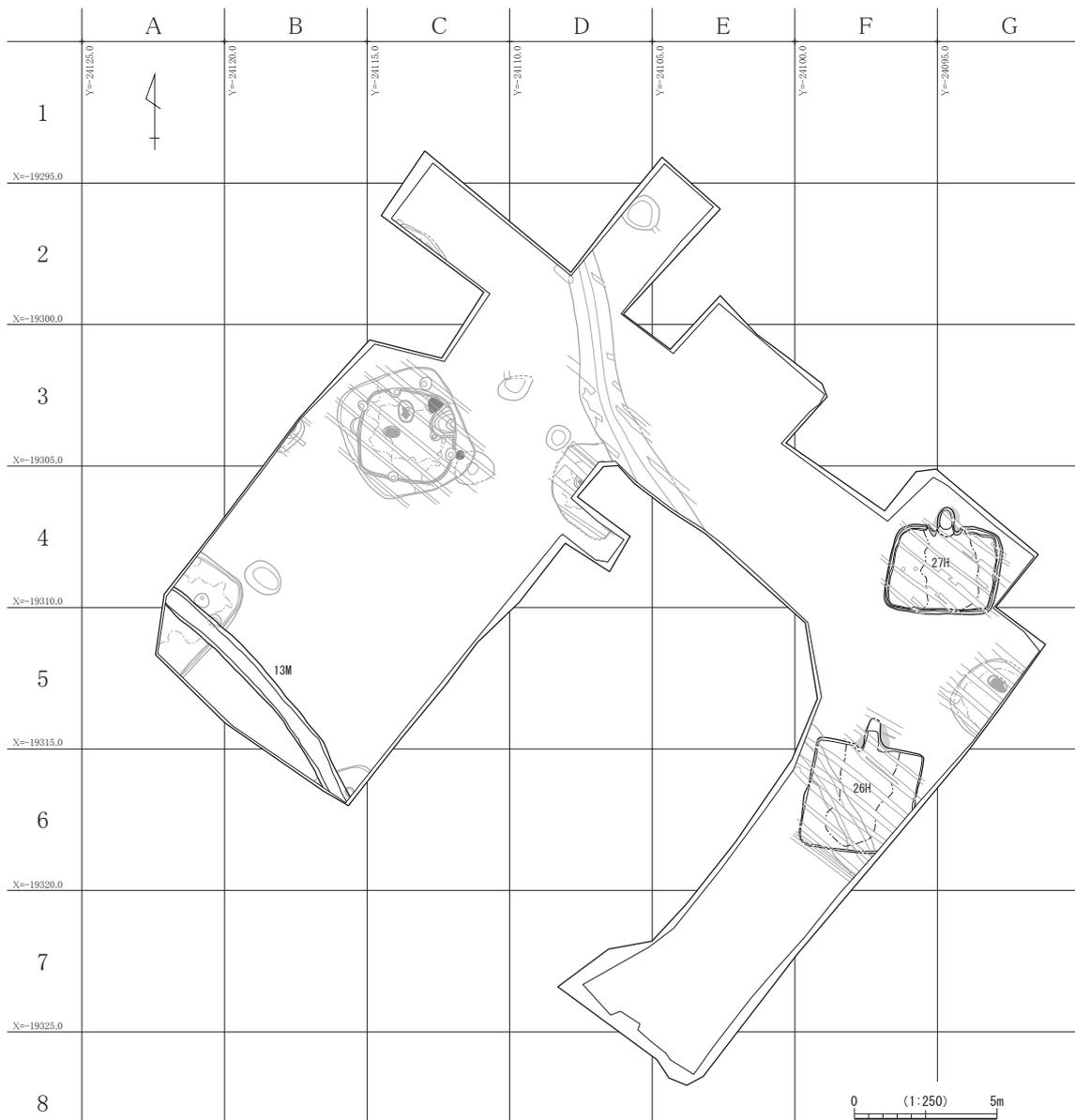
挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	遺存度	法量 (cm)	色調	胎土	特徴
第31図1 図版11-5-1	壺	底上10cm	口縁部 ～胴部 10%	高 [9.2] 口 (14.7)	にぶい褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・礫	胴部内湾、頸部から口縁部にかけてわずかに外反しながら立ち上がる／外面胴部赤彩／内面：横位ハケナデ後横位ヘラミガキ／外面：横位ヘラミガキ／内外面スス付着
第31図2 図版11-5-2	甕	底上10cm	脚台部 5% 未満	高 [4.0]	橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英・ 礫	台付甕／脚台部「ハ」の字状に開く／内面：ヘラケズリ／外面：縦位ケズリ
第31図3 図版11-5-3	甕	覆土中	脚台部 5% 未満	高 [3.4] 底 (9.2)	にぶい褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英・ シャモット	台付甕／脚台部内傾しながら立ち上がる／内面：ナデ／外面：縦位ミガキ
第31図4 図版11-5-4	壺	覆土中	口縁部 5% 未満	厚 0.4	にぶい橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英・ チャート	口縁部外反／内面結節縄文より上位赤彩、外面赤彩／内面：Z結節伴うLR横位施文／外面：縦位ミガキ
第31図5 図版11-5-5	壺	底上62cm	胴部 5% 未満	厚 0.7	にぶい褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	胴部上半内湾／羽状縄文上に円形朱文、結節縄文より上位赤彩／外面：S字結節縄文以下LR→RLの横位の羽状縄文が2単位
第31図6 図版11-5-6	壺	底上26cm	胴部 5% 未満	厚 0.5	黒褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英	胴部上半内湾／外面赤彩／外面：LR→RLの横位の羽状縄文が2単位
第31図7 図版11-5-7	壺	底上43cm	胴部 5% 未満	厚 0.5	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・角閃石	胴部下半わずかに内湾する／外面：S字結節縄文より上位に横位LRの単節縄文
第31図8 図版11-5-8	甕	底上46cm	口縁部 5% 未満	厚 0.7	灰褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・シャモット	頸部から口縁部にかけて屈曲しながら立ち上がる、口縁部わずかに外反／内面：横位ヘラミガキ／外面：口唇部にキザミ、頸部横位ナデ／内外面スス付着
第31図9 図版11-5-9	甕	底上25cm	胴部 5% 未満	厚 0.6	黒	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・雲母	胴部内湾／内面：横位ナデ／外面：ハケ調整／外面スス付着

第13表 56号溝跡出土遺物一覧

第3節 奈良・平安時代

(1) 概要

今回の調査では、奈良時代の住居跡2軒（26・27 H）、奈良・平安時代の溝跡1本（13 M）を検出した。住居跡はいずれも北壁にカマドを持ち軸方位も近似しているが、平面形は26 Hは方形で、27 Hは東西に最大長をもつ長方形を呈し違いが見られる。住居跡間も5 mほどの距離で近接している。出土した遺物は土師器の甕形土器・坏形土器、須恵器の甕形土器・坏形土器、銅環、鉄鏃である。



第32図 奈良・平安時代遺構全体図（1／250）

(2) 住居跡

26号住居跡

遺構 (第33・34図)

[位置] (F-5・6) グリッド。

[検出状況] 床面付近まで攪乱されるため、遺存状態は悪い。56 Mを切る。

[構造] 平面形: 方形を呈する。規模: 長軸3.84m/短軸3.78m/深さ35cm。主軸方位: N-11°-E。壁溝: 検出されなかった。床面: 住居跡中央部で南北に貼床が認められる。カマド: 住居跡北壁中央に位置する。袖部分はトレンチャーにより壊されている部分が多く、右袖はほぼ残存していない。燃烧面は検出されなかった。長さ151cm/幅127cm/壁への掘り込み96cm以上。柱穴: 検出されなかった。貯蔵穴: 検出されなかった。

[覆土] 5層に分層される。4・5層は掘り方の埋土である。覆土は黒褐色土・暗褐色土を基本とする。

[遺物] 須恵器坏形土器、甕形土器、土師器坏形土器、甕形土器が出土している。

[時期] 奈良時代(8世紀後葉)。

遺物 (第35図、図版12-1、第14表)

[土器] (第35図1~5、図版12-1-1~5、第14表)

1は須恵器の坏形土器口縁部、2は落合型の土師器坏形土器、3・4は土師器の甕形土器口縁部、5は土師器甕形土器の底部である。

27号住居跡

遺構 (第36図)

[位置] (F・G-4・5) グリッド。

[検出状況] 床面付近まで攪乱されるため、遺存状態は悪い。

[構造] 平面形: 長方形を呈する。規模: 長軸3.93m/短軸3.12m/深さ20cm。主軸方位: N-4°-E。壁溝: カマド部分を除き認められる。上幅12~24cm/下幅5~12cm/深さ6~12cm。床面: 住居跡中央部で南北に貼床が認められる。カマド: 住居北壁中央に位置し、袖部分が残存している。燃烧面は検出されなかった。煙道部は平坦な底面であり、煙道先端部は急角度で立ち上がる。長さ103cm/幅127cm/壁への掘り込み60cmである。柱穴: 検出されなかった。貯蔵穴: 検出されなかった。

[覆土] 13層に分層される。12・13層は掘り方の埋土である。覆土は黒褐色土を基本とする。

[遺物] 須恵器坏形土器、土師器坏形土器、甕形土器、銅環、鉄鏃が出土している。

[時期] 奈良時代(8世紀中葉)。

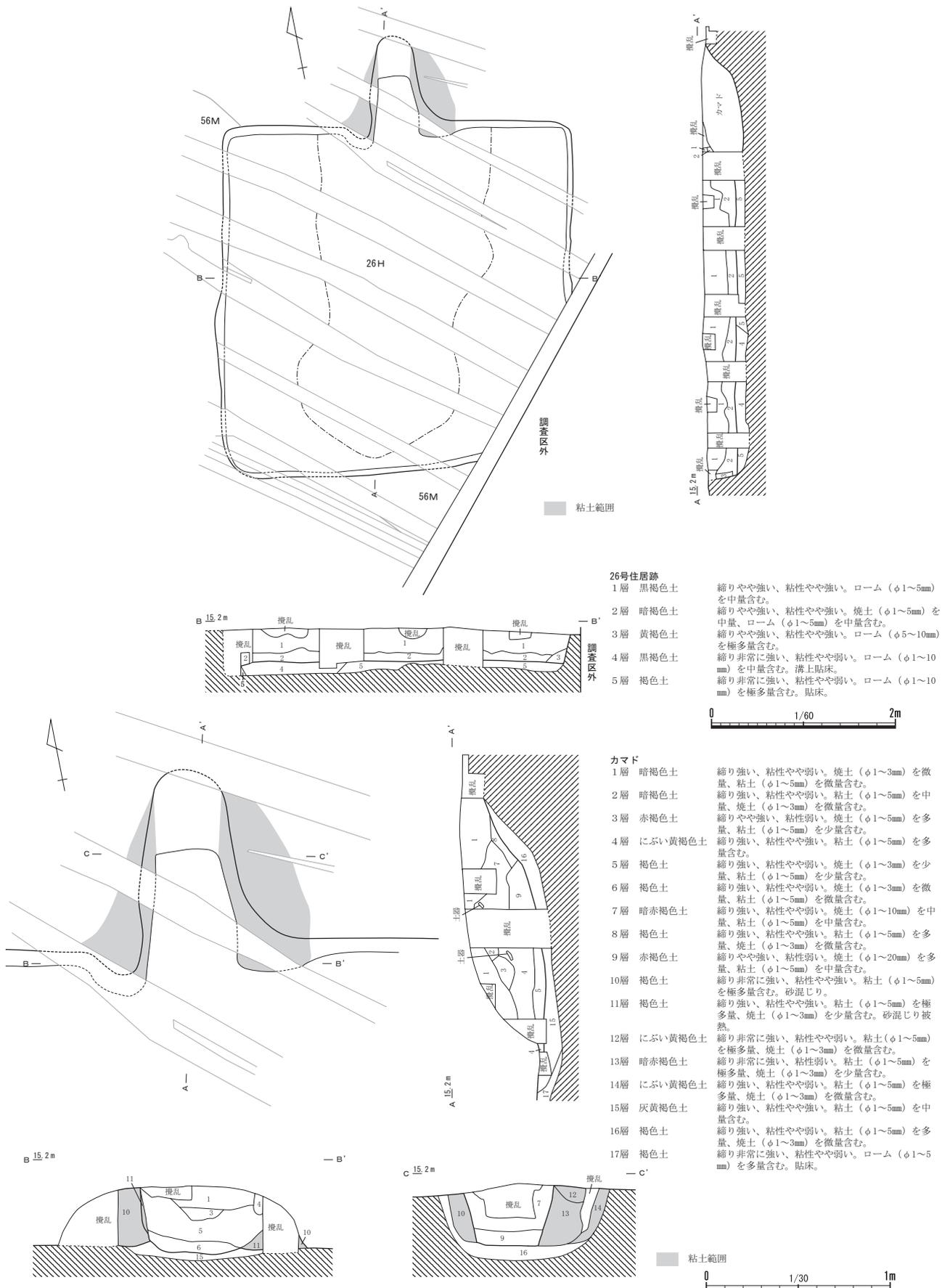
遺物 (第37図、図版12-2、第15表)

[土器] (第37図1~6、図版12-2-1~6、第15表)

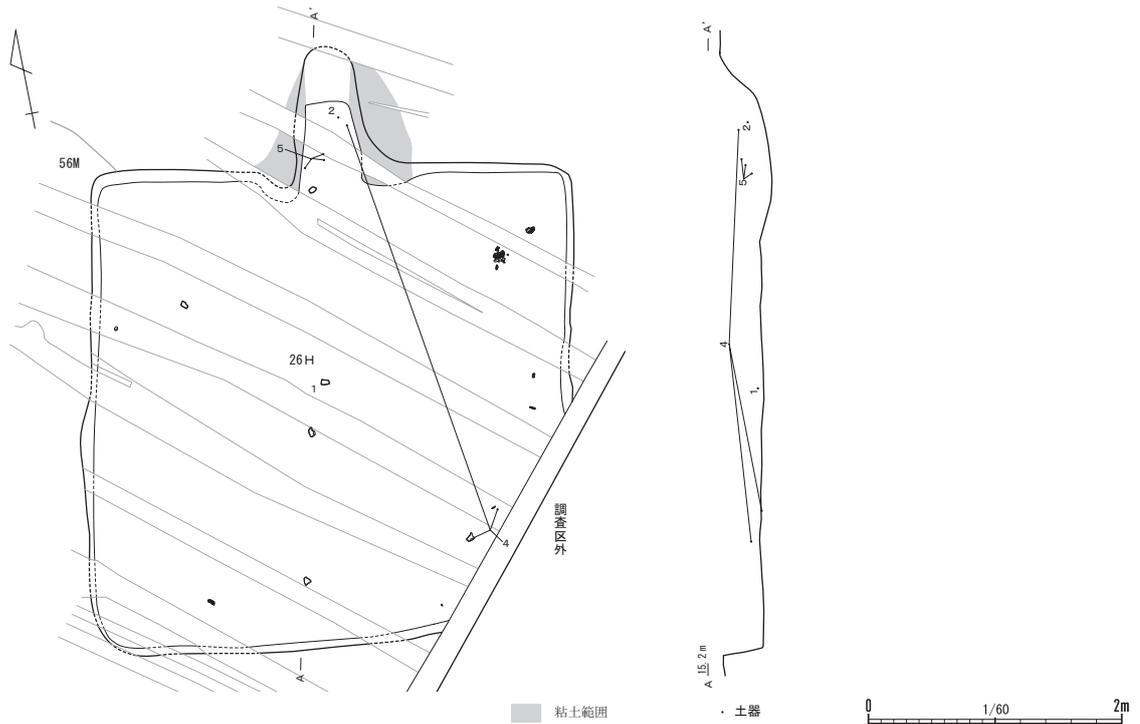
1は須恵器の坏形土器底部、2は須恵器の坏形土器口縁部、3~5は土師器の甕形土器口縁部、6は土師器の甕形土器胴~底部である。

[金属製品] (第37図7・8、図版12-2-7・8、第15表)

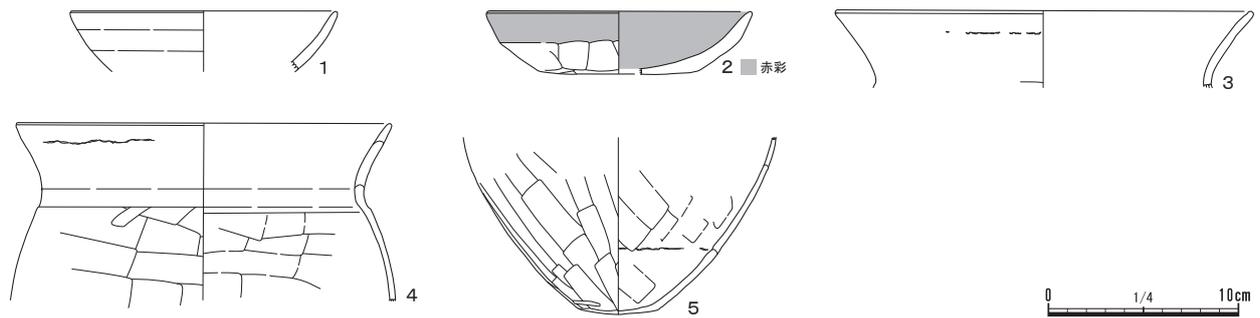
7は銅製の環の完形品、8は鉄鏃の茎部である。



第33図 26号住居跡(1/60)・カマド(1/30)



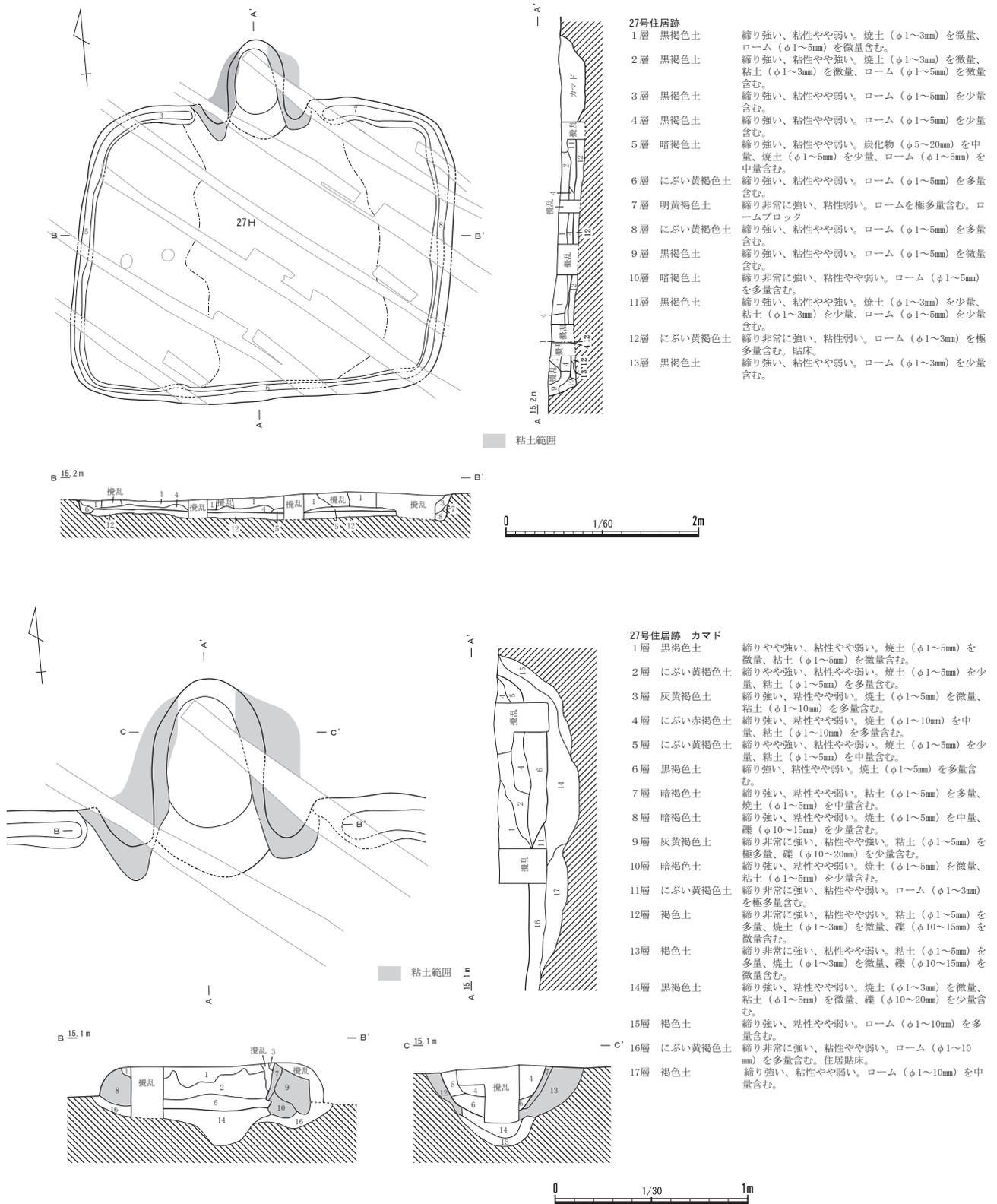
第34図 26号住居跡遺物出土状態 (1/60)



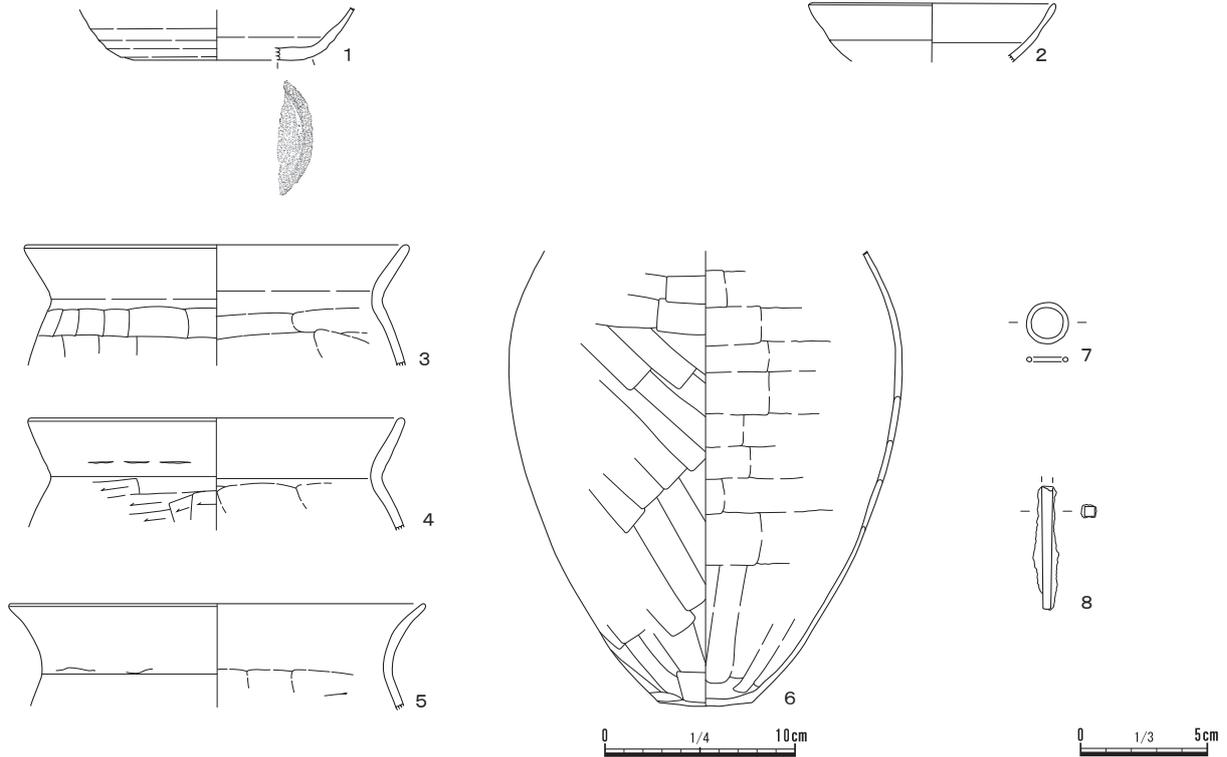
第35図 26号住居跡出土遺物 (1/4)

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	遺存度	法量 (cm)	色調	胎土	特徴	備考
第35図1 図版12-1-1	須恵器 坏	中央部 (床上5cm)	口縁部 5% 未満	高口 [3.2] (14.0)	灰黄	黒色粒子・白色粒子・ 石英・白色針状物質・ 雲母	口縁部内湾しながら立ち上がる/ 内外面：横位ナデ	南比企産
第35図2 図版12-1-2	土師器 坏	カマド	口縁～ 底部 10%	高口 [3.2] (14.0)	にぶい橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・角閃石・ シャモット	底部から口縁部にかけて内湾しながら 立ち上がる、口縁部下半に稜/ 口縁部内外面赤彩/口縁部内外面 ナデ/内面：ナデ/外面：ケズリ /底部ヘラケズリ	落合型
第35図3 図版12-1-3	土師器 甕	覆土中	口縁部 5% 未満	高口 [4.1] (22.1)	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英・ 角閃石	口縁部「く」の字状に外反/内外面： 横位ナデ	武蔵型甕
第35図4 図版12-1-4	土師器 甕	南東部・カマド (床面～床上 19cm)	口縁～ 胴部 5% 未満	高口 [9.6] (19.7)	橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・角閃石	口縁部「く」の字状に外反/内外面： 口縁部ナデ/外面：胴部横位ケズリ、 頸部強い横位ナデ	武蔵型甕
第35図5 図版12-1-5	土師器 甕	カマド	胴～ 底部 5% 未満	高底 [9.5] (4.2)	にぶい橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・礫・シャ モット	長胴甕/底部から胴部にかけて内湾 しながら立ち上がる/内面：ヘラ ナデ/外面：一部ハケメ痕、胴部 上～下位縦位ケズリ/底部ケズリ	武蔵型甕

第14表 26号住居跡出土遺物一覧



第36図 27号住居跡(1/60)・カマド(1/30)



第37図 27号住居跡出土遺物（1/4・1/3）

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	遺存度	法量 (cm)	色調	胎土	特徴	備考
第37図1 図版12-2-1	須恵器 坏	北部 (床面)	底部 10%	高 [2.8] 底 (8.9)	黄灰	黒色粒子・白色粒子・ 石英・白色針状物質	ロクロ整形／内面：ナデ／底部及 び底端部：回転ヘラケズリ	南比企産
第37図2 図版12-2-2	須恵器 坏	南部 (床上12cm)	口縁部 5% 未満	高 [3.1] 口 (13.0)	オリーブ 灰	黒色粒子・白色粒子・ 石英・白色針状物質	胴部から口縁部内湾しながらゆる やかに立ち上がる／内外面：横位 ナデ	南比企産
第37図3 図版12-2-3	土師器 甕	カマド	口縁～ 胴部 5% 未満	高 [6.4] 口 (20.2)	明赤褐	白色粒子・赤色粒子・ 角閃石・雲母	口縁部「く」の字状に外反／内面： 横位ナデ／外面：胴部横位擦痕、 頸部強い横位ナデ	武蔵型甕
第37図4 図版12-2-4	土師器 甕	カマド	口縁～ 胴部 5% 未満	高 [6.0] 口 (19.9)	にぶい 赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・雲母	口縁部「く」の字状に外反／内面： 横位ナデ／外面：胴部横位ケズリ、 頸部及び口縁部強い横位ナデ	武蔵型甕
第37図5 図版12-2-5	土師器 甕	北部 (床面)	口縁部 5% 未満	高 [5.6] 口 (21.9)	にぶい 黄橙	白色粒子・赤色粒子・ 角閃石・雲母	口縁部「く」の字状に外反／内外面： 横位ナデ	武蔵型甕
第37図6 図版12-2-6	土師器 甕	カマド	胴～ 底部 30%	高 [24.2] 底 4.9	にぶい 赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・雲母	底部から胴部にかけて内湾しなが ら立ち上がる、胴部最大径は胴部 上半に位置／内面：ナデ／外面： 胴部縦位ケズリ／内外面スス付着	武蔵型甕

挿図番号 図版番号	器種	出土位置	遺存度	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	備考
第37図7 図版12-2-7	銅環	西部 (床上9cm)	完形	1.7	1.7	0.2	1.2	円形で断面はやや楕円形	
第37図8 図版12-2-8	鉄鏃	西部 (床上7cm)	下部 依存	[4.9]	[0.4]	[0.4]	4.7	断面はほぼ正方形で、端部に向け断面 形は小さくなる／鉄鏃の基部	

第15表 27号住居跡出土遺物一覧

(3) 溝跡

13号溝跡

遺 構 (第38図)

[位 置] (A-4・5、B-5・6) グリッド。

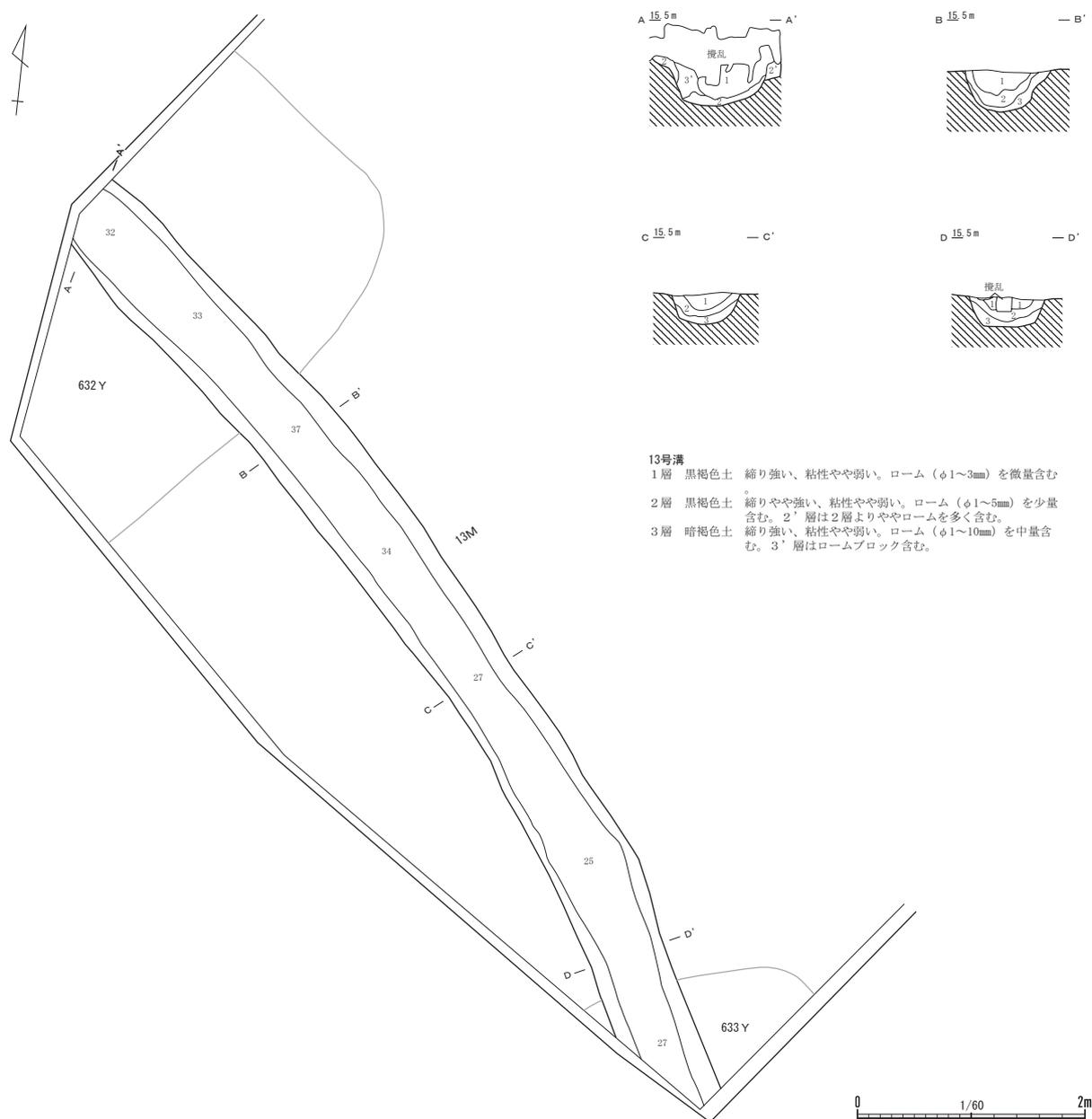
[検出状況] 632・633 Yを切る。

[構 造] 調査区西側で検出、調査区外の北西と南東へと伸びる。平面形：やや弧状に伸びる。断面形：逆台形を呈す。規模：上幅0.39～0.78m / 下幅0.35～0.61m / 深さ28～43cm / 検出長9.48m。走行方位：東側でN-46°-W、西側でN-29～37°-W。硬化面：確認されなかった。

[覆 土] ローム粒を含む黒褐色土・暗褐色土を基調とする。

[遺 物] 図示できる遺物は出土していない。

[時 期] 奈良・平安時代。



第38図 13号溝跡 (1 / 60)

第4節 遺構外出土遺物

(1) 概要

表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内だが、明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。具体的には、縄文時代の遺物、弥生時代後期～古墳時代前期の土器、奈良・平安時代以降の遺物である。

(2) 縄文時代の遺物

[石器] (第39図1～4、図版13-1-1～4、第16表)

1は黒曜石製の微細剥離痕のある剥片、2はチャート製のスクレイパー、3はホルンフェルス製の打製石斧、4は片岩製の打製石斧である。

[土器] (第39～40図5～60、図版13-1-5～17、図版14-1-18～37、図版15-1-38～60、第16表)

5～7は早期の土器である。

8～39は中期の土器で、8は中期前葉の阿玉台I b式土器、9は中期中葉の勝坂I式土器、10・11は中期中葉の勝坂II式土器、12～21は中期中葉の勝坂III式土器、22は中期中葉の勝坂式土器、23～27は中期後葉の加曾利E I式土器、28・29は中期後葉の加曾利E II式土器、30は中期後葉の曾利式土器、31は中期後葉の連弧文土器、32～34は中期後葉の加曾利E III式土器、35・36は中期後葉の加曾利E IV式土器、37・38は中期の土器、39は中期後葉の土器である。

40～60は後期の土器で、40～44は後期初頭の称名寺式土器、45～53は後期前葉の堀之内1式土器、54～56は後期前葉の堀之内2式土器、57・58は後期前葉～中葉の土器である。

59・60は晩期の土器で、59・60は晩期前葉の安行3 d式土器である。

[土製品] (第40図61・62、図版15-1-61・62、第16表)

61は中期中葉の勝坂式の土器片錘、62は中期の土製円盤である。

(3) 弥生時代後期～古墳時代前期の土器

[土器] (第41図1～9、図版16-1-1～9、第17表)

1・3は壺形土器、2・4～9は甕形土器である。

(4) 奈良・平安時代以降の遺物

[陶磁器] (第42図1、図版16-2-1～9、第18表)

2～9は図版と表のみ掲載した。1・2・6～9は陶器で、1は陶器の捏鉢、2は中世の陶器の長頸壺、6・7は瓶類、8は天目碗、9は甕である。

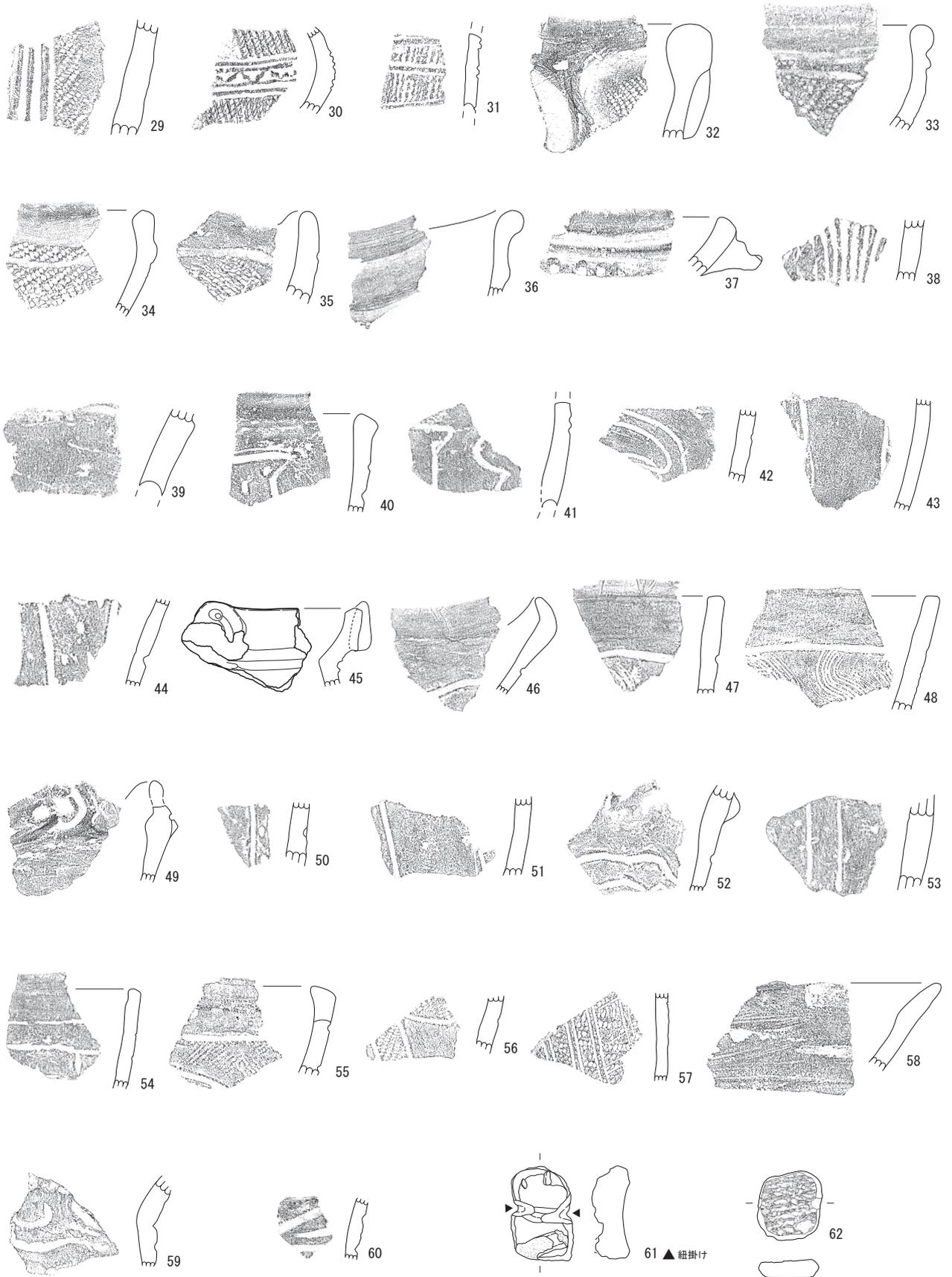
3～5は磁器で、3は蓋、4は碗類、5は皿である。

[鉄製品] (第42図10・11、図版16-2-10・11、第18表)

10・11は刀子である。



第39図 縄文時代遺構外出土遺物1 (2/3・1/3)



第40図 縄文時代遺構外出土遺物2 (1/3)

第3章 検出された遺構と遺物

挿図番号 図版番号	器種	出土位置	遺存度	石 材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	特 徴	備 考
第 39 図 1 図版 13- 1- 1	微細剥離 痕のある 剥片	表土	完形	黒曜石	2.3	1.9	1.3	4.57	厚手な剥片／表面右縁部、右側縁に連続する微細剥離痕がある	
第 39 図 2 図版 13- 1- 2	スクレイ パー	632 Y	左側面 一部 欠損	チャート	42	32	10	14.8	打面・打点を残す剥片素材／打面は自然面／左・右側縁部に連続する調整が施されている	
第 39 図 3 図版 13- 1- 3	打製石斧	56 M	上部 残存	ホルン フェルス	[51]	[49]	[20]	48.8	分銅形／側縁部に細かな調整が施されている	
第 39 図 4 図版 13- 1- 4	打製石斧	(D-2) G	完形	片岩	90	42	15	63.7	分銅形／完形／主要剥離面を大きく残す／刃部に細かく調整が行われている	

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	遺存度	法 量 (cm)	色 調	胎 土	特 徴	時 期 (型 式)
第 39 図 5 図版 13- 1- 5	深鉢	56 M	胴部 5% 未満	厚 0.8	明褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	擦痕、輪積痕あり	早期後葉 (条痕文系)
第 39 図 6 図版 13- 1- 6	深鉢	(F-4) G	胴部 5% 未満	厚 1.1	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・雲母・礫	内外面擦痕	早期後葉 (条痕文系)
第 39 図 7 図版 13- 1- 7	深鉢	T P 4	胴部 5% 未満	厚 0.9	にぶい 赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英	撚糸 L、輪積痕	早期
第 39 図 8 図版 13- 1- 8	深鉢	(B-5) G	胴部 5% 未満	厚 0.7	にぶい 赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英・ 雲母	ヒダ状圧痕	中期前葉 (阿玉台 I b 式)
第 39 図 9 図版 13- 1- 9	浅鉢	(F-5) G	口縁部 5% 未満	厚 1.0	橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート・ 礫	3条の横位角押文	中期中葉 (勝坂 I 式)
第 39 図 10 図版 13- 1-10	深鉢	630 Y	胴部 5% 未満	厚 1.1	にぶい 黄橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英	縦位沈線及び縦位隆帯による区画、 沈線間に棒状工具により密な斜位 沈線を充填	中期中葉 (勝坂 II 式)
第 39 図 11 図版 13- 1-11	深鉢	(C-4) G	胴部 5% 未満	厚 0.8	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英	爪形文を持つ横位隆線、下部は棒 状工具による多条の縦位沈線	中期中葉 (勝坂 II 式)
第 39 図 12 図版 13- 1-12	浅鉢	(D-3) G	口縁部 5% 未満	厚 0.8	にぶい橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・角閃石・ 石英	口縁部内屈する／無文	中期中葉 (勝坂 III 式)
第 39 図 13 図版 13- 1-13	深鉢	56 M	胴部 5% 未満	厚 1.1	赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 角閃石・石英	横行するキザミのある2条の隆線、 隆帯間にクランク状の沈線、下位 に R L 縦位施文／内面磨耗	中期中葉 (勝坂 III 式)
第 39 図 14 図版 13- 1-14	深鉢	56 M	胴部 5% 未満	厚 0.9	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英	キザミを持つ隆線でモチーフを描 く	中期中葉 (勝坂 III 式)
第 39 図 15 図版 13- 1-15	深鉢	(D-3) G	胴部 5% 未満	厚 1.1	橙	黒色粒子・白色粒子・ チャート・礫	内側に沈線、外側にキザミを持つ 隆線で曲線を描く、隆帯内部に多 状の沈線を充填	中期中葉 (勝坂 III 式)
第 39 図 16 図版 13- 1-16	深鉢	(E-6) G	胴部 5% 未満	厚 1.1	赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・角閃石・ 礫	キザミを持つ隆線で区画、隆線に 沿って沈線を施す、隆帯より下位 に沈線を充填	中期中葉 (勝坂 III 式)
第 39 図 17 図版 13- 1-17	深鉢	(F-5) G	胴部 5% 未満	厚 1.1	にぶい 赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・角閃石・ チャート	キザミを持つ隆線で区画し、内部 を沈線及び竹管による刺突文で充填	中期中葉 (勝坂 III 式)
第 39 図 18 図版 14- 1-18	深鉢	(B-5) G	胴部 5% 未満	厚 1.3	にぶい橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート・ 石英	キザミのある隆線で区画される、 一部剥離／内面：磨耗激しい	中期中葉 (勝坂 III 式)
第 39 図 19 図版 14- 1-19	深鉢	26 H	胴部 5% 未満	厚 1.1	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・角閃石・ 石英	隆線によるクランク文、一部キザ ミを施す	中期中葉 (勝坂 III 式)
第 39 図 20 図版 14- 1-20	深鉢	632 Y	胴部 5% 未満	厚 1.0	にぶい 赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート・ 石英	上部 R L 斜位施文、下部無文	中期中葉 (勝坂 III 式)
第 39 図 21 図版 14- 1-21	深鉢	(E-4) G	胴部 5% 未満	厚 1.2	にぶい 赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・雲母	隆帯による曲線文、剥離が見られ る／内面横位擦痕	中期中葉 (勝坂 III 式)

第 16 表 縄文時代遺構外出土遺物一覧 (1)

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	遺存度	法量 (cm)	色調	胎土	特徴	時期 (型式)
第39図22 図版14-1-22	深鉢	26 H	口縁部 5% 未満	厚 0.8	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・角閃石・ 石英	隆帯による渦巻文及び外縁にキザミ	中期中葉 (勝坂式)
第39図23 図版14-1-23	深鉢	632 Y	口縁部 5% 未満	厚 0.9	にぶい橙	黒色粒子・赤色粒子・ チャート・石英	R L 施文後隆帯による渦巻文	中期後葉 (加曾利 E I 式)
第39図24 図版14-1-24	深鉢	27 H	胴部 5% 未満	厚 0.9	橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート	無節 R 施文後隆帯および沈線により 棒状に区画、隆帯内部に沈線を 充填	中期後葉 (加曾利 E I 式)
第39図25 図版14-1-25	深鉢	631 Y	胴部 5% 未満	厚 1.3	にぶい 赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英・ 雲母	R L 縦位施文後横位2条の沈線、 沈線間を磨消す	中期後葉 (加曾利 E I 式)
第39図26 図版14-1-26	深鉢	56 M	胴部 5% 未満	厚 1.1	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英	横位隆帯	中期後葉 (加曾利 E I 式)
第39図27 図版14-1-27	深鉢	13 M	胴部 5% 未満	厚 1.1	にぶい橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・礫	R L 縦位施文後隆帯にて棒状に区画	中期後葉 (加曾利 E I 式)
第39図28 図版14-1-28	深鉢	634 Y	胴部 5% 未満	厚 1.2	にぶい 赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート	L R 縦位施文後横位沈線により区画	中期後葉 (加曾利 E II 式)
第40図29 図版14-1-29	深鉢	632 Y 掘り方	胴部 5% 未満	厚 1.4	にぶい褐	白色粒子・赤色粒子・ 石英	R L 縦位施文後縦位沈線	中期後葉 (加曾利 E II 式)
第40図30 図版14-1-30	深鉢	B区表土	胴部 5% 未満	厚 0.9	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート	撚糸 L 縦位施文、中央を横位の狭 い沈線で区画、中心の帯は波状を 呈し棒状工具で均等な刺突文	中期後葉 (曾利式)
第40図31 図版14-1-31	深鉢	26 H	胴部 5% 未満	厚 0.7	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英・ チャート	横位2条の沈線に間に撚糸 L 縦位 を充填	中期後葉 (連弧文土器)
第40図32 図版14-1-32	深鉢	634 Y	口縁部 5% 未満	厚 1.1	にぶい褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	R L 横位施文後隆帯により区画	中期後葉 (加曾利 E III 式)
第40図33 図版14-1-33	深鉢	(D-3) G	口縁部 5% 未満	厚 0.9	橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英	L R 横位施文後上位に隆帯	中期後葉 (加曾利 E III 式)
第40図34 図版14-1-34	深鉢	631 Y	口縁部 5% 未満	厚 0.7	にぶい橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	口縁部直下に L R 横位を施した低い 隆帯を巡らし、以下単節羽状縄文	中期後葉 (加曾利 E III 式)
第40図35 図版14-1-35	深鉢	A区表土	口縁部 5% 未満	厚 1.2	灰褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート・ 礫	波状口縁／縦位無節 L 施文後1条 の沈線	中期後葉 (加曾利 E IV 式)
第40図36 図版14-1-36	深鉢	631 Y	口縁部 5% 未満	厚 0.8	にぶい 黄橙	黒色粒子・白色粒子	波状口縁／口縁に沿って隆帯を持つ	中期後葉 (加曾利 E IV 式)
第40図37 図版14-1-37	浅鉢	56 M	口縁部 5% 未満	厚 1.0	黒褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・シャモット	2条の横位沈線及び外縁に工具に よるキザミ	中期
第40図38 図版15-1-38	深鉢	631 Y	胴部 5% 未満	厚 1.0	橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英	棒状工具による等間隔の密な縦位 沈線	中期
第40図39 図版15-1-39	深鉢	(C-4) G	胴部 5% 未満	厚 1.4	にぶい褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・角閃石・ 石英・礫	横位沈線	中期後葉
第40図40 図版15-1-40	深鉢	56 M	口縁部 ～胴部 5% 未満	厚 0.9	にぶい 黄褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英	胴部沈線及び刺突文	後期初頭 (称名寺式)
第40図41 図版15-1-41	深鉢	26 H	胴部 5% 未満	厚 1.0	暗褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英・ 角閃石・チャート	2条の沈線を施文	後期初頭 (称名寺式)
第40図42 図版15-1-42	深鉢	631 Y	胴部 5% 未満	厚 0.8	にぶい褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英・ 角閃石・チャート	2条の平行沈線を施文	後期初頭 (称名寺式)

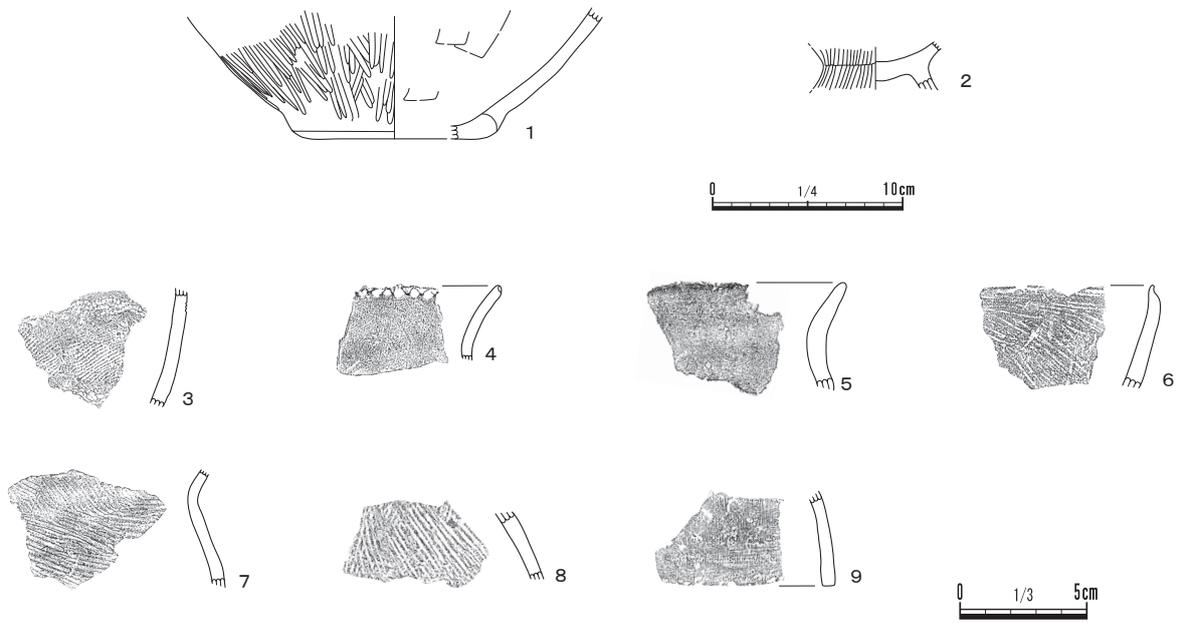
第16表 縄文時代遺構外出土遺物一覧(2)

第3章 検出された遺構と遺物

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	遺存度	法量 (cm)	色調	胎土	特徴	時期 (型式)
第40図43 図版15-1-43	深鉢	631 Y	胴部 5% 未満	厚 0.8	褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英・ 角閃石・輝石	縦位2条の沈線	後期初頭 (称名寺式)
第40図44 図版15-1-44	深鉢	631 Y	胴部 5% 未満	厚 0.8	にぶい 黄橙	赤色粒子	縦位2条以上の沈線、沈線間に同 一工具による刺突文	後期初頭 (称名寺式)
第40図45 図版15-1-45	深鉢	634 Y	口縁部 5% 未満	厚 0.8	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート	C字状隆帯による渦巻文、頸部や や幅の広い1条の横位沈線	後期前葉 (堀之内1式)
第40図46 図版15-1-46	深鉢	634 Y	口縁部 5% 未満	厚 0.6	黒褐	黒色粒子・白色粒子・ チャート・石英	波状口縁／横位沈線	後期前葉 (堀之内1式)
第40図47 図版15-1-47	深鉢	27 H	口縁部 5% 未満	厚 1.0	にぶい 赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英	口縁部無文、1条の沈線で区画し た下部に櫛歯状工具による波状文	後期前葉 (堀之内1式) 47と同一個体
第40図48 図版15-1-48	深鉢	(E-4) G	口縁部 5% 未満	厚 1.0	灰褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート	口縁部無文、1条の沈線で区画し た下部に櫛歯状工具による波状文	後期前葉 (堀之内1式) 48と同一個体
第40図49 図版15-1-49	深鉢	B区表土	口縁部 5% 未満	厚 0.9	灰褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・角閃石・ チャート・礫	波状口縁／C字状隆帯による渦巻 文、渦巻文の中央部穿孔、隆帯上 に円形刺突／内面削条痕	後期前葉 (堀之内1式)
第40図50 図版15-1-50	深鉢	631 Y	胴部 5% 未満	厚 0.9	明褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート	縦位直線の沈線に沿う刺突文	後期前葉 (堀之内1式)
第40図51 図版15-1-51	深鉢	631 Y	胴部 5% 未満	厚 0.9	にぶい 赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英	縦位2条の沈線	後期前葉 (堀之内1式)
第40図52 図版15-1-52	深鉢	56 M	胴部 5% 未満	厚 1.0	にぶい 黄褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート・ 石英	横位波状の隆帯を持ち、胴部は沈 線を施文	後期前葉 (堀之内1式)
第40図53 図版15-1-53	深鉢	(C-4) G	胴部 5% 未満	厚 1.3	橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・角閃石・ シャモット	縦位2条の沈線	後期前葉 (堀之内1式)
第40図54 図版15-1-54	深鉢	631 Y	口縁部 5% 未満	厚 0.7	にぶい 赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 角閃石・チャート・ 雲母・シャモット	横位沈線およびクランク文／内面1 条の沈線	後期前葉 (堀之内2式)
第40図55 図版15-1-55	深鉢	(E-4) G	口縁部 5% 未満	厚 0.9	にぶい橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート・ 礫	L R異方向に施文後沈線により区 画／内面口縁部内屈する	後期前葉 (堀之内2式)
第40図56 図版15-1-56	深鉢	(E-4) G	胴部 5% 未満	厚 0.9	にぶい褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子	R L異方向に施文後沈線で区画し 部分的に磨消す	後期前葉 (堀之内2式)
第40図57 図版15-1-57	深鉢	(D-2) G	胴部 5% 未満	厚 0.7	にぶい 赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・雲母	L R斜位施文後細い棒状工具によ り縦横直線の沈線を施す	後期前～中葉
第40図58 図版15-1-58	浅鉢	13 M	口縁部 5% 未満	厚 0.8	にぶい橙	黒色粒子・赤色粒子・ 石英	無文	後期前～中葉
第40図59 図版15-1-59	深鉢	(F-5) G	胴部 5% 未満	厚 0.9	にぶい橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート・ 礫	三叉の沈線	晩期前葉 (安行3d式)
第40図60 図版15-1-60	深鉢	628 Y	胴部 5% 未満	厚 0.8	にぶい橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英・ チャート	三叉の沈線	晩期前葉 (安行3d式)

挿図番号 図版番号	器種	出土位置	遺存度	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	時期 (型式)
第40図61 図版15-1-61	土器 片錘	(F-6) G	—	5.1	3.2	1.7	30.0	キザミを持つ隆線	中期中葉 (勝坂式)
第40図62 図版15-1-62	土製 円盤	56 M	—	3.7	3.5	1.0	14.3	縦位L撚糸文	中期

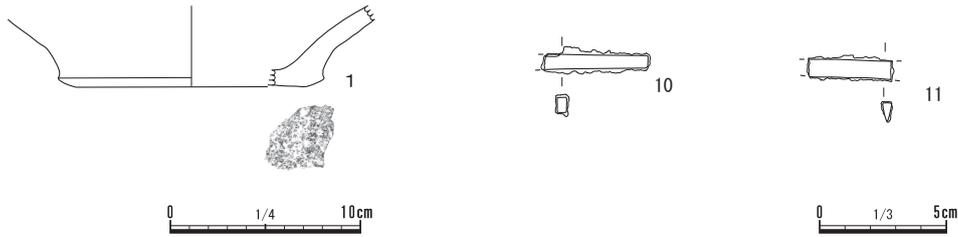
第16表 縄文時代遺構外出土遺物一覧(3)



第41図 弥生時代遺構外出土遺物（1/4・1/3）

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	遺存度	法量 (cm)	色調	胎土	特徴	時期
第41図1 図版16-1-1	壺	26 H	胴部～ 底部 5% 未満	高 [7.0] 底 (9.3)	にぶい褐	黒色粒子・白色粒子・ 石英・シャモット	底部から胴部ゆるやかに内湾しな がら立ち上がる／内面：縦位ケズ リ／外面：胴部縦位ミガキ／底部 から胴部スス付着	弥生時代後期 ～古墳時代前期
第41図2 図版16-1-2	甗	26 H	脚台部 5% 未満	高 [2.6]	明赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英・ 角閃石・チャート	台付甗／脚台部貼付／外面：脚台 部縦位ハケ目	弥生時代後期 ～古墳時代前期
第41図3 図版16-1-3	壺	表土	胴部 5% 未満	厚 0.5	にぶい 赤褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート	胴部内湾する／内面：胴部斜位ナ デ／外面：単節羽状縄文の上下を 白縄S字結節で区画	弥生時代後期 ～古墳時代前期
第41図4 図版16-1-4	甗	B区表土	口縁部 5% 未満	厚 0.4	黒褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・シャモット	口縁部ゆるく外反しながら立ち上 がる／内面：横位ナデ／外面： 口唇部棒状工具によるキザミ、 口縁部斜位ミガキ	弥生時代後期 ～古墳時代前期
第41図5 図版16-1-5	甗	(D-3) G	口縁部 5% 未満	厚 0.7	橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・シャモット	頸部から口縁部にかけて外反しな がら立ち上がる／内面：横位ミガキ/ 外面：横位ナデ	弥生時代後期 ～古墳時代前期
第41図6 図版16-1-6	甗	26 H	口縁部 5% 未満	厚 0.6	橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート・ シャモット	口縁部内湾しながら立ち上がる/ 内外面：口唇部横位ハケ／内面： 縦位ミガキ／外面：斜位ハケ	弥生時代後期 ～古墳時代前期
第41図7 図版16-1-7	甗	(D-2) G	胴部 5% 未満	厚 0.4	黒褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート	頸部ゆるやかに屈曲する／内面： 口縁部横位ハケ、胴部斜位ハケ/ 外面：斜位ハケ	弥生時代後期 ～古墳時代前期
第41図8 図版16-1-8	甗	26 H	脚台部 5% 未満	厚 0.5	にぶい褐	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・チャート・ シャモット	台付甗／脚台部「ハ」の字に開く/ 内面：横位ナデ／外面：斜位櫛目	弥生時代後期 ～古墳時代前期
第41図9 図版16-1-9	甗	(D-3) G	脚台部 5% 未満	厚 0.5	にぶい橙	黒色粒子・白色粒子・ 赤色粒子・石英・ チャート	台付甗／脚台部内湾しながら立ち 上がる／内面：横位ナデ／外面： 縦位ナデ後、口縁部横位ナデ	弥生時代後期 ～古墳時代前期

第17表 弥生時代遺構外出土遺物一覧



第 42 図 奈良・平安時代以降遺構外出土遺物（1 / 4 ・ 1 / 3）

挿図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	遺存度	法量 (cm)	色調	胎土	特徴	産地 (時期)
第 42 図 1 図版 16- 2 - 1	陶器 捏鉢	(E-6) G	胴部～ 底部 5% 未満	高 [4.3] 底 (12.0)	褐灰	黒色粒子・白色粒子・ 石英・礫	外面：胴部下部に緩やかな稜を持つ	常滑 (中世か)
図版 16- 2 - 2	陶器 長頸壺	B区表土	口縁部 5% 未満	厚 0.4	釉：オリブ灰 胎土： 灰白	白色粒子・赤色粒子	灰釉／口縁部外面横位ナデ	瀬戸・美濃系 (中世)
図版 16- 2 - 3	磁器 蓋	630 Y	口縁部 5% 未満	厚 0.4	灰白	緻密	蓋物蓋か	肥前系 (時期不明)
図版 16- 2 - 4	磁器 中碗	(D-2) G	口縁部 5% 未満	厚 0.4	灰白	緻密	外面：染付草花紋	肥前系 (18世紀)
図版 16- 2 - 5	磁器 皿	B区表土	底部 5% 未満	厚 0.6	灰白	緻密	削り出し高台／見込み釉剥ぎ	肥前系 (時期不明)
図版 16- 2 - 6	陶器 中瓶	27 H	胴部 5% 未満	厚 0.5	釉：暗 オリブ 胎土：に ぶい黄	緻密	外面：灰釉	瀬戸・美濃系 (時期不明)
図版 16- 2 - 7	陶器 中瓶	T P 2	胴部 5% 未満	厚 0.5	釉：暗 オリブ 胎土：に ぶい黄	緻密	高田徳利か／外面：灰釉	瀬戸・美濃系 (時期不明)
図版 16- 2 - 8	陶器 碗	631 Y	胴部 5% 未満	厚 0.7	黒	緻密	天目碗／内外面：鉄釉	瀬戸・美濃系 (15世紀中葉 ～17世紀中葉)
図版 16- 2 - 9	陶器 甕	26 H	胴部 5% 未満	厚 0.9	にぶい 赤褐	緻密 砂粒少量	内外面：横位ナデ／内面：輪積痕	常滑系 (時期不明)

挿図番号 図版番号	器種	出土位置	遺存度	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	備考
第 42 図 10 図版 16- 2 - 10	刀子	26 H	茎残存	[4.2]	[0.6]	[0.4]	4.6	刃部方向欠損／断面長方形	奈良・平安時代
第 42 図 11 図版 16- 2 - 11	刀子	26 H	刃部 残存	[3.3]	[0.7]	[0.4]	3.3	刃部で両側欠損	奈良・平安時代

第 18 表 奈良・平安時代以降遺構外出土遺物一覧

第4章 調査のまとめ

第1節 縄文時代

本地点の調査で特筆されるのは、縄文時代後期前葉の堀之内式期の土坑がまとまって検出したことである。中野遺跡第91地点（尾形・徳留・宅間・田中・岩崎 2017）や城山遺跡第79地点（大久保・尾形・徳留 2021）で、比較的まとまった検出例もあるが、志木市内で堀之内式期の遺構が明確に認められているのは、西原大塚遺跡だけである。

西原大塚遺跡の堀之内式期の遺構は、本地点を含め、住居跡2軒と土坑19基である。具体的には、第54地点（尾形・深井 2003）で堀之内1式期と思われる土坑1基（410号土坑）、区画整理33Ⅰ地点（佐々木 2009）で堀之内1式期の住居跡1軒（67号住居跡）、区画整理34Ⅱ地点（佐々木 2009）で堀之内1式期の土坑1基（437号土坑）、第216地点（尾形 2020）で堀之内1式期の住居跡1軒（186号住居跡）・土坑10基（783・786・788・791・793～795・798・801・809号土坑）と、堀之内2式期の土坑5基（787・790・796・807・808号土坑）が確認されており、本地点の堀之内1式期の土坑4基（901～903・906号土坑）がこれに加わったことになる。

また、第207地点でも遺構外出土であるが、まとまった遺物の出土がある（徳留・尾形・青木 2017）。遺跡が立地するのは、いずれも中期の環状集落（徳留 2015）とは重複せず、遺跡の北側である点に特徴があろう。

第2節 弥生時代後期～古墳時代前期

（1）弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡について

本地点における弥生時代後期～古墳時代前期の遺構は、住居跡7軒（628～634 Y）、溝跡1本（56 M）であった。629 Yは56 Mに切られており、住居同士の切り合いとしては634 Yが631 Yに切られており、この2軒は入籠状に検出されている。調査区内で遺構全体が確認できたのは631 Yと634 Yであり、ともに赤色砂利層が検出されている。住居の規模については、631 Yが4.42×4.17m、634 Yが3.48×3.35mであり、長軸、短軸比は631 Yが1.06、634 Yが1.04で631 Yはやや長方形気味ではあるが、ともに隅丸方形を呈している。環濠と考えられる56 Mに切られている630 Y、環濠の内側にあると考えられる628 Yはともに小判型と推測される。

中野遺跡第91地点の報告書内で宅間氏は、住居跡について、下記の通り4分類している（宅間 2017）。

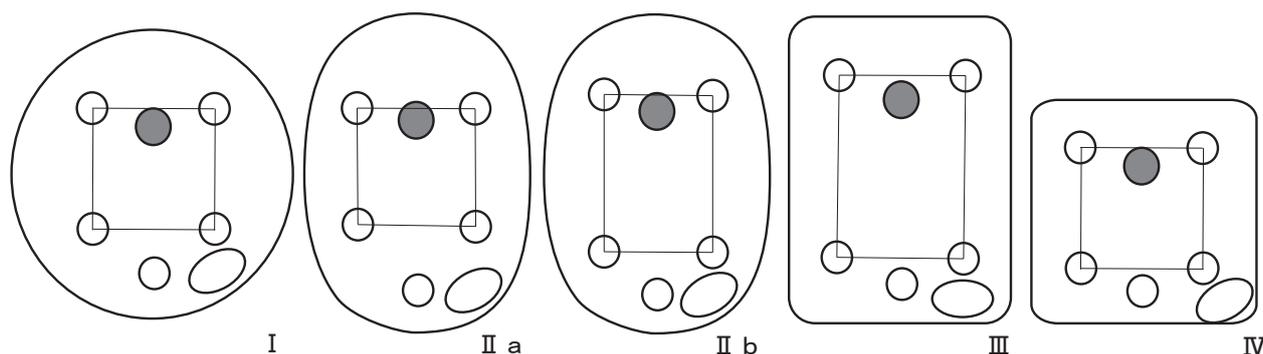
I類 平面形は円形に近く、支柱穴を結ぶ線が方形になるもの。

II a類 平面形は小判形に近く、支柱穴を結ぶ線が方形になるもの。

II b類 平面形は小判形に近く、支柱穴を結ぶ線が長方形になるもの。

III類 平面形は隅丸長方形で、支柱穴を結ぶ線が長方形になるもの。

当遺跡においては、628・630 Yは小判形と推測され、II a類もしくはII b類に該当すると考えられる。



第43図 弥生時代住居模式図パターン（宅間 2017）を改定

632・633 Yは隅丸長方形と推測され、Ⅲ類に該当すると考えられる。遺構全体を検出できた631・634 Yは平面形が隅丸方形であった。631 Yは支柱穴を結ぶ線が方形になり、634 Yは支柱穴を検出できなかった。そのため当遺跡における住居跡の分類として、さらに下記のⅣ類を付け加えると下記のようになり、その模式図は第43図のようになる。

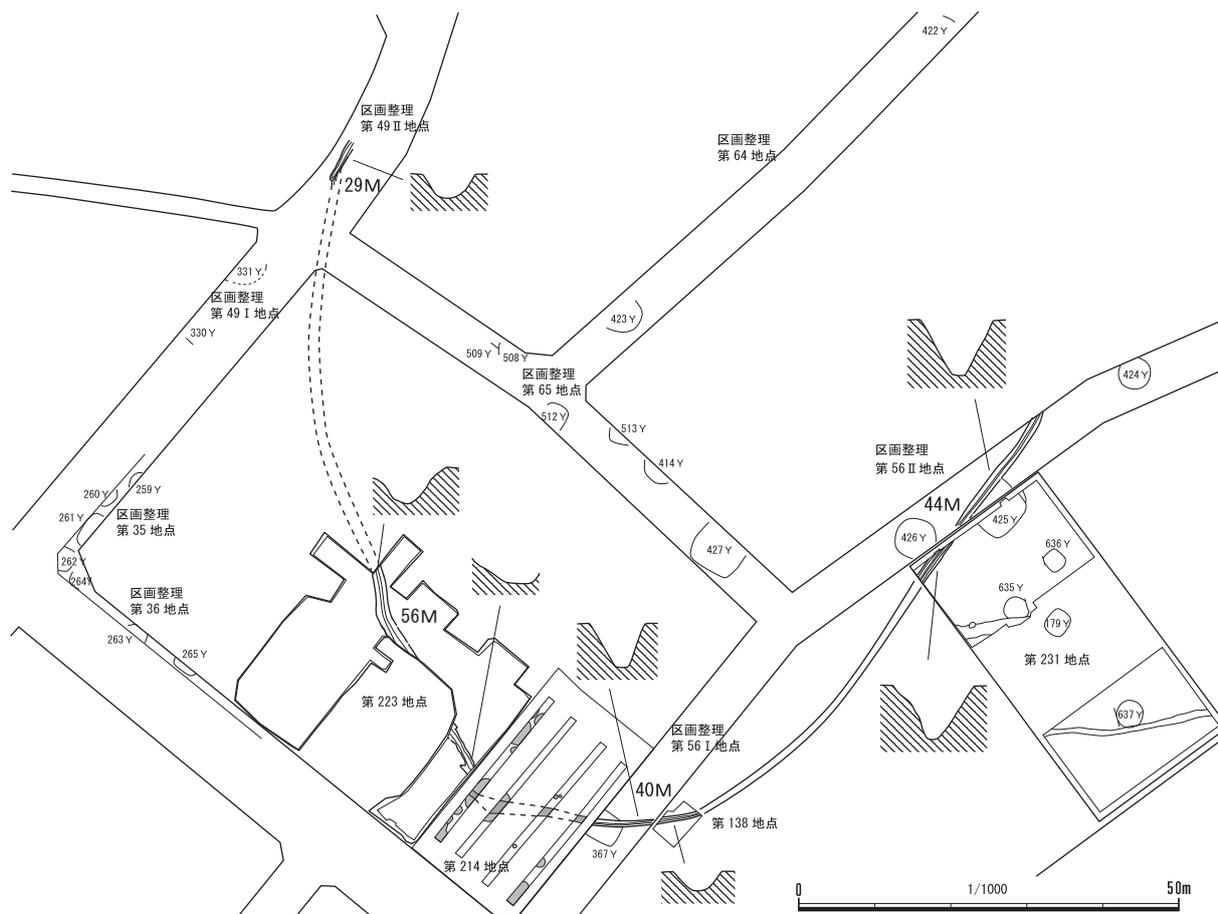
- Ⅰ類 平面形は円形に近く、支柱穴を結ぶ線が方形になるもの。
- Ⅱ a類 平面形は小判形に近く、支柱穴を結ぶ線が方形になるもの。
- Ⅱ b類 平面形は小判形に近く、支柱穴を結ぶ線が長方形になるもの。
- Ⅲ類 平面形は隅丸長方形で、支柱穴を結ぶ線が長方形になるもの。
- Ⅳ類 平面形が隅丸方形になるもの。

また、西原大塚遺跡第228地点報告書内において宅間氏が、弥生時代住居規模について縦横比を用いている（宅間 2021）。今回検出された遺構の長短比は、631 Yが1.06、634 Yが1.04 とかなり1：1に近いものであり、規模も比較的小さいものとなっている。出土遺物や切り合いの関係から詳細な時期決定や時期差を見いだせていないが、住居規模や形状のバリエーションがあることは確かである。今後、このバリエーションが何による差であるのか、住居構成と出土遺物の検討を含めて考えていきたい。

（2）西原大塚遺跡における弥生時代後期～古墳時代前期の環濠について

56 Mは、区画整理第56 I地点と第138地点で調査された40 M、区画整理第56 II地点と第231地点で調査された44 M、区画整理第49 II地点で調査された29 Mと繋がり、弥生時代後期末葉～古墳時代初頭の環濠になる可能性が西原大塚遺跡第231地点報告書の中で指摘されている（大久保・尾形 2021）。

56 Mの断面形は、逆台形型もしくは緩いV字型を呈しており、区画整理第49 II地点で検出された29 Mや、第138地点で検出された40 Mとほぼ同じである。また56 Mの溝底標高は14.4～14.6mで、29・40 Mとほぼ同じである。西原大塚遺跡第231地点報告書の中で「29 Mは、溝跡の方向性、仮40 Mとのつながり、断面形の類似性から、40 Mと同一遺構と想定できる」（大久保・尾形 2021）と指摘されている。今回の調査で56 Mが29・40 Mとの類似性を実証的に示しており、29・40・56 Mに同一性が認められる（第44図）。今後、西側の環濠、北側の環濠に関して、調査が進む事が待たれる。



第44図 56号溝とその周辺の遺構（1 / 1,000）

（3）631Y出土の土製勾玉について

本地点の調査で、631Yから土製勾玉が出土した。関東地方の土製勾玉の集成をした的野氏によると、「土製勾玉は縄文時代後期から平安時代にかけて広く見られる遺物であるが、関東地方において、弥生時代後期は古墳時代後期に次ぐ出土量のピークを迎える」（的野 2005）と記しており、弥生時代後期～古墳時代前期初頭にかけては土製勾玉の出土事例が多く報告されている事がわかる。

2005年時点で、埼玉県内における弥生時代後期の土製勾玉の出土例は、61点（的野 2005）である。また、志木市の西原大塚遺跡においては、本地点を含む5地点で8点の出土例が報告されている。出土遺構は、住居跡が6点、方形周溝墓が2点である（第19表）。

土製勾玉の目的・機能について合田氏は「マジカルな内容をもつ祭祀遺物と理解している。」（合田 1973）としており、的野氏もその意見に同意した上で「竪穴住居内から出土する点から、その行為は屋内で行われたものであろう……」（的野 2005）と考えを述べている。

本地点も含めて西原大塚遺跡における土製勾玉の出土遺構は住居跡がほとんどで、方形周溝墓から出土した2点も住居跡からの流れ込みの可能性が考えられる。

ところで、弥生時代後期～古墳時代前期における住居内の祭祀的・儀礼的要素としては、赤色砂利層が挙げられる。小倉氏は、「弥生時代から古墳時代初頭の住居跡内に見られた小礫と砂質で粘性をもつ褐色土によって作られた施設は祭壇状の遺構であり、集落内の各戸において一般的なものとしてとらえられた。そして農耕祭祀を中心にした祭祀が行われたものと思われた」（小倉 1990）と、赤色砂利層

No.	地点名	遺構名	時期	出土状況	法量 (cm)	備考	参考文献
1	区画 39I・67 II 地点	274Y	古墳前期	床面上	長さ：2.7 幅：1.7 重さ：5.2 g	完形	佐々木・内野・宮川 2009 『西原大塚遺跡Ⅱ 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』 志木市遺跡調査会調査報告第 13 集 埼玉県志木市西原特定土地区画整理組合 志木市遺跡調査会
2	区画 5 II 地点	359Y	古墳前期	覆土中	長さ：5.1 幅：2.8 径：2.7 重さ：23.9 g	完形	
3	第 110 地点	33Y	弥生後期～ 古墳前期前半	覆土中	長さ：3.0 幅：1.6 径：1.1 重さ：4.6 g		佐々木・内野・宮川 2005 『西原大塚遺跡第 110 地点』 志木市遺跡調査会調査報告第 9 集
4	第 45 地点	182Y	弥生末葉	覆土中	長さ：3.2 径：1.1 重さ：5.5 g		佐々木・内野・宮川・上田 2000 『西原大塚遺跡第 45 地点 発掘調査報告書』 志木市遺跡調査会調査報告第 6 集 志木市遺跡調査会 小松フォークリフト株式会社
5		190Y	弥生末葉～ 古墳初頭	覆土中	長さ：2.9 径：1.1	完形	
6		17 方	古墳初頭	南西溝 J 区	長さ：2.2 幅：1.0	住居流れ込み の可能性	
7				北東溝 B 区	長さ：1.6 幅：0.7		
8	第 223 地点	631Y	弥生時代後期末葉 ～古墳時代初頭	床面上	長さ：2.3 幅：1.0 厚さ：1.1 重さ：3.0 g	完形	尾形・徳留・大久保・坂下・遠藤・小森 2021 『西原大塚遺跡第 223 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』 志木市の文化財第 83 集 埼玉県志木市教育委員会

第 19 表 西原大塚遺跡出土の土製勾玉一覧

は祭祀に関わる施設であるとの推測をしている。西原大塚遺跡第 110 地点の 33 Y では、赤色砂利層と考えられる堆積が報告されており、本地点の 631 Y においても赤色砂利層が確認された。現在、8 点中 2 点と赤色砂利層との関連性を示唆するには事例が少ないが、住居跡における祭祀を考えるうえで関連性が見られる可能性も考えられる。今後の調査において出土事例が増えることを期待したい。

第 3 節 奈良・平安時代

(1) 本地点における遺構と遺物について

本地点における奈良・平安時代の遺構は、住居跡 2 軒 (26・27 H)、溝跡 1 本 (13 M) であった。遺物は、26 H で、須恵器の坏形土器、土師器の坏形土器 (落合型)、土師器の甕形土器、刀子が出土している。27 H では、須恵器の坏形土器、土師器の甕形土器が出土している。

以下、今回検出された奈良・平安時代の遺構について、出土遺物より時期を推測した。

26 号住居跡

土師器の甕形土器については、口縁部が「く」字を呈した武蔵型甕で、桜岡氏の編年における、第四段階から第五段階にあたりと考えられる (桜岡 2003)。そのため、8 世紀中から 8 世紀後半と推測される (第 35 図 3・4、図版 12-1-3・4)。また、須恵器の坏形土器は、胎土に白色針状物質を確認できることから、南比企窯産と考えられる。須恵器の坏形土器の法量を推定し、南比企窯跡群の編年 (加藤 2012) に当てはめるところ、口径が 14.0cm で IV 期にあたることから、8 世紀第 4 四半期と推定

される(第35図1、図版12-1-1)。

以上のことから、この住居の年代は8世紀後葉と推定される。

27号住居跡

土師器の甕形土器については、口縁部が「く」字を呈した武蔵型甕で、桜岡氏の編年における、第四段階から第五段階にあたりと考えられる(桜岡 2003)。そのため、8世紀中から8世紀後半の所産であると推測される(第37図3~5、図版12-2-3~5)。また、須恵器の坏形土器は2点(第37図1・2、図版12-2-1・2)出土し、胎土に白色針状物質を確認できることから、南比企窯産と考えられる。南比企窯跡群の編年(加藤 2012)に当てはめたところ、1は内底径が8.9cmでⅢ期にあたり、2は口径13.0cmで同じくⅢ期にあたる。そのため、二点とも8世紀第3四半期の所産のものであると推定される。

以上のことから、出土した須恵器の時期を重視し、この住居の年代は8世紀中葉と推定される。

13号溝跡

13 Mに関しては本遺構に伴った遺物を見出す事が出来なかったが、第67地点と区画整理36・130地点で検出されている13 Mと繋がる溝跡と考えられる事から、平安時代の遺構として報告した。

(2) 西原大塚遺跡における奈良・平安時代の住居跡について

西原大塚遺跡では、奈良・平安時代に位置付けられている住居跡が13軒報告されており、本調査で2軒検出された。その中でも、8世紀の住居跡は8軒である。8世紀前葉の所産であると報告されているのは、第154地点の19H、25Hである。8世紀中葉の所産であると報告されているのは区画整理第67地点の19 H、本調査の27Hである。8世紀後葉の所産であると報告されているのは、8・21・23 H、本調査の26 Hである。8世紀以降、平安時代の所産として報告されているのは7軒である(第20表)。

現在検出されている奈良・平安時代の住居跡の傾向を見てみると、遺跡全体での検出位置としては中央西側に固まる傾向が見られる。また同時代の住居跡が近接せず、当遺跡において奈良・平安時代には単発的に住居跡が見られ、散在的な集落が存在していた事が推測される(第45図)。

(3) 落合型坏について

今回26 Hより、落合型坏と考えられる土師器の坏形土器が出土した。西原大塚遺跡においては、第228地点の24 Hにて出土した例が1点報告されている。

落合型坏は新宿区落合遺跡(早稲田大学考古学研究室 1955)に認められる坏形土器を標識としている。豊島郡および多摩郡にかけての地域を中心に出土して、落合遺跡周辺で生産を行っていたとされており、「その特徴は皿は扁平で坏は……… 比較的浅く底部はわずかに丸みを呈している。皿、坏、鉢等に見られる外部の稜は顕著でなく、わずかに名残をとどめているにすぎない」(玉口 1955)と特徴が挙げられている。また、「体部に粘土紐巻き上げ痕を残す坏」(福田 1978)や「丹塗り平底気味の坏」(山口 1984)などの特徴でも呼称されてきた。

『上落合二丁目遺跡』(徳澤・山田 1995)の報告の中で、落合型坏はA~F群に分類されている。第228地点で出土した坏形土器は胴部にケズリが施され、口縁部外面及び、内面が赤彩されていた。これらの特徴からD群に当たると考えられる。また、本調査にて出土した坏形土器も胴部にケズリが施され、口縁部外面及び内面が赤彩されていることから、D群にあたるものであると考えられる。D群の

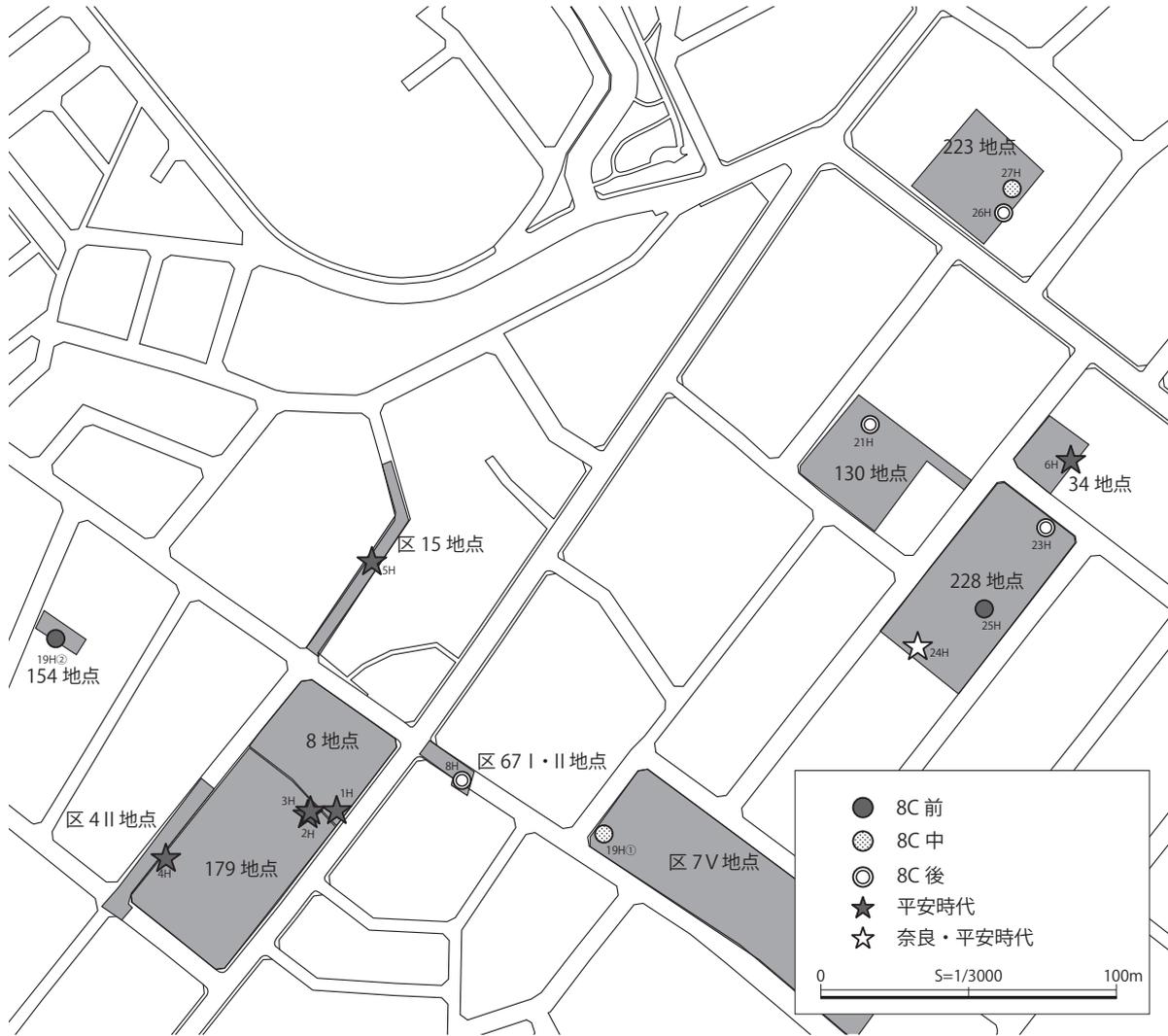
第4章 調査のまとめ

遺構	地点	報告時期	出土遺物	主軸 (m)	主軸直交軸 (m)	参考文献
1H	第8地点	国分式	土師器長胴甕	—	—	尾形・佐々木 1990『志木市遺跡群Ⅱ』 志木の文化財第14集 埼玉県志木市教育委員会
2H	第8地点	国分式	—	—	—	
3H	第8地点	国分式	—	—	—	
4H	区4Ⅱ	平安時代	土師器甕	—	—	佐々木・内野・宮川 2009『西原大塚遺跡Ⅲ 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』 志木市遺跡調査会調査報告第13集 埼玉県志木市西原特定土地区画整理組合 志木市遺跡調査会
5H	区15Ⅱ	平安時代	—	4.60	420	志木市遺跡調査会
6H	第34地点	平安時代	須恵器環	3.80	305	佐々木・尾形 1997『志木市遺跡群Ⅶ』 志木市の文化財第25集 埼玉県志木市教育委員会
8H	区7V	奈良時代 (8C後葉)	須恵器環、土師器台付甕、 土師器甕、刀子	4.50	425	佐々木・内野・宮川 2009『西原大塚遺跡Ⅲ 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』 志木市遺跡調査会調査報告第13集 埼玉県志木市 西原特定土地区画整理組合 志木市遺跡調査会
19H	区67	奈良時代 (8C中葉)	須恵器環、須恵器蓋、 須恵器甕	4.62	4.15	
19H	第154地点	奈良時代 (8C前葉)	須恵器環、土師器甕、 土製品、石器	—	—	尾形・深井・青木 2008 『西原大塚遺跡第138地点西原大塚遺跡第154地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』 志木市遺跡調査会調査報告第14集 志木市遺跡調査会
21H	区130	奈良時代 (8C後葉)	須恵器環	4.55	4.20	佐々木・内野・宮川 2009『西原大塚遺跡Ⅲ 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』 志木市遺跡調査会調査報告第13集 埼玉県志木市西原特定土地区画整理組合 志木市遺跡調査会
23H	第228地点	奈良時代 (8C後半)	須恵器環、須恵器甕	3.72	3.56	尾形・徳留・大久保・宅間・小森 2021 『西原大塚遺跡第228地点 埋蔵文化財発掘報告書』 志木市の文化財第79集 埼玉県志木市教育委員会
24H	第228地点	奈良・平安時代	土師器環(落合)	3.50	3.08	
25H	第228地点	奈良時代 (8C前葉)	土師器甕	4.18	3.30	
26H	第223地点	奈良時代 (8C後葉)	土師器環(落合)、須恵器環、 土師器甕	38.4	3.78	本報告 尾形・徳留・大久保・坂下・遠藤・小森 『西原大塚遺跡第223地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』 志木市の文化財第83集 埼玉県志木市教育委員会
27H	第223地点	奈良時代 (8C中葉)	須恵器環、土師器甕	3.12	3.93	

第20表 西原大塚遺跡における奈良・平安時代住居跡一覧

特徴は、「口縁部下半部の成形がヘラケズリによっておこなわれている。口縁部の巻き上げ痕まで、ヘラケズリがおよぶものも認められる。ほとんどのものは、内表面および口縁部外表面上半部に赤色塗彩がおこなわれている」(徳澤・山田 1995)とされる。

今回26Hで出土した環形土器は、南比企窯産の須恵器の環形土器と共伴しており、8世紀後葉の所産と考えられる。西原大塚遺跡における他の8世紀の住居跡をみると、供膳具は須恵器の環形土器が主体で、土師器の環形土器の出土事例が報告されているのは24Hの落合型環のみとなっている。また、志木市内の他の遺跡からは出土報告は出ておらず、西原大塚遺跡における落合型環の出土事例は数少ない貴重な事例の一つだと考えることができる。



第 45 図 西原大塚遺跡における奈良・平安時代の住居遺構配置図（1 / 3,000）

[引用・参考文献]

大久保聡・尾形則敏 2021『西原大塚遺跡第 231 地点 埋蔵文化財発掘報告書』志木市の文化財第 80 集 埼玉県志木市教育委員会
 大久保聡・尾形則敏・徳留彰紀 2021『志木市遺跡群 24』志木市の文化財第 68 集 埼玉県志木市教育委員会
 尾形則敏・佐々木保俊 1990『志木市遺跡群Ⅱ』志木の文化財第 14 集 埼玉県志木市教育委員会
 尾形則敏 2020『西原大塚遺跡第 216 地点』志木の文化財第 76 集 埼玉県志木市教育委員会
 尾形則敏・徳留彰紀・大久保聡・宅間清公・小森暁生 2021『西原大塚遺跡第 228 地点 埋蔵文化財発掘報告書』志木市の文化財第 79 集 埼玉県志木市教育委員会
 尾形則敏・徳留彰紀・宅間清公・田中浩江・岩崎岳彦 2017『中野遺跡第 91 地点 埋蔵文化財発掘報告書』志木市の文化財第 67 集埼玉県志木市教育委員会
 尾形則敏・深井恵子 2003『志木市遺跡群 13 田子山遺跡第 78 地点 西原大塚遺跡第 54 地点』志木市の文化財第 35 集 埼玉県志木市教育委員会
 尾形則敏・深井恵子・青木 修 2008『西原大塚遺跡第 138 地点 西原大塚遺跡第 154 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告 第 14 集 志木市遺跡調査会
 小倉 均 1990『弥生時代から古墳時代にかけてみられる祭壇状遺構について』『埼玉考古』第 27 号 埼玉考古学会
 加藤恭朗 2012『南比企窯産の編年－Y－6 期からH－IV 期まで－』『古代人間の土器と遺跡（1）』古代人間を考える会
 合田芳正 1973『関東地方弥生時代の土製勾玉について』『史友』第 6 号

第4章 調査のまとめ

- 小金井靖 1985『貫井二丁目遺跡』東京都住宅局 貫井二丁目遺跡調査団
- 斎藤 忠 1998『考古学用語辞典』学生社
- 桜岡正信 2003「武蔵型甕について」『高崎市史研究』
- 佐々木保俊・内野美津江・宮川佳幸 2005『西原大塚遺跡第110地点』志木市遺跡調査会調査報告第9集 志木市遺跡調査会
- 佐々木保俊・内野美津江・宮川佳幸 2009『西原大塚遺跡Ⅰ～Ⅲ 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第13集 埼玉県志木市西原特定土地区画整理組合 志木市遺跡調査会
- 佐々木保俊・内野美津江・宮川佳幸・上田 寛 2000『西原大塚遺跡第45地点 発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第6集 志木市遺跡調査会 小松フォークリフト株式会社
- 佐々木保俊・尾形則敏・深井恵子 1996『志木市遺跡群Ⅶ』志木市の文化財第23集 志木市教育委員会
- 佐々木保俊・尾形則敏 1997『志木市遺跡群Ⅷ』志木市の文化財第25集 埼玉県志木市教育委員会
- 瀧音 大 2019『原始・古代日本における勾玉の研究』雄山閣
- 宅間清公 2017「第4章(2) 弥生時代の遺構と遺物について」『中野遺跡第91地点 埋蔵文化財発掘報告書』志木市の文化財第67集 埼玉県志木市教育委員会：143－145
- 2021「第4章第2節(3) 住居構造について」『西原大塚遺跡第228地点 埋蔵文化財発掘報告書』志木市の文化財第79集 埼玉県志木市教育委員会：166－168
- 鶴間正昭 2019『律令国家形成期の土器様相』六一書房
- 徳澤啓一・山田美和 1995『上落合二丁目遺跡』青木電器工業株式会社・新宿区上落合二丁目遺跡調査団
- 徳留彰紀 2015「埼玉県志木市西原大塚遺跡における縄文中期集落研究の基礎的資料」『あらかわ』16 あらかわ考古談話会：1－16
- 徳留彰紀・尾形則敏・青木 修 2017『市場裏遺跡第23地点 城山遺跡第87地点 西原大塚遺跡第207地点 中野遺跡第95地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第68集 埼玉県志木市教育委員会
- 中島広顕 1988『御殿前遺跡2』北区埋蔵文化財調査報告5 東京都北区教育委員会
- 福田健司 1978「南武蔵における奈良時代の土器編年とその背景」『考古学雑誌』第64巻第3号 日本考古学会
- 的野善行 2005「関東地方出土の土製勾玉について」『埼玉考古』第40号 埼玉考古学会
- 山内淳司 2012『御殿前遺跡』大成エンジニアリング株式会社 国立印刷局
- 山口辰一 1984『武蔵国府関連遺跡調査報告』Ⅴ 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会
- 山村貴輝 1990『板橋区四葉地区遺跡調査報告3：四葉地区遺跡平成元年度』板橋区四葉地区遺跡発掘調査会
- 早稲田大学考古学研究室 1955『落合 - 新宿区落合遺跡調査報告書』新宿区役所

[付 編]

自然科学分析

黒曜石の産地推定結果報告書

株式会社東京航業研究所 地球化学分析室

1. はじめに

埼玉県志木市西原大塚遺跡第 223 地点出土の黒曜石遺物 6 点について、蛍光 X 線による非破壊分析で、産地推定を行った。

2. 原理

黒曜石は、主として旧石器時代から縄文時代にかけて、石器の材料として大量に使用されている。しかし、その産出地点は限られているため、先史時代人は、直接採取に行くか、あるいは交易など様々な手段を駆使して黒曜石を入手し、その需要を満たしていたと考えられる。

この黒曜石は、産地毎に元素組成が異なるため、黒曜石製の石器の元素組成を測定することによって、その産地を推定することが可能である。産地が推定できれば、石器材料である黒曜石原石か、あるいは製作された石器が先史時代人によって運搬されたことについて、出発地点である産地と、最終到達地点である遺跡の位置が明らかとなり、具体的な人や物の動きを議論することが可能となる。

なお、測定に使用した蛍光 X 線分析法は、測定対象の表面に X 線を照射し、表面に含まれている元素と照射した X 線の相互作用によって、元素特有の蛍光 X 線が含有量に応じて発生することに着目し、この蛍光 X 線のエネルギー量 (波長) から元素の種類を、検出量から元素の含有量を求める方法である。

蛍光 X 線分析法については、以下の点に注意が必要である。

- ① 相対分析法であるので、元素濃度を決定するためには、被検試料に対して組成と形状が類似した濃度既知の標準物質を予め測定し、これとの対比で元素組成を求める必要がある。黒曜石については、元素組成と形状が類似した標準物質が市販されていないため、一般的には組成は類似しているが形状が異なる標準物質を使用して元素組成を求めることとなる。
- ② 蛍光 X 線分析法で正確な濃度を求めるためには、幾つかの前提条件を満たす必要があり、その一つに、測定物質の表面形状が平滑な平面であることがあげられる。産地の基準試料は研磨によって平滑面を作り出して測定しているが、遺物については加工することができないため、遺物の測定面は一般的には平滑ではあるが平面ではない。従って、厳密な意味で正確な濃度を求めることは難しい。
- ③ 遺物の表面には、風化によって変質した部分や土壌によって汚染された部分が存在している。これは、新鮮な剥離面が光沢を帯びていることに対して、遺物表面の光沢が弱いことから明らかである。一般に水和層と呼ばれる黒曜石表面の風化層は、元素組成についても厳密な意味では本来の値とは異なっていることが予想される。
- ④ 元素ごとに検出限界は異なっており、検出限界以下の含有量では、たとえその元素が含まれて

いても非検出 (ND) となり、同様に検出限界付近では、その値が大きくぶれて、誤差が大きくなる。

- ⑤ 含有量が少ない元素については、十分な蛍光X線を得る為に一定の照射面積が必要である。しかし微細な剥片ではこの条件を満たすことができない。そのため、小破片の含有量が少ない元素については、検出できない場合や値が不正確になる場合がある。
- ⑥ 同様に、試料の厚さが十分に厚くない場合、照射したX線の一部が透過し、値が不正確になる場合がある。
- ⑦ 蛍光X線の検出強度は、測定値からバックグラウンドの値を差し引いて求められるが、バックグラウンドの設定は、元素ごとに一定の方式で行っており、個別の試料ごとに変更をしていない。したがって、測定限界付近の濃度の場合、検出強度が計算上、負の値として算出される場合がある。

このように、蛍光X線分析法で遺物を測定する場合には、幾つかの問題が存在しており、厳密な元素組成を求めることは難しいが、黒曜石の場合には、産地間の元素組成の差が著しいために、一定の誤差を前提とした上で、実用的な産地推定法が成立している。

なお、現在最も多く用いられている方法は、望月明彦氏によって提案された、Rb分率とSr分率を用いる判別図によるものであり、ここでもこの方法によっている。

望月による方法の特徴は、標準試料をもとにして算出された元素濃度を用いるのではなく、各元素固有の検出強度を用いている点にある。この検出強度は、バックグラウンドは差し引かれているものの、重なり補正が行われていないため、元素濃度に必ずしも比例せず、各分析装置固有の値であるという問題点がある。しかし、産地推定に有効であることが多くの研究者の経験によって裏付けられている。ここでは、この判別図を望月ダイアグラムと称した。

3. 操作

- ① エネルギー分散型蛍光X線分析装置を使用して、被検試料である黒曜石の蛍光X線の強度を測定した。
- ② 地球化学分析室には、予め、原産地から採取した黒曜石基準試料が準備されており、その測定値が登録されている。
- ③ 黒曜石製の遺物試料を測定した値について、原産地の試料から想定した判別群と照合し、帰属する判別群を推定した。
- ④ 判別群の呼称は、原則として東京航業研究所 地球化学分析室編「日本の黒曜石」の記載に準拠した。
- ⑤ 判別群の推定に際しては、現在、最も普及している望月の方法を利用した。具体的には、Rb分率として、横軸に $(Rb \times 100) / (Rb + Sr + Y + Zr)$ 、縦軸に $(Mn \times 100) / Fe$ を取った判別図を作成した。またSr分率として、横軸に $(Sr \times 100) / (Rb + Sr + Y + Zr)$ 、縦軸に $\log_{10}(Fe / K)$ を取った判別図を作成した。なお、数値の単位は絶対濃度ではなく、蛍光X線の検出強度 (バックグラウンドを除去した積分強度) である点に注意されたい。
- ⑥ 2枚の判別図には、予め原産地から採取した黒曜石から求めた値によって各判別群のエリアを想定しており、遺物の測定値がどのエリアにプロットされるかによって、判別群を判断した。

- ⑦ なお試料では、大きさ、厚さ、風化、あるいは汚染の問題があるために、原石から想定したエリアを大きく外れる場合がある。そのため、標準試料から求めた元素濃度でも、判別群への帰属を検討した。

4. 測定条件

- ① 測定には、リガク製エネルギー分散型蛍光X線分析装置NEX-D Eを使用した。
- ② 測定元素は、主成分元素はNa、Mg、Al、Si、P、K、Ca、Ti、Mn、Feの10種類、微量成分元素はRb、Sr、Y、Zr、Nb、Baの6種類である。
- ③ 検出強度は、分析装置が算出した値を用いた。
- ④ 元素濃度は、主成分は酸化物濃度で、微量成分は元素濃度でそれぞれ求めた。
- ⑤ 測定時間は、各グループ250秒とした。
- ⑥ X線管球は60k V、12 W、Agターゲットのものを使用した。
- ⑦ X線の照射径は10mmとし、ターレットを使用せず、1個体ずつ測定窓の上に設置して測定した。
- ⑧ 測定時の雰囲気は、ヘリウム雰囲気とした。
- ⑨ X線が下面から照射されるエンドウインドウタイプなので、測定窓に4 μ m厚の専用プロレンフィルムを貼った。
- ⑩ その他の条件については、第21表に示した。

元素名	算出形態	測定条件	分析線	1次フィルタ	管電圧/k V	管電流/ μ A	測定時間/sec
Na	Na ₂ O	Low-Z	K α	Open	6.5	適宜設定	250
Mg	MgO	Low-Z	K α	Open	6.5	適宜設定	250
Al	Al ₂ O ₃	Low-Z	K α	Open	6.5	適宜設定	250
Si	SiO ₂	Low-Z	K α	Open	6.5	適宜設定	250
P	P ₂ O ₅	Low-Z	K α	Open	6.5	適宜設定	250
K	K ₂ O	Mid-Z	K α	C	35.0	適宜設定	250
Ca	CaO	Mid-Z	K α	C	35.0	適宜設定	250
Ti	TiO ₂	Mid-Z	K α	C	35.0	適宜設定	250
Mn	MnO	Mid-Z	K α	C	35.0	適宜設定	250
Fe	Fe ₂ O ₃	Mid-Z	K α	C	35.0	適宜設定	250
Rb	Rb	Mid-Z	K α	C	35.0	適宜設定	250
Sr	Sr	Mid-Z	K α	C	35.0	適宜設定	250
Y	Y	Mid-Z	K α	C	35.0	適宜設定	250
Zr	Zr	Mid-Z	K α	C	35.0	適宜設定	250
Nb	Nb	Mid-Z	K α	C	35.0	適宜設定	250
Ba	Ba	High-Z_F	K α	F	60.0	適宜設定	250

第21表 分析の各種条件

5. 結果

- ① 6点の遺物から得られたX線強度を第22表に示した。また、X線強度から算出した元素濃度を第23表に示した。
- ② 測定結果を第46～49図の望月ダイアグラムに示した。第46図はRb分率図、第47図はSr分率図であり、第48図はRb分率拡大図、第49図はSr分率拡大図である。各図中の黒丸は、分析した黒曜石遺物6点の値をプロットしたものである。

- ③ 望月ダイアグラム上のプロットを産地毎の黒曜石基準試料の分布と比較して推定した産地を第24表に示した。
- ④ 測定した遺物6点のうち、No.5、6の2点は、恩馳島判別群と判定された。
- ⑤ No.4、7、8の3点は、Sr分率図では星ヶ塔判別群の範囲内であり、Rb分率図では僅かに星ヶ塔判別群の値をはずれたが、測定誤差の範囲内と判断し、星ヶ塔判別群と判定した。Rb分率図におけるずれは、測定面が平滑ではないことによると考えられる。
- ⑥ No.1はRb分率図では恩馳島判別群の範囲内であり、Sr分率図ではずれがあるものの、恩馳島判別群に属する可能性が高いと考えられる。No.1からは相対的にKが多く検出されたため、被熱の影響も考えられたが、Rb分率図のずれがないこと、測定面に明らかな被熱痕跡は見られないことから、被熱の影響と断定するまでには至らなかった。Kが多く検出された理由は不明である。
- ⑦ 遺物が各判別群の定義範囲に該当すれば産地として推定可能であるが、多くの判別群では、未だ十分に分布範囲が確定されているとはいえない。複数地点からの試料によって範囲を確定させるとともに、風化や被熱の影響によるずれについても、データを蓄積する必要がある。

番号	Na-K α	Mg-K α	Al-K α	Si-K α	P-K α	K-K α	Ca-K α	Ti-K α	Mn-K α	Fe-K α	Rb-K α	Sr-K α	Y-K α	Zr-K α	Nb-K α	Ba-K α
1	0.242	0.271	23.3	331	0.022	1.083	0.397	0.118	0.313	5.62	1.65	2.19	1.09	2.99	0.273	3.90
4	0.478	0.322	40.6	430	0.157	1.174	0.337	0.120	0.363	5.48	3.86	1.31	1.64	3.23	0.395	1.67
5	0.621	0.270	34.4	454	0.056	0.835	0.424	0.141	0.360	6.49	1.77	2.33	1.13	3.16	0.292	2.40
6	0.494	0.324	31.5	411	0.093	0.783	0.395	0.134	0.342	6.25	1.72	2.21	1.10	3.21	0.249	2.07
7	0.285	0.252	22.8	322	0.020	0.927	0.247	0.071	0.260	3.52	2.77	0.92	1.14	2.27	0.275	1.01
8	0.451	0.224	28.9	390	0.022	1.011	0.281	0.078	0.289	4.02	3.04	1.01	1.25	2.45	0.274	0.99

※ 単位は cps/ μ A

第22表 試料のX線強度

番号	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	P2O5	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3	Rb	Sr	Y	Zr	Nb	Ba
1	1.9	0.17	10.8	79.8	0.015	5.2	0.89	0.12	0.081	0.94	0.0076	0.0094	0.0031	0.0088	0.00077	0.066
4	3.2	0.22	15.3	75.0	0.095	4.6	0.58	0.11	0.076	0.75	0.0146	0.0047	0.0030	0.0079	0.00095	0.023
5	4.1	0.14	13.0	77.4	0.033	3.3	0.83	0.13	0.076	0.89	0.0067	0.0083	0.0025	0.0075	0.00074	0.033
6	3.5	0.24	12.8	78.2	0.060	3.3	0.82	0.13	0.077	0.91	0.0069	0.0084	0.0027	0.0082	0.00056	0.030
7	2.4	0.14	10.8	80.8	0.014	4.6	0.52	0.08	0.069	0.60	0.0131	0.0041	0.0025	0.0070	0.00079	0.017
8	3.3	0.07	12.1	78.8	0.014	4.4	0.53	0.08	0.068	0.61	0.0127	0.0040	0.0025	0.0067	0.00070	0.015

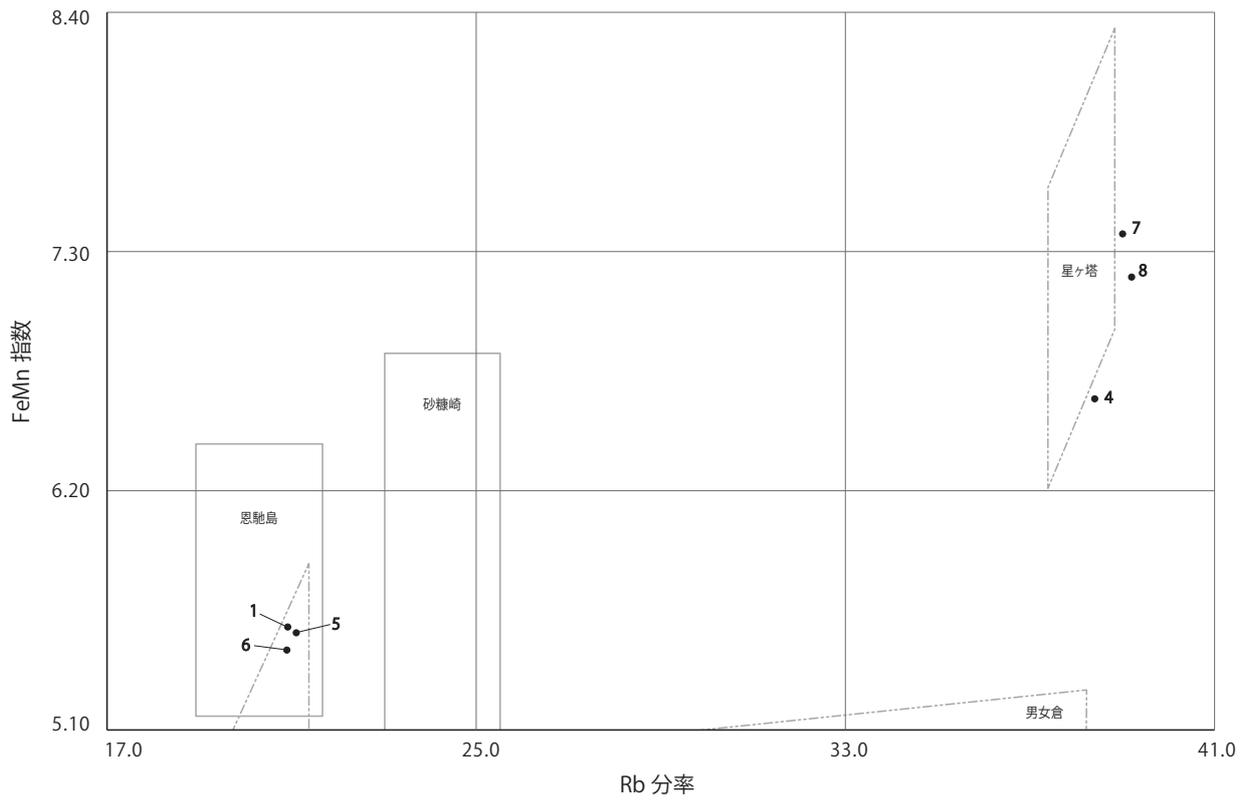
※ 単位は mass%

第23表 試料の元素濃度

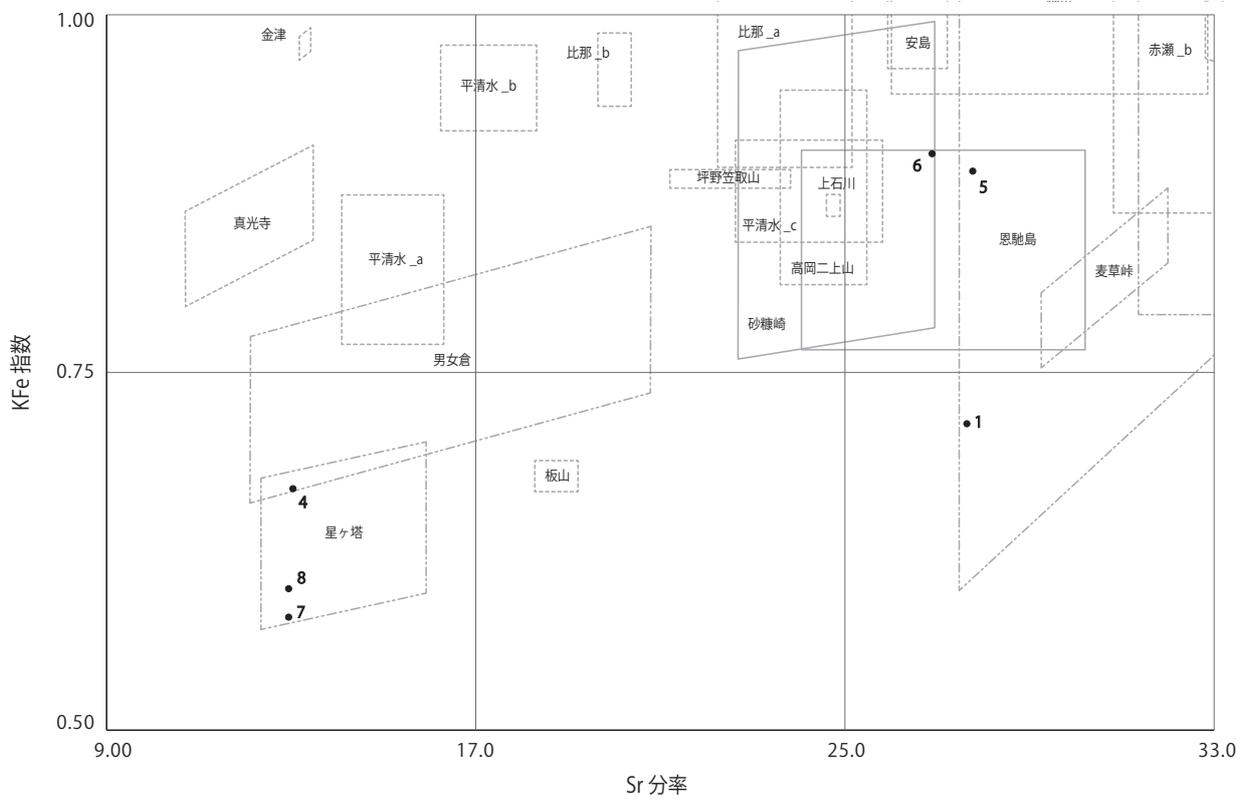
番号	遺構名	注記	器種	長さ/mm	幅/mm	厚み/mm	黒曜石 質量/g	推定された判別群	挿図番号	図版番号
1	覆土中	Ni223	剥片	2.3	1.9	1.3	4.57	(恩馳島)	第39図-1	図版13-1-1
4	覆土中	Ni223	剥片	17.9	18.3	4.5	1.07	(星ヶ塔)		図版16-3-1
5	13M	Ni223 13M 4区	剥片	10.4	18.1	3.4	0.52	恩馳島		図版16-3-2
6	628Y	Ni223 628Y 南	剥片	12.9	14.9	4.0	0.50	恩馳島		図版16-3-3
7	631Y	Ni223 631Y d区	剥片	17.9	9.3	4.9	0.46	(星ヶ塔)		図版16-3-4
8	(E-4)G	Ni223 E4	剥片	21.8	10.0	3.5	0.45	(星ヶ塔)		図版16-3-5

注：括弧なしは判定プログラムの結果、括弧つきは分析者が推定した判別群。

第24表 推定された判別群



第 48 図 望月ダイアグラム (Rb 分率拡大図)



第 49 図 望月ダイアグラム (Sr 分率拡大図)

圖 版



1. 調査区全景



2. A区完掘状況



3. B区完掘状況



1. 21号炉穴（西から）



2. 901号土坑（南から）



3. 901号土坑遺物出土状態（南から）



4. 902号土坑（南から）



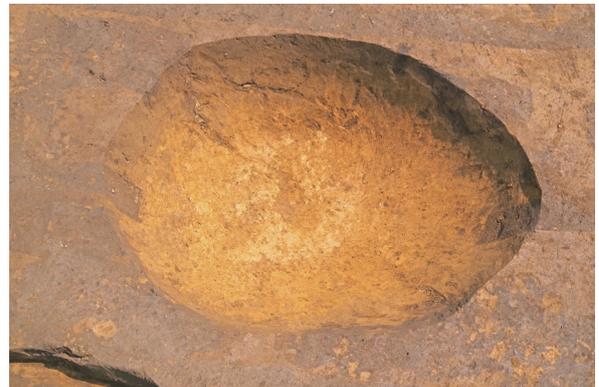
5. 903号土坑（南から）



6. 903号土坑遺物出土状態（南から）



7. 903号土坑遺物出土状態（北西から）



8. 904号土坑（南から）



1. 905号土坑（南から）



2. 906号土坑（東から）



3. 906号土坑遺物出土状態（東から）



4. 628号住居跡（西から）



5. 628号住居跡炉（西から）



6. 628号住居跡炉遺物出土状態（西から）



7. 629号住居跡（東から）



8. 630号住居跡（西から）



1. 630号住居跡（北から）



2. 630号住居跡炉（西から）



3. 631号住居跡（南から）



4. 631号住居跡遺物出土状態（南から）



5. 631号住居跡遺物出土状態（北から）



6. 631号住居跡赤色砂利層（南から）



7. 631号住居跡遺物出土状態（南から）



8. 631号住居跡炉（南から）



1. 632号住居跡（東から）



2. 632号住居跡貯蔵穴（南から）



3. 633号住居跡（北から）



4. 633号住居跡炉（西から）



5. 634号住居跡（東から）



6. 634号住居跡炉（東から）



7. 634号住居跡貯蔵穴（西から）



8. 634号住居跡P2（南から）



1. 56号溝跡（南から）



2. 56号溝跡（南から）



3. 56号溝跡（東から）



4. 56号溝跡遺物出土状態（北から）



5. 56号溝跡遺物出土状態（北から）



1. 26号住居跡（南から）



2. 26号住居跡遺物出土状態（西から）



3. 26号住居跡カマド（南から）



4. 27号住居跡（南から）



5. 27号住居跡遺物・炭化物出土状態（南から）



6. 27号住居跡炭化物出土状態（南から）



7. 27号住居跡遺物出土状態（南から）



8. 27号住居跡遺物出土状態（南から）



1. 27号住居跡カマド（南から）



2. 27号住居跡カマド遺物出土状態（南から）



3. 13号溝跡（東から）



4. 13号溝跡（南から）



1. 901号土坑出土遺物



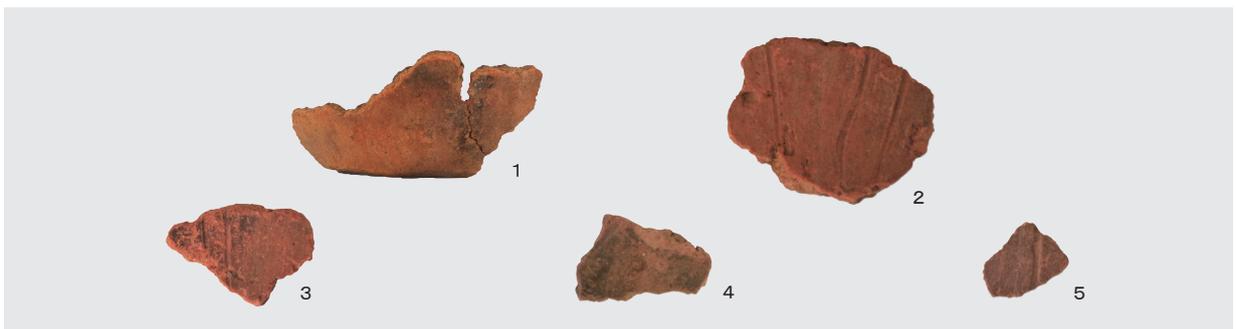
1. 902 号土坑出土遺物



2. 903 号土坑出土遺物



3. 904 号土坑出土遺物



4. 906 号土坑出土遺物



5. 628 号住居跡出土遺物



1. 631 号住居跡出土遺物



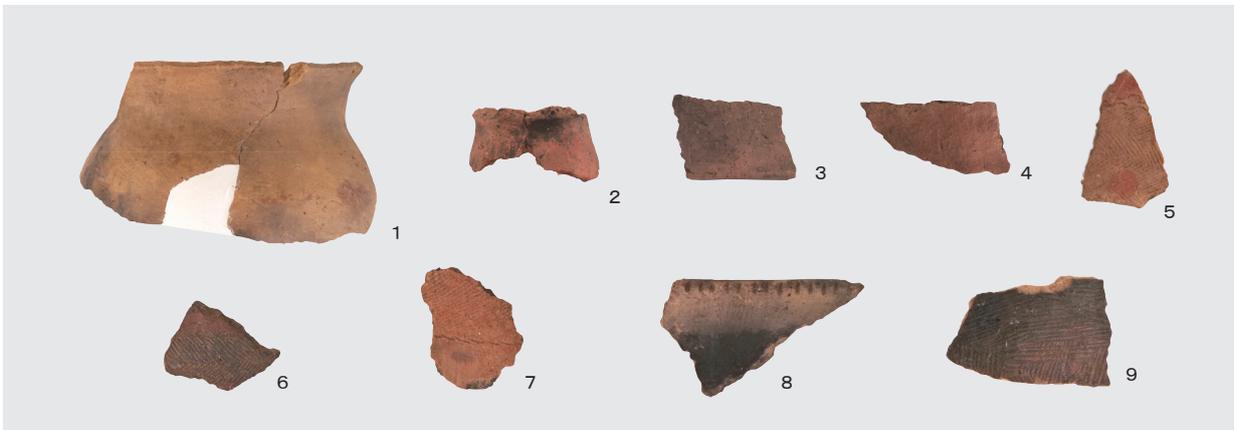
2. 632 号住居跡出土遺物



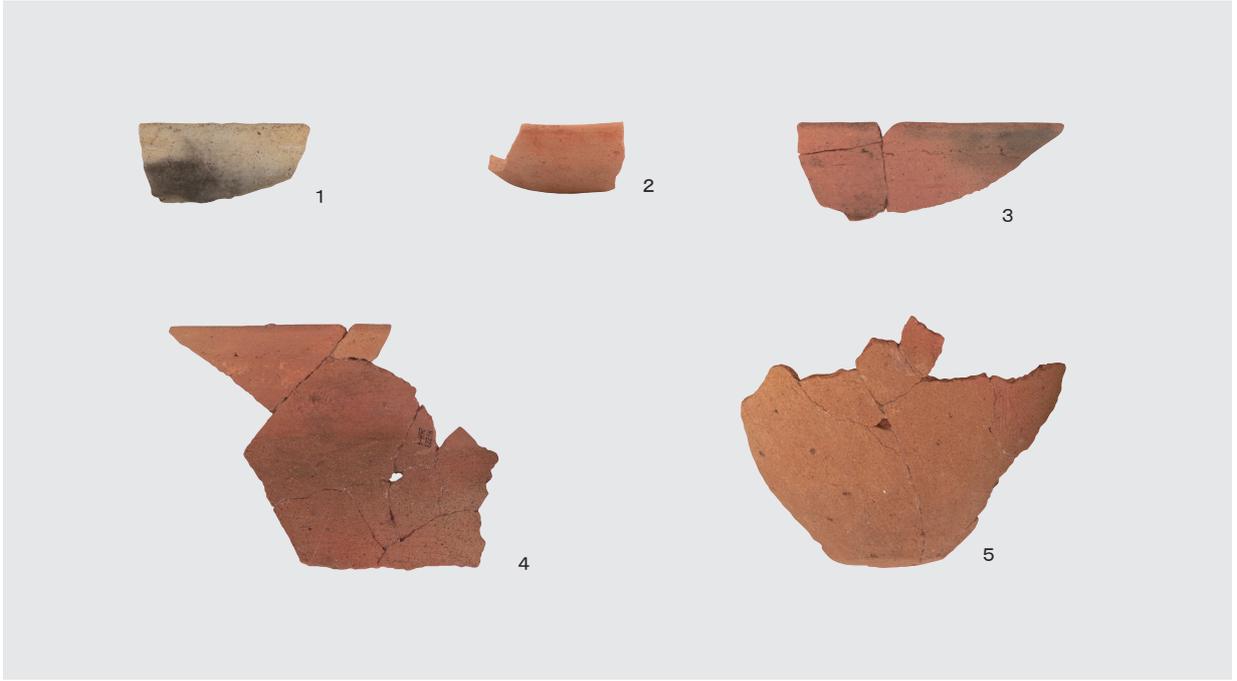
3. 633 号住居跡出土遺物



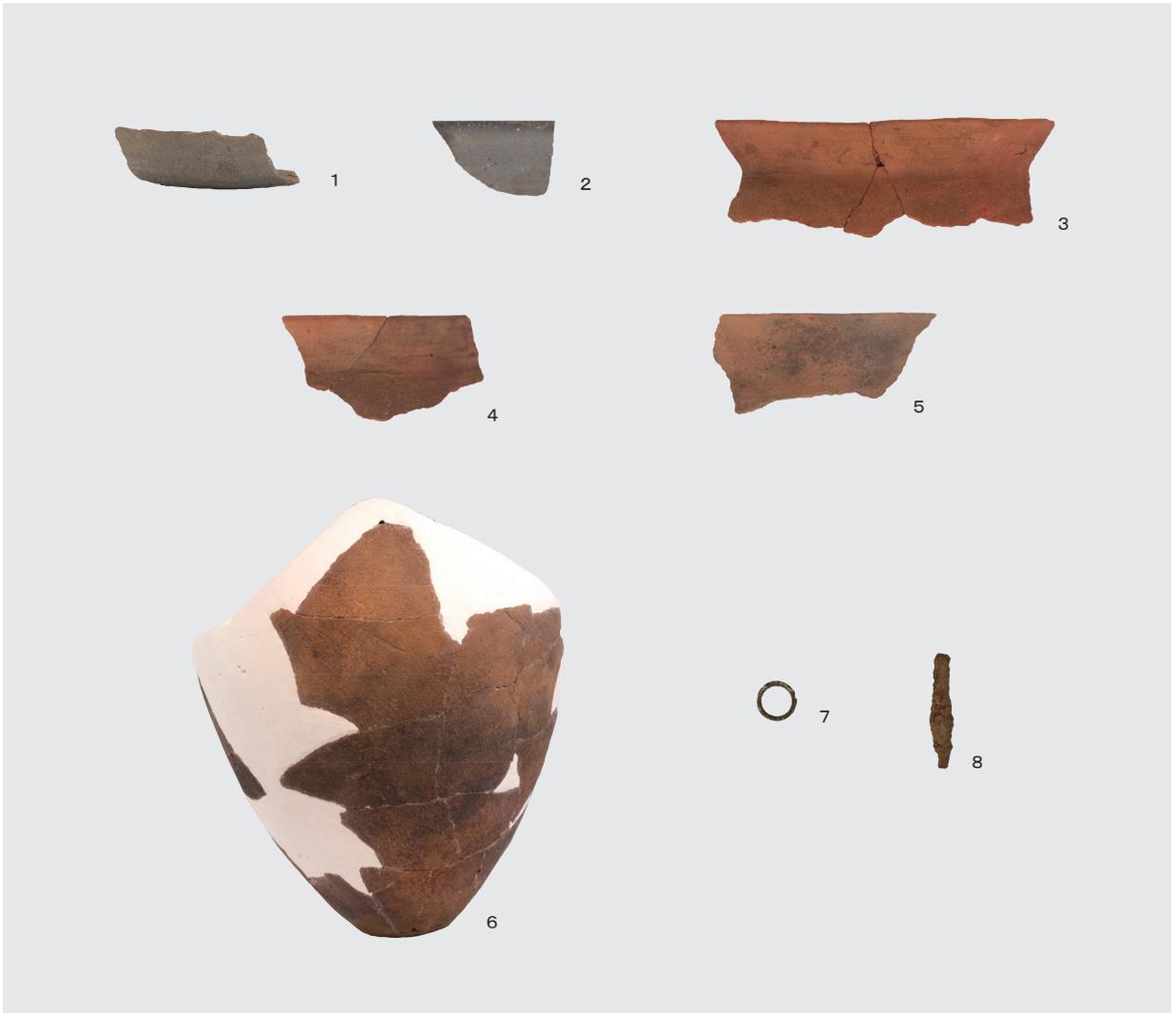
4. 634 号住居跡出土遺物



5. 56 号溝跡出土遺物



1. 26号住居跡出土遺物



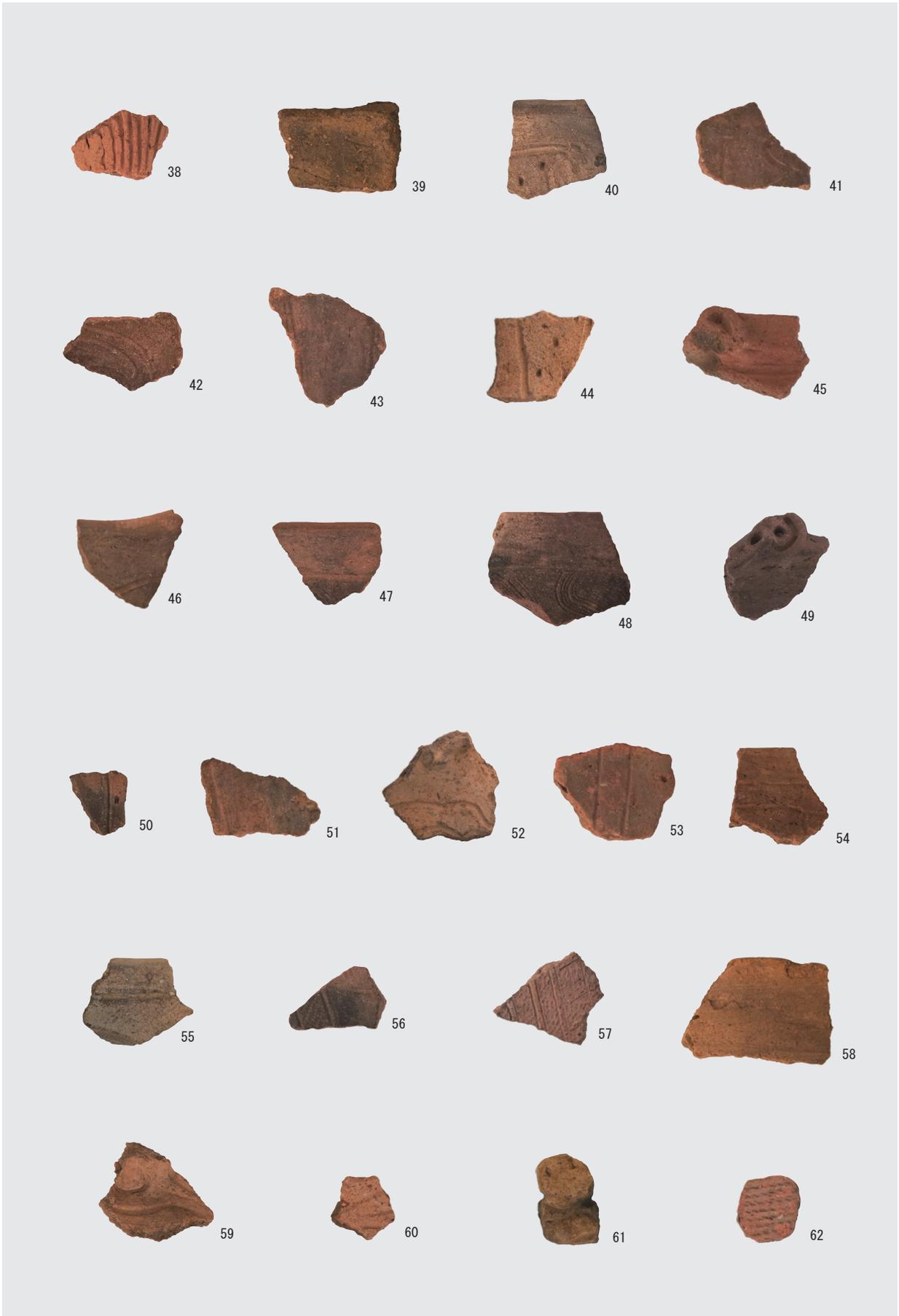
2. 27号住居跡出土遺物



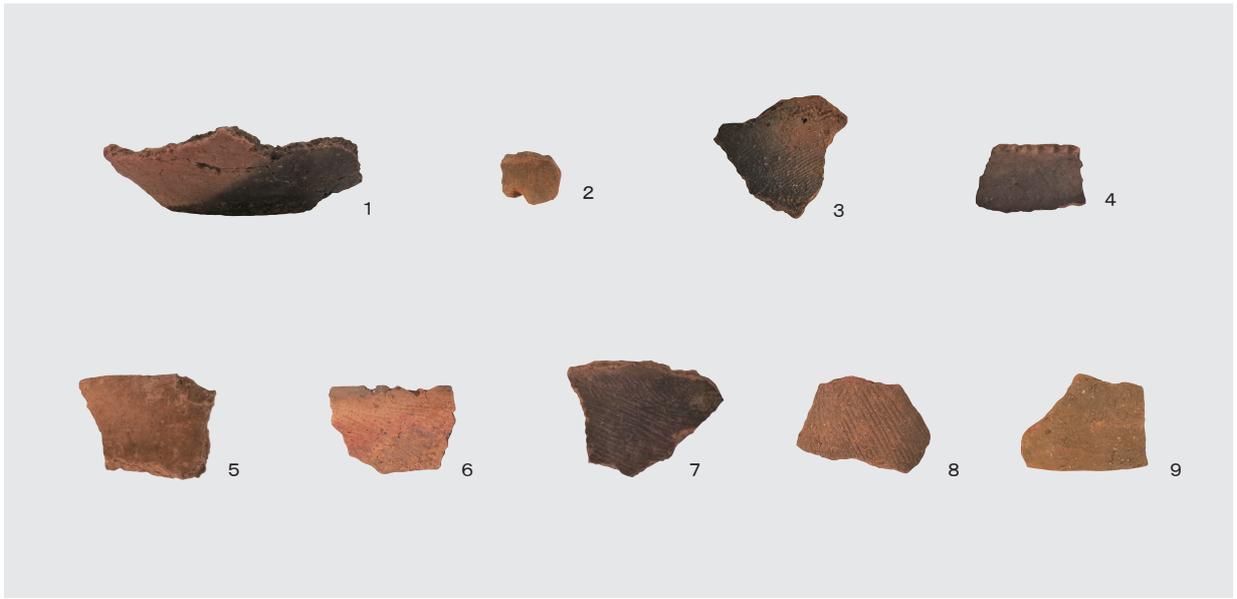
1. 繩文時代遺構外出土遺物 (1)



1. 縄文時代遺構外出土遺物 (2)



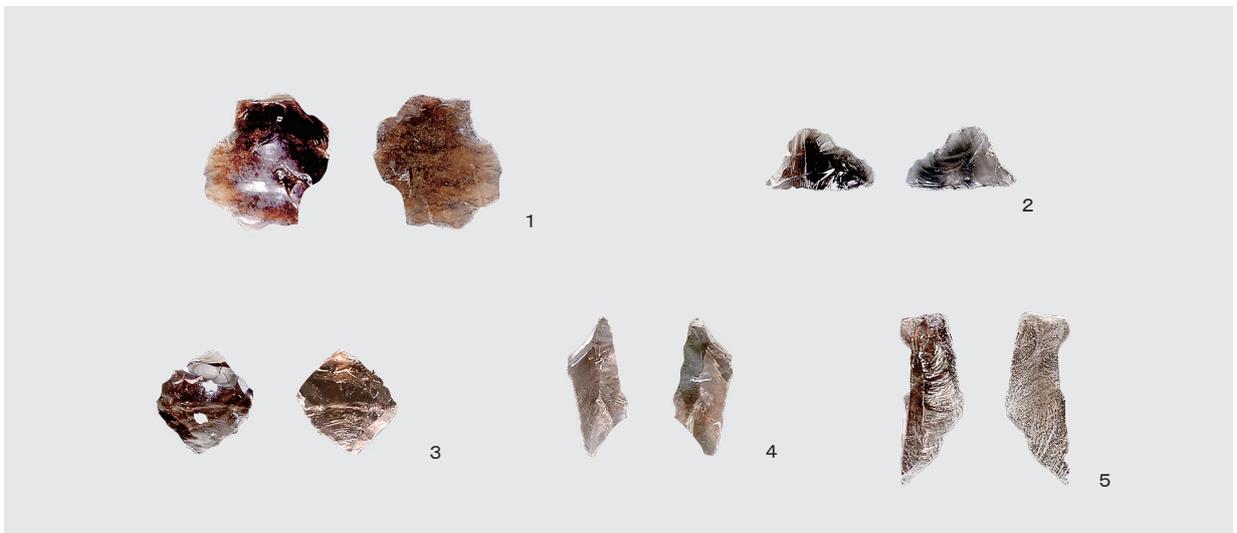
1. 繩文時代遺構外出土遺物 (3)



1. 弥生時代後期～古墳時代前期遺構外出土遺物



2. 奈良・平安時代以降遺構外出土遺物



3. 自然科学分析黒曜石遺物

報告書抄録

ふりがな	にしはらおおつかいせきだい 223 ちてん							
書名	西原大塚遺跡第 223 地点							
シリーズ名	志木市の文化財							
シリーズ番号	第 83 集							
編著者名	尾形則敏・徳留彰紀・大久保聡・坂下貴則・遠藤知成・小森暁生							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒 353-0002 埼玉県志木市中宗岡 1 丁目 1 番 1 号 TEL048 (473) 1111							
発行年月日	令和 3 (2021) 年 7 月 30 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (全体面積)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(°′″)	°′″			
にしはらおおつかいせき 西原大塚遺跡 (第 223 地点)	しきしざいわちよう 志木市 幸町 2 丁目 6158-2、6159-1、 6160-1、6161	11228	09-007	35° 49′ 33″	139° 33′ 59″	20200409 ～ 20200619	366.93m ² (1,105.05m ²)	分譲住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西原大塚遺跡 (第 223 地点)	集落跡	縄文時代 弥生時代後期 ～古墳時代前期 奈良・平安時代	炉穴 1 基 土坑 6 基 住居跡 7 軒 溝跡 1 本	住居跡 2 軒 溝 1 本	なし 土器・石器 土器・土製品 土器	土器・銅製品・鉄製品 なし	56 M は環濠 の一部と想定 される。 27 H から落 合型坏が出土 した。	
要約								
<p>西原大塚遺跡は柳瀬川の南東、武蔵野台地北東端に所在する旧石器時代から近世までの複合遺跡である。第 223 地点は遺跡の中央部やや北側に位置し、調査では縄文時代、弥生時代後期～古墳時代前期、奈良・平安時代の遺構が検出された。</p> <p>縄文時代調査では、時期不明の炉穴 1 基と土坑 1 基、中期前半から後期前葉にかけての土坑を 5 基検出した。</p> <p>弥生時代後期～古墳時代前期では、住居跡が 7 軒と溝跡 1 本を検出した。中には凸堤が付帯する貯蔵穴と赤色砂利層が認められるものもあった。溝跡は周辺の遺跡で検出された環濠と連続すると想定される。また、遺物としては住居跡から、土製勾玉が出土している。</p> <p>奈良・平安時代では住居跡を 2 軒、溝跡を 1 本検出した。住居跡はいずれもカマドが北壁に設けられる。遺物は須恵器と土師器の坏形土器や甕形土器などが出土し、落合型坏が確認できた。溝跡は周辺の遺跡で検出された溝跡と連続すると想定される。</p>								

志木市の文化財 第83集

西原大塚遺跡第223地点
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発行日 令和3（2021）年7月30日
印刷 関東図書株式会社